

1 序文

序文

高校時代、未完成に終わったギャルゲー制作。
本小説は、その仲間に捧げる。

2024年6月8日

初恋と後悔

一章

退屈で形式的な始業式は例年通り終わった。小中高と何度も経験してきたものだが、何度経験しても無意味だと再認識する。しかし、大抵その後の出来事のせいで忘れてしまう。大人になればなるほど無意味な事を“しょうがない”と受け入れられるようになって、考える事を放棄するようになっていく気がする。

みんなが“しょうがない”と受け入れるせいで世の中の問題点は一向に改善しない。改善しようとすれば同調圧力に潰される。そんな世界で人生の最後に、理不尽なことも悲しみも苦しみも怒りもすべて“しょうがない”と受け入れて死ねるのだろうか。

教室で窓の外を眺めながら、俺が思考の迷宮に入りそうになった時、後ろから聞きなれた声が聞こえた。

「ねえ、夜彩」

背後からだ。振り返るとそこには俺の知り合いの芝浦 紗恵がいた。

“芝浦 紗恵”との出会いは高一の時、彼女が俺の隣の席でよく絡んできた。彼女は

ライトノベルやアニメといったサブカルチャーが好きなようで、その分野に関して、最低限の知識を持っていた健全な俺は基礎的なアニメとラノベの知識を小一時間ほど話した。が、紗恵という子はまるで同類を見つけたかのような目で俺を見つめてきたのだ。

そこから今までこんなのだらとした友人：いや知人関係を続けている。

「この後予定ある？」

紗恵は首をこてりと曲げて聞いてきた。

「無いけど？」

「それなら、一緒にゲーセン行かない？」

「ゲーセン？」

俺は思わず聞き返した。

紗恵は良くゲームセンターに行っているし、俺も何度も連行された。だが、いまだに俺はあれの良さがいまいちよくわからない。ゲームがやりたいなら買い切り制の家庭用

ゲームの方がよっぽどコストパフォーマンスが良いでは無いか？なぜ、一回に百円も投入しないといけないんだ？そもそも人も多いし、ゲームなんて一人で家でじっくりやるものだ。

「お断りだ。そんな時間があるなら株価チャートを眺めていた方がよっぽど建設的だ」
紗恵はうわーと若干引き気味のポーズを取っていた。その案を潰すなら今がチャンスだ。

「大体昨日も連行されたぞ」

そうだ、昨日はそのせいでF R Bの量的緩和のニュースをリアルタイムで見れなかった。俺たちがゲーム機に百円をぶっ込んでいる間にアメリカの中央銀行が市場に六千億円ほどぶっ込んでいたんだぞ。ゲーセンなんて仕事の生産性を落とすんだ。

「まあ…ね？」

紗恵は不満そうな顔をして矢継ぎ早に言葉を並べて説得しようとした。

「ほら今日、午前授業でしょ？」

「私暇でさ、ゲーセンにでも行こうかなうって考えたのよ」

「それならついでに夜彩でも誘おうと思ったわけ」

さあ、どこから突っ込もうか。今日は午前授業ではなく終了が十三時だという事実か。

暇ならゲーセンに行くという発想か。なぜ“ついでに人を誘う”のか。そしてそのついでに選ばれた人がなぜ俺なのか。それらの疑問から導き出される答えは一つだ。

「なるほどね、つまりお前はぼっちなのか」

そういうと紗恵は俺に哀れみの目を向けてきた。

「特大ブーメランを投げてでもダメージを食らわないあたり流石ね」

と、言ったのち彼女はコホンとわざとらしい咳払いをした。

「まあ、少しでも暇つぶしになればいいのよ」

暇つぶしになるなら俺の意向は無視なのかこいつ…。

「さいでございますか」

俺はゲンナリした顔で答えた。

「さいでございますよ」

紗恵はまるでふざけた子供がするような目で言った。

そんな生産性のかけらも無い話を続けていると担任が入ってきた。

担任、遅い、時間守れ、お前それでも社会人か。

「遅れてすみません」

社会人見習いの担任がペコリと謝る。

おい、担任、謝罪は言葉だけじゃないだろ、一番大切なのは誠意だろ、誠意のない謝罪なんて逆効果だぞ。

と、そんな俺の思考など知らない担任は表情を変えて用件を言った。

「えー皆さん、突然ですが転校生がくることになりました」

また、いきなりだなと思った。先ほどの遅れを隠蔽するためだろうか。何かしらの疑惑が出たら新しい話題を出してマスメディアをそちらの話題に誘導する。典型的な悪質な政治家かな？

「転校生？」

「突然だな」

「どんな奴だろう？」

と俺の思考をよそに世論の皆様方は転校生の話題に持ちきりになっていた。こうやって民主主義は操られるんだな。俺も印象操作には気を付けないと。

とそんな深入り想像をする俺とは正反対の紗恵は転校生の話題で少しテンションが上

がっていた。

「転校生かあ。ねえ夜彩、どんな子だと思う？」

「期待するだけ無駄だろ」

ライトノベルじゃあるまいし。俺はコンマ数秒で答える。下手したら紗恵が言い終わるより前にフライングしていたかもしれない。

無駄と答えると紗恵は哀れみの表情を向けてくる。なんか社会に適應できないニートを見るような目付きだ。仕事でも紹介してくれるのかな？

「では、入ってきなさい」

担任が言うのとドアが空いて転校生は入ってきた。

驚いた。だって、本当に“金色の美しい髪をした青い瞳”の少女が入ってきたから。

全く関心が無かった俺でさえ思わず見てしまう程の異質さだったからだ。

「外国人！」

「綺麗だなあ」

名もなき生徒の皆様がまるでお約束のようにコメントをしてくれた。語彙力なさ過ぎだろ…。コメンテーターなんだからもう少し頑張ってコメントしようぜ…。

まあ、語彙力が死ぬのも無理がないかもしれない、それほどの少女だったから。

でも、あいつら担任の「転校生がくるよ」って時も語彙力死んでるコメントしたからサンプルとしては使えないな。

「皆さん静かに。では、自己紹介をお願いします」

印象操作の教員免許をお持ちの我らの担任が盛り上がりをもせる生徒達を静かにさせた。流石世論を動かすプロフェッショナル！

「クリスタ・アレンスです。気軽に“クリス”と呼んでください」

生徒がシーンと黙ったタイミングで金髪少女は凜とした声で名乗った。

クリスタか……。ドイツ語・英語・デンマーク語などの女性名だけど名前だけでは国籍を判断するのは困難だろう。ドイツかデンマークかもしれないが英語を公用語にしている国だってあるし。実は日本人でしたENDも考えられる。

「クリスタさんです。皆仲良くするように」

担任がお決まりのセリフを言った。そのセリフに気持ちを込めて言った担任少数派説。
「はい」

生徒達は小学生みたいな返事をした。お前らボットかよ……。お前ら置くよりスマート

スピーカー置いたほうが良いんじゃないの？

そんな事はどこ吹く風。担任の関心は転校生の席の位置に移ったようだ。

「席はそうだなあ……芝浦の隣だな」

雑！とにかく雑！事前に考えとけよ！

いや、事前に考えていたのかもしれないけど、だとしたらなんで今思いついたような態度なんだ。あれか、勘で儲けられる天才投資家かな？今時勘に頼る個人投資家より、コンピューターを使ったアルゴリズム取引の方が儲かるし信用できるんだよね…。

とにかく勘なんて信用できるものじゃないぜ。

「芝浦、頼んだぞ」

担任がバッチグーという感じの勢いで紗恵にいった。紗恵もお任せあれーみたいな顔して「はい！」って言ってるし…。

紗恵：お前：それ仕事増やされてるんだぞ…。紗恵は社畜属性持ちなのかもしれない。その少女は言われた席に行くために俺の横を通る。凄く綺麗な人だし、きっと一生関わらないだろう。そもそも女の子という時点で俺とは接点が発生しないだろうし、男子であつても接点はない。よって俺は余計なリソースを使わずに済む訳だ。あ、転校生が

動物なら嬉しいけどな！人嫌い！

コミュニケーションとかいう難題はその道の専門家に任せよう。と思いクリスタさん
のご担当の紗恵を見ると案の定「私は芝浦　紗恵。クリスちゃん、これからよろしく
ね」とか言っていた。流石専門家。

「はい、よろしく願います」

クリスタさんもコミュニケーション能力はちゃんと持っておられるのか、形式的な返
答をしていた。うむ、面倒なやつではないっぽいかな。

一安心して机に突っ伏して寝ようかと思うと後ろからツンツンと誰かに突かれた。思
わず

「お休み中に仕事の連絡するのはやめてください、労働時間中にやってください」

と言いたくなってしまうような事をされたので気怠そうに振り返ると、紗恵がいた。
目線でクリスタさんと俺を見ている。どうやら俺も挨拶しろという事らしい。

本当なら挨拶をせずに済むのであればそれで良かったが、生憎こういう状況になって
しまうと挨拶せずに終わらせるのも難しいだろう。むしろ、この状況で挨拶するのを拒
否するのはあまりに印象が悪いし、場合によっては敵対的な行動とも取られかねない。

人と敵対するほど無駄で誰も得しない行為は無い。

「俺は、夜彩凜です」

形式的な挨拶。挨拶とは敵対心がないという意味表示なのだという。

が、

「……」

クリスタはこちらを向いていたのに、何故かそっぽを向いてしまった。うーん、あちらはこっちの事をよく思っていないのだろうか。それとも敵対しても問題無い程度の間と捉えたか。そもそも男子が苦手という可能性も考えられる。真相は分からないが、あちら側がこちらに良い印象を持っていないのであれば深入りするのは得策では無い。

自分を嫌う人間がいるのであればそいつとは距離を取るべきだ、それが一番お互いのためになる。

そこに女子生徒がクリスタさんのところにやってきた。

「ねえ、クリスちゃん」

クリスタは待っていたかのように

「はい。何でしょう？」

と答えて他の生徒と話始めてしまった。

俺としても、ありがたい。そう思い俺も机に突っ伏して先ほど中断された仮眠の続きを始めた。

二章

本当にうるさい騒音だ。ゲームセンターというところに行く人は修行僧なのだろうか？すれ違う人は悲壮感に溢れるボッチとイチャコラしているリア充カップルだけだ。ボッチはカップルを妬みと憎悪に満ち溢れたような目で見て、カップルは周りの迷惑など考えず自分たちだけの世界を作り出していた。

持つ者と持たざる者、この世の中の格差社会の縮図のようだ。カップルは幸せに幸せを積み重ね、幸せを増やしていく。ボッチは憎悪に心を蝕み、自尊心を保つためによりカップルを憎悪する。

俺は学校の終わりに紗恵に半ば強制的にゲームセンターに連れて行かれた。側から見れば俺も持つ者、カップルに分類されるのかもしれない。周りからしばしボッチの殺意すら感じる憎悪を感じる時がある。

「まだ、続けるのか？」

俺は思わず聞いてしまった。楽しそうにゲームをしていた人間にそのような事を言う

のは気が引けるが、元々俺を誘ったのは紗恵だし。俺にも主張する権利はあるはずだ。

「えー。もう、帰るの？もうちょっとやっていこうよ」

紗恵の甘ったるい砂糖のような声で俺の主張を溶かしにかかる。甘ったるい砂糖が原因で結果的に歯が溶けるように、甘ったるいものには必ず副作用がある。つまり、女の子の甘ったるい態度を信用してはいけない。男とはまた違う信用のなさがある。

などと俺は呑気に思考を進めるが、そろそろ限界だ。騒音で死にそう。光で死にそう。人で死にそう。一刻も早く帰りたい。

「冗談じゃない。俺は修行僧じゃないんだ。ここは、うるさい・まぶしい・人邪魔の3拍子が揃ってるんだぞ」

紗恵は俺の話を半ば引いたような顔をして聞いていた。話を終えると紗恵は軽くため息をついてこちらを覗き込むように目を合わせてきた。

顔が近い。自然と俺の体勢が引き気味になる。トクン、目が合うとそれは心の中に潮騒を起こした。いつも見慣れた顔もすごく美しいものに見える。違う、すごく美しかったが、俺が気付いていなかったと考えるのが自然だ。大切なものかけがえの無いものは近くにあって気付かないとよく言う。いつも見慣れた紗恵だからこそ、ちゃんと向き合

うと気付く発見があるのかもしれない。

余計なことを考えてしまつて、思考が定まらない。とにかく目の前で覗き込む紗恵に何か言わなくてはならない。女の子と話すといつもこうやって頭が真っ白になる。良い気分はしない。

「あー…」

何かを言おうと思つて、無意味な繋ぎ言葉を発した。我ながら見苦しい。

そうしているうちに、紗恵はいつもの表情で笑つた。俺と少し離れると

「女の子には気を付けないとだね」

いつもの調子の声色だった。だから声からは真意は推測できない。表情も同様だ。紗恵は手を後ろに組み、少し首を曲げる、そんな体勢だ。顔は恥ずかしいのか少しだけ赤かった。そのまま少し後退りしてから、ゲーム機の方へと向いた。

こいつ、普通にゲームを始める気かよ…。紗恵の言う通り、女の子には気を付けよう、帰る案もうやむやにされたし。でも、あんな顔をされると本当に言いづらい。いつも通りでいてくれれば、俺もいつも通りに接することができたのに。

「そういえば夜彩」

紗恵も、この空気感に耐えられなかったのだろうか。ゲームをしながら振り向かずに俺に話しかけてきた。

「はい？」

俺も話しかけられたら、答える。無視は良くない。

「クリスマスちゃんの事だけだよ…。何で夜彩の事だけ無視したのかな？」

「お前が既に理由言っているじゃないか」

「え？ どういう事？」

「何で“夜彩の事だけ”無視したのかな？」

「え、あ、自覚あったんだね」

「そうだ、俺を好く人間なんて少数派だぞ」

証明完了。ここまで綺麗に証明できるとは我ながら感嘆だ。しかも、根拠に絶大な説得力がある。俺を嫌う人はいるし、時々憎悪する奴もいる、最低でもクラスの人気者になるような爽やかな人間ではない。

「確かにそうだけど…。でも、クリスマスちゃん会ってすぐだよ。夜彩の事を何も知らないはずだよ」

「所謂、女の勘なんじゃないの？」

「夜彩、顔だけは良いからね。外見じゃあ推測できないと思うけどなあ」

「そうだったか…。俺、詐欺師に向いてそうだな」

「そんな事言わないようにして、性格直せば、夜彩だってモテモテだよ」

モテモテだと…。あれか、ハーレムってやつか。ハーレムものって作品の関係上、主人公以外の男子があまり描かなれないけど、絶対裏で主人公の陰口言ってるさ。

そんな事を、考えて「モテモテだよ」のタイミングで一瞬振り返った笑顔の紗恵を見るとふと疑問がよぎった。

「というか、すごいな。この性格でも紗恵と友達になれる程の顔なのか」

「え？ いや、性格の割に顔がいいって事」

紗恵はさらりと言った。普通の男子なら女の子にそんな事を言われたら絶望していただろう。それに、偏見が凄すぎる、俺みたいなやつはみんな外見が良くないのか。それ、ヘイトスピーチじゃないですかね…。

だが、これで更に謎が深まった。外見が普通で性格がこれなのに、どうして紗恵は友達でいてくれるのだろうか。俺を騙したり嵌めたりしようとしているのだろうか？ でも、

俺は一年生の時に紗恵から被害を被っていないし、そもそも俺を騙すメリットがない。

どういふ事なのだろうか。うーん。可能性を探しては潰して考えてみるが、納得のいく可能性は見つからない。

結局、答えが思い浮かばず、回答欄を空白のまま、紗恵の方をみる。気付けば、紗恵はゲームを終えてこちらを向いていた。紗恵はきよとした顔でこちらを見た後、なにかを察したようだ。

「夜彩は面白いからだよ」

なるほど、そうきたか。性格が面白いから許すパターン。大変珍しい事案だな、これ。

「そいつはありがたい」

そうだ、嫌われるよりはよっぽどありがたい。嘲笑だったとしても。

「夜彩は難しく考えすぎだよ。私はもう少し気を楽にしても良いと思うな」

紗恵は寂しそうに微笑みながら言った。少し声のトーンは落ちていた。紗恵は、俺の事を案じて言ってくれたのかもしれない。もしかしたら、案じてくれてはいないのかもしれない。紗恵がどういふ気持ちでどういふ意図で俺に伝えているのか分からない。

仮に100%に限りなく近くても、100%じゃない限り、残りの可能性を完全に否

定する事はできない。ましてや俺だ、算出した確率があっている保証も無い。

多分、紗恵は俺がこうやって考え込む事自体を“難しく考えすぎ”と言ったんだと思う。それは正論で優しく暖かい。互いに信用しあえる関係がもしあればそれは本当に素晴らしいかけがえのないものだ。

でも…でも俺は…

「それでもちゃんと考えた方がいいだろ」

そういうと紗恵は軽いため息をついた。

「夜彩らしい答えだね」

紗恵はそう言った。声色は平坦で表情は相変わらず寂しそうな顔をしている。俺の答えに失望したのだろうか？それとも…。

俺が頭の中で思考の迷宮の入り口に辿り着くと同時に、紗恵はなにかを指差していつもの笑顔で言った。今までの会話の空気を振り払うかのように。

「夜彩、一緒に格ゲーやらない？」

いつもだったら拒否していたが、今日は何故か拒否する気が湧かなかった。

「分かった」

人生、格ゲーのようにコンボが起きたら不自然で怖いけどな。いつかコンボが終わってダメージを喰らうんじゃないかって思うから。

三章

夜の街には沢山の人がいた。一人の者、複数人の者達、男、女、老人、若者。

すれ違うたび、もう一生会わないであろう彼らの事をおもった。彼らにも一人一人、人生がある。数え切れないほど喜んで、数え切れないほど悲しんで、多くの人と接したかけがえのない人生だ。

自分の人生をどうとらえるのかは人それぞれだ。でも、自分の今までの人生の重みは自分自身が一番良く分かっているはずだ。災害や事件・事故で人が死ぬと死者数や顔写真が出る。数値や写真を出しても、人生は表せない。

街を抜けて駅につき、帰路ための電車に乗るため、改札口を通る。習慣化された作業。家に帰る時には電車に乗るために必ず押す。特に意味のない作業だが、この瞬間は二度と戻ってこない。後でいくら後悔しても。

ホームに着くと、人はまばらだった。今日は何かあるのだろうか？と思ったが、特に大きなイベントも無いし、金曜日なわけでも無い。まるで嵐の前の静けさのようだった。

空には何も言わずに月が浮いている。何かを言いたそうなのにも見えるその物体は動かずにただ大地を見守っていた。今では月は岩の塊だと知っているが、古来から人類はその岩の塊になんらかの神聖な意味付けをしようとしてきた。困っても、悲しんでも、辛くても月は助けてくれない、何もしてくれないのに。人類はそれでも月を神聖化しようとした。

電車が来る。電車によって発生した人工的な風は俺を包み込むように流れた。自然の風のような暖かみは無かった。でも現代人にはこっちの方が相応しいのかもしれない。

電車のドアが空き、人が降りる。最初に急いでいる人が降りて、その後、普通の速度の人がぞろぞろと降りる。そして、ドアの横で待っていた人の先頭が乗ろうとすると、駆け足で電車から降りそびれた人が降りてきた。先頭の人は嫌そうに止まり、待っている横に並ぶ人々も迷惑そうな視線を送る。

急ぐ人、普通の人、遅れる人。日常の一部分でも人々が集まれば違いが生まれる。

待っていた横の人は一人一人順番に従って、乗っていく。順番に従わなければならぬ法的根拠は無い。でも、従わなければ、普通ではなくなってしまう。常識と普通は義務と権利の関係だ。

俺も普通の権利が欲しかったため、常識という義務を払い、順番に従う。

ここは全員常識で普通を買ったようだ。しかも、普通というのは厄介で、時と場合によって変わる。自分が普通だと思っても、周りが普通だと思わないと、それは価値が生まれない。

ホームに人が少なかったせいか、電車の中も人はまばらだった。人というのは空間に収容人数より少ない人を集めると、ほぼ等間隔で他人と距離を取る。人の常識の一つだ。俺は座席の前に立ち、座席の上の荷物置きにバックを置く。つり革に捕まり、ただゆらりと揺れる電車でもた考え事をしようとおもった。窓から見えるビルは人工的な光を放ち、暗黒に包まれるはずの世界を照らしていた。遠くを眺めように遠くを見つめる。夜空の暗黒に一日の疲労感もろとも飲みこまれるような気分になった。

だが、ゆらりゆらりと等間隔で揺れていた電車がリズムを崩し、大きく揺れる。俺も少しよろけるが手すりをぎゅっと持ち体勢を立て直した。一時停止した動画を再生させるかのような気分でもう一度窓を見ようとした。

だが、これは運命だったのだろうか、偶然だったのだろうか。

ふと俺は横を見た。意味の無い動作。こんなもの数分後には忘れるはずの動作だった。

でも、これは一生忘れない、忘れたくても忘れられないだろう。きっといつかこれ思い出して、後悔するんだ。そう感じた。会いたくなかった。思い出したくなかった。ずっと頭の中の深い底に閉じ込めておきたかった。

蛍光灯の光でさえ、その少女の可憐さを際立たせた。紗恵は間違いなく美しかったが、その少女は違った。その少女の可憐さは普通の女子高生のものではなかった。凜とした佇まいとその儂げな表情は廃墟を背景にすれば本当に絵になる。いや、もう既に絵になっている。少女は1人窓を見つめていた。俺と同じように考え事をするかのように。悲しげな視線の裏側に彼女は今何を思っているのだろうか。

その少女は目線に気づいたのだろうか、考え事をやめこちらを向いてきた。媚びたような可憐さは無いが、ガサツな程の雑さも無い、そんな動きだった。

俺はその少女を正面から見て、ずっと思いつかないようにして記憶にかけた鍵がいとも容易く壊れた。俺は今どういう表情をしているのか分からない。知りたくない。

その少女も俺を覚えていたのだろう。心底驚いた表情で俺の顔を見つめていた。こんな状態でさえ気を抜くと見惚れてしまいそうになる。

数秒間見つめ合い固まる。数秒が永遠に感じる。視界が目の前の少女以外シャットア

ウトされ世界が固まる。出会う前と後の世界、この数秒を挟んで別の世界なのではないか、そんなことさえ考えた。

「おひさしぶりです…夜彩先輩」

少女は挨拶をして、少し考え込んだ後、俺を見て言った。先ほどの驚いた顔とは違い窓を見つめていた時のような儚げさも含まれていた表情だ。俺の事を夜彩先輩と呼ぶ事に抵抗があったのかもしれない。いや、あったのだろう。だって、こいつが俺に敬語を使うのなんて初めてだ。事情があるにしても、敬語を使うなんてな。四年という歳月で人は大きく成長するのだ。

「久しぶり…はな…いや雪憐」

相手がわざわざ名字で読んだのに、こちらが名前で呼ぶわけにはいかない。それにもう四年前とは違うのだ。

現に雪憐^{せつれん} 花乃^{はなの}は俺の呼び方を変えた。先輩のくせに分かってても四年前の癖で言い間違えそうになってしまった自分が恥ずかしい。

雪憐に言いたい事は山程ある。聞きたいことも山程ある。でも、こんな電車で聞くような事じゃない。落ち着いた時に落ち着いた場所で話すべき事だ。

お約束の挨拶を使ってしまった我々は話す事…いや、“話しても問題が無い事”が無くなってしまい、再びお互いが固まる。雪憐も居心地が悪そうな顔をしている。

ここで知らん顔をしてもう一度窓を見る選択肢も俺にはあつたかもしれない。それは決して不可能では無い選択肢だったはずだ。でも、俺はその選択に激しい嫌悪感があつた。このまま、また無理矢理記憶に鍵をかけるのは違う。ちゃんと考えて向き合うべきだ。

話を止めることも進めることもできない。たかが数秒でさえ永遠に感じるこの場面であつた以上この時間を進めたくなかつた。事柄を止めても時間は躊躇無く進む。とても残酷な事だと感じた。

ふと、雪憐が口を開けて何かを言おうとする。雪憐の柔らかそうな唇が動く。傷が一つ無く自然な色の健康的なその唇は雪憐の唇にふさわしいものだった。

でも、俺はいいのか。雪憐は当たり前障りの無い事を言うはずだ。雪憐は本当にやさしい女の子だった、最低でも四年前は。だから、雪憐がこの場にふさわしい話題を出してくれる確信があつた。だが、雪憐にこの場面を任せていいのか。俺と同じくらい雪憐も辛いはずだ、苦しいはずだ。それを俺は放棄して、目の前の少女に委ねようとしている。

それに…これは4年前の俺が招いた結果だ。男として先輩として幼馴染としてかつての親友として…人として…。これは俺が話を始めるべきだ。

「雪憐、それ、日成坂高校ひなりざかの制服だけど、新入生なのか？」

だから、雪憐が何かを言い出そうとした時に俺が早口で切り出した。俺が話し始める
と雪憐は申し訳なさそうに俺の話を聴き始めた。

だが、言い終わって、しまったと思った。だって、俺が日成坂高校の生徒なのを雪憐は知っていたはずだ。分かっている入学したんだ。だから、これはすごく愚問で失礼な気がした。これじゃあ、まるで俺が四年の年月で雪憐を忘れたように見えてしまうのでは無いのかと思った。

話し始める前は俺が話し始めるべきだと思った。それが最善の選択肢だと信じた。俺が話し始めなければ、きっと俺はその選択を後悔するだろうから。でも、蓋を開けてみれば、最善の選択肢を選んでも後悔した。いつだって、選択は後悔を生む。例えば、どんなに良い選択だったとしても。

雪憐は俺の質問を聞き終わると、自分の制服を見てその後俺を見て言った。

「そうですよ。先輩と同じ学校です」

凜とした眼差しで問いに答えた。まるで、自分への戒めとも取れる重い重い声色だった。雪憐も、俺と同じように考えて最善の選択したのだろうか。雪憐はこの答えに一体どんな気持ちを含めて答えたのか。

「そうか」

俺は少し目を逸らしてぶっきらぼうに答えた。何か、言おうかとも考えた。何か、話題を広げようかとも考えた。でも、どれも後悔しそうで、リスクが大きすぎた。考えた末、雪憐の凜とした眼差しに対して自分が後悔するような選択をするのは失礼なんじゃないかと思った。

だから、少し目を逸らした。目を見つめることも出来ず、かといって、相手は向き合おうとしているのに自分は向き合えていない罪悪感から完全に逸らすことも出来なかった。

言い終わりと、また静寂が訪れる。本当にぎこちない会話だ。俺はまた雪憐の方を向くと、雪憐は俺のことをじっと見ていた。

何か言わなければ……。数秒前に考えた事をもう一度考える。でも、数秒前の後悔は鮮明に頭に焼き付いていて離れない。どの話題も他意や後悔が含まれているような気がし

て、選べない。どれを選んでも不正解な気がして仕方がない。いや、どれも不正解なんだろう。どれを選んでも、俺は後悔する。

そんなことを考えていた俺を見ていらなかったのかどうかは分からないが、雪憐は俺から目を逸らして、窓を見た。窓には相変わらず夜景と夜空が広がっていた。雪憐の視線はまるで最初の時のような儚げで切ないものだ。

「先輩は元気にしていましたか？」

窓を見ながら雪憐は俺に問う。久しぶりにあった人間に言う台詞では定番なのかもしれない。しかし、今の状況において社交辞令で済まされないことはお互い分かっていた。俺が先程使うべきか検討した話題だ。でも、俺はその問いは愚問だから聞かなかった。だって、答えは決まっていたから…。

「元気なわけないだろ」

久しぶりに会った人間に「元気か？」と聞かれて「元気じゃない」と答えるなんて間違いだ。でも今この状態で元気だと答える選択肢は大間違いだ。比較的間違いでは無い方を選んだ。なぜなら、元気と言えば、雪憐の事を気にしてないように聞こえるし、ましてや俺が原因なのに、元気だと答えるのは無責任にも程がある。それに、本当に俺は

元気では無かった、嘘は言いたくない。

雪憐は俺の方を見る。俺の答えは正解だったのだろうか、分らない。でも、雪憐は少し、満足したような安心したような表情をしていた。そして、また雪憐は窓を見た。

雪憐の窓を見る視線は俺を少し見る前の時より上になっていた気がした。

四章

午前授業が終わり、クラスは喧騒に包まれた。なんか、“北斗〇拳”の最初みたいだな。“1999年、クラスは喧騒に包まれた。”ってな。うわ、つまんなさすぎる。

脳のリソースを大変無駄遣いしてしまった。よく人工知能の研究者は人間の脳は凄いや、というが、例えばどんなに凄くても人には優劣はあるしリソースも有限だ。人生と脳のリソースが有限である以上、人間が永遠に思考を続ける事はできない。人は人生のうちに膨大な数思考をするが、それでも“人生のうちに一度も思考をしなかったもの”は存在する。なぜなら、思考出来る事は無限に存在するからだ。よって、思考に時間を使うのであれば、有意義な事に使うべきだ。俺も改善していかないといけないな。

そんな事を考えながら、バックから弁当を取り出そうと、チャックを開けて、ふと思いついた。昨日、電車で再会した雪憐……。あいつ、ちゃんとご飯友達と食べているのか……。小学校の時は俺にベッタリだった。もし、あの調子のままだったら、友達なんてできる訳ないだろう。だが流石に、四年という歳月が人を変えるのは昨日の電車で証明

済みだ。しかし、それはそれで自分で友達を作る雪憐というのは興味を持つ。

覗いてみるか。我ながら気持ち悪いのは自覚しているが、興味があるのだから仕方がない。それに後輩である以上今後接点は持つだろうし、万が一友達ができていないならたとえ助けを求められなくても助けたい。どうせ後悔するなら楽しそうな方を選ぼう。

バックか弁当を取り出して手に取ると、後ろから紗恵がツンツンと背中をつつついてきた。

「なんだ、こいつ、昼の休憩まで俺に労働させる気なのか？」

「夜彩！心の声丸聞こえだよ！」

後ろを向くと、紗恵が驚いたようなオーバーアクションで言ってくる。

「ああ、ごめん。つい本心が…」

「え？えーと、友達やめていい…？」

「なんでそうなるんだ。会話は労働のうちに入るだろ。苦痛なものはすべて労働だ」

「それ、夜彩だけじゃないの？」

「そういう考えが日本社会を駄目にするんだ。これは労働じゃない…あれは労働じゃない…。だから、日本は残業代が出ないんじゃないのか？一人一人の認識を改めない限り

社会は良くなっていかないぞ」

俺はビックリするくらいの正論をぶつけた。そうだ、よく言ったぞ、俺。みんなが

しょうがないと思うから、飲み会の半ば強制参加がなくならないんだ。飲み会なんてあれ完全に労働だろ、なんで労働時間外まで職場の人間関係を続けなくちゃいけないんだ。

紗恵からは納得のお声をいただきたいが、なかなか返事が返ってこない。あれれ、おかしいぞと思い見てみると、紗恵は蔑んだ目でこちらを見ていた。なんというか、電車で下半身を露出させた不審者を見るような目だ。が、蔑んだ目だけではないようだ。後ろにはメラメラと静かだが熱い怒りを感じた。炭って一見燃えてなさそうに見えて実際はちゃんと燃えている時があるが、そんな感じの怒りだ。

「キモ」

ついに出了したねSSR。今ドM中年サラリーマンがJKに言われた言葉ナンバーワン。しかし、少し時間を置いたあたりリアルだったな。多分、紗恵も流石に迷ったんだろうけど、今回は怒りが抑えきれなかったのかもしれない。確かに、俺のような思考型陰キャボッチに一番効くのは煮詰めた理論よりシンプルで強烈な感情だ。流石紗恵、よくわかってらっしゃる。オタクの方々そういうタイプ多そうだもんね…。いや、デー

タが無いのに推測するのは偏見だな。機会があれば統計をとって調べてみたい。

だが、俺もこの性格を伊達にやっているわけではない、この手の対策は既に経験済みだ。ダメージを食らうどころかむしろ教科書通り対策をしてくれてありがたいと思った。こちらが理論でいっているのにあちらが感情を出されたのでは議論にならない。サッカー選手と医者进行比较するようなもので、優劣をつける絶対的基準が存在しない以上無意味なことだ。それに理論は例え詭弁であったとしても、根拠と論理立てが必要だが、感情にはそれらの手順がいらぬ。そういった意味では感情の方が圧倒的に強い。これは無意味な負け戦に時間をかけるのは得策では無いだろう。打ち切るか。

「"キモい人"とは一緒に食べない方がいいんじゃないか？」

「そうする。せつかく誘ってあげようと思ったのに…」

「俺は前に拒否しただろ。それ以上は自己責任だ」

紗恵は善意で誘っているのだと俺は推測している。確かに、今回の会話だけ見ると俺が紗恵の善意を無神経に踏みにじったように見えるが、それは違う。前に誘われた事があってその時はある程度丁寧な断った。そして、俺は紗恵と食べない意向を伝えたはずだ。拒否したのに続くのであればそれは善意ではなく悪意だ。悪質さの程度は違うが、

ストーカーが被害者のポストに金銭を入れるのと同じ事だ。その悪意を続けるのであれば、それ相応の対応が取られるのは仕方がない事だろう。そういった意味での“自己責任”だ。

紗恵は聞き終わると何も言わずに立ち上がり、他の女子の友達のところに行ってしまった。なんであいつは友達がいるのに俺に構うのだろうか。友達がいるのであれば俺に構うメリットは無いはずだ。理に反した行動で理解に苦しむ、紗恵にとって俺はこんなコストを払ってでも友達関係を続けたいほどの人間なのだろうか。紗恵や普通の人が持っている価値観は俺に無いもので興味をそそられる。

：そうだ、俺は雪憐の様子を見に行こうと思ったんだ。

弁当を持つと少し駆け足で教室を出た。

一年生の教室は一階のはずだ。階段を降りていると、ふと気が付いた。雪憐は何組なのだろうか。雪憐が入学してきたのを知ったのは昨日だし、昨日はあの後雪憐とは何も話していないから、何組かなんて聞き出せていない。文字通りノーヒントだ。というか、お弁当を持っていくあたり大変自分は気持ち悪いな。なんか、好意を向けられてないのに勘違いで彼氏ズラするやつみたいで。置いとくべきだったか…。教室も人が多くて不

愉快だし探し終わったら一人、屋上で食べよう。

一年生の教室の前に着いた。早速調べるか。本来なら聞き込みをしたいが、入学したての新生に知り合いいはない。さらに言うと同級生にもほとんどいいない。それに新生に下手に聞いて、変な噂が生まれると面倒だし、その後雪憐と接触しづらくなる。

どうしたものか。教室に殴り込んで一人一人確認してくか。新生であれば校内もよく知らないし、友達を作るために教室にほぼ全員いるはずだ。だから、一番手っ取り早くて確実だ。しかし、用も無いのに教室に殴り込んで見渡して帰ると言う動作は少し不審過ぎるのでは無いかと思った。

そうか、用が無いのなら作れば良いのでは無いか。そう：俺は風紀委員なのだ。

風紀委員会とは、アニメやゲームだとまるで警察のような強力な権限を持っていたりするが、大抵の高校は名前がたいそうなだけで結局なんの権限も無い残骸化された組織だ。我が校も大抵の高校の一つなので、労働時間ほぼゼロを実現している校内屈指のホワイト委員会に仕上がっている。だが、それを知っているのは二年と三年のみ。純粹無垢の新生はうちの風紀委員会がどの程度労働しているかなんて知らないだろうし、これを利用しよう。このタイミングで風紀委員が役立つのは予想外だった。

まず一年一組の教室のドアを開けた。ガラッと開けると新入生が一同にこちらを見てきた。まるで巢に入った外敵を排除するかのようだ。しかも、無意識に排他的な印象を与えているのだから集団心理というものは恐ろしい。既に知り合っている二、三年生とは違い、一年生の教室は静かだった。

「風紀委員です。胡蝶蘭の様子を見にきました」
コチヨウラン

後ろのドアから入り、全体を見つめて言った。一対少人数だと、俺以外の人と話始めて俺が余り結果的に話さないが、一対一、一対大人数なら大丈夫だ。前者は強制的に話し相手が俺になるし、後者は大抵、演説やスピーチのたぐいだから問題無い、俺がやりたいようにやればいい。

最初、一年生たちは見ていたものの、事務的な事だったためか、興味を失い個々がそれぞれの事を始めた。排他的な雰囲気が無関心な雰囲気に変わったのだ。無関心の雰囲気という悪印象だが、俺の中では“自己責任のもとで自由が与えられた”と捉えている。極めて良い雰囲気だ。

俺が花のある窓際に近づいて行く時に全体を見渡す。雪憐はいなかった。一年一組では無いみたいだな。目的は達成したが、口実とは言え何もせずに帰るわけにはいかない。

そう思い、窓際にある花に近づいた。胡蝶蘭は校庭から窓へ差し込む日光を浴びて、何も言わずに一年一組を見守っていた。俺が入学した時からこの胡蝶蘭はあった。胡蝶蘭の寿命はとても長いという。胡蝶蘭は一体何回の一年一組を見てきたのだろうか。喜びもあつたかもしれない、悲しみもあつたかもしれない、争いもあつたかもしれない。でも、それを胡蝶蘭は見ているはずだ。何回も何回も、毎年一年一組という物語を見てきたはずだ。人が変わり内容も違う一つ一つの物語だ。そして一年一組だった俺もその一つなのだろう。

ふと、胡蝶蘭に水をあげて思った。風紀委員として誇りを持った事は無かった。俺は風紀委員の他の仕事はまともにやらなかったし、他の委員も同様だ。でも何故か胡蝶蘭には俺は世話を続けた。ちゃんと毎日朝に様子を見て、水をあげた。でも、だからと言って俺は仕事をしていたとは思わない。なぜなら胡蝶蘭に水をあげることは苦痛では無かったから仕事ではない。

もう、二年になったらこいつの面倒をみれなくなるのか、そう思うと少し寂しいと思う。大切なものは失ったり無くなったりして、初めて気付くのだ。持っているうちには決して実感できない。

こいつは新しい一年一組に面倒を見てもらえるのだろうか……。考えてみると少しだけ不安になった。大切なものを他人に委ねるのは辛い事だ。

一通りの事を終えると、胡蝶蘭を少しだけ触った。葉をなぞるように触る。何も言ってくれなかったが、触るだけで自信を与えてくれた。人は本当に想像が得意だ。胡蝶蘭は何も考えられないのに、仮に考えられても俺に感謝しているか分からないのに、それでも人は勝手に想像して勝手に自信を貰う。

ふと、感傷に浸っていると目的と手段が入れ替わっているような気がした。もしかしたら、雪憐の様子を見る事でさえ胡蝶蘭へするための自分への言い訳に過ぎなかったのでは無いか、そうとさえ思えた。いや、雪憐の様子を見る事は大切だ、ちゃんと目的を果たすべきだ。だが、この胡蝶蘭を見ていると考えないようにしていた不安が押し寄せてきた。雪憐は四年前とは違う。もう四年前の雪憐はいない。俺は変わった雪憐を受け入れられるのだろうか。大切なものは失って初めて気付くのだ、もし雪憐が変わっていたら、俺は四年前の雪憐を失う事になるんだ。俺はその現実を受け入れられるのか？

：分かってる。行こう。俺は全ての思考を停止させ頭から追い出して動き出した。

一年一組のドアを開けて外に出る。次は一年二組か……。そう思い一年二組の方を見る。

だが、廊下は見えなかった。何故なら横に少女がいたからだ。横にいた少女は俺を見るなり目をパチクリとした。俺も思考が止まる。不意打ちはやめてほしいと思ったが、こいつが悪いわけでは無いだろう。こんな事を仕組んだ神様を恨みたい。

「先輩？どうして一年生の教室にいるのですか？」

目の前の少女　雪憐花乃は俺に質問をした。雪憐も大変驚いているようで声色で動揺が伝わってくる。雪憐は一年一組に入ろうとしていた。トイレに行っていたから教室にいなかったのだろう。雪憐の様子を見にきたと正直に言おうと思った。夜彩凜だったらそうしていただろう。自分でも嘘をつけるほど器用な人間では無い事は分かっていたし、嘘をつけば後悔する自分も分かっていた。でも、俺が心配して様子を見にきたなんて、言えなかった。自分から四年前に雪憐を傷付けておきながら、贖罪をせずに心配するなんてあまりに身勝手な気がした。

「窓際の胡蝶蘭の様子を見にきたんだよ」

「そうですか」

雪憐は少し寂しそうな顔をした。そのあと少し前を開けて聞いてきた。言うか迷ったのだろうか。

「胡蝶蘭、とても綺麗ですよね」

雪憐は率直な感想を述べる。でも、雪憐の顔は不安そうだった。正解か、どうか分からない、表情がそう語っていた。氣遣ってくれているのを感じたが、雪憐は嘘を言っているように思えなかった。

「ああ、毎日世話していると愛着も出てくるぞ」

「先輩、一組だったのですか？」

「そうだな。風紀委員で、仕事のうちだったから面倒みていたんだ」

「大切なものですね」

雪憐は空いていたドアから窓際の胡蝶蘭の方を見る。懐かしむその表情に心が締め付けられた。と同時に、疑問が湧いてきた。

「仕事で面倒みたって俺は言ったんだけどな」

「先輩は大切なものをちゃんと大切にしているからです。大切では無かったら毎日世話しません」

雪憐は胡蝶蘭の方から視線を移してまっすぐに俺の目を見て言った。雪憐の口調は少し強く確信を持って断言した。

「そうか」

雪憐の真っ直ぐなその気持ちは俺に自信をくれた。胡蝶蘭を触った時の抽象的な根拠の無い雲のような自信ではなく、具体的な根拠のある自信だった。雪憐は俺をちゃんと信じてくれた、「大切なものを大切にすると」。それは俺の頭の中で錆のように侵食していた後悔を浄化していった。例えば一時的であってもとても嬉しい事だ。だから、一時的に夜彩らしくなくなった夜彩は夜彩とは違う選択をした。

「雪憐、胡蝶蘭をまかせてもいいか」

「え？先輩の大切な物ですよね？」

雪憐に問われ、俺は窓際にある胡蝶蘭の方を向いた。日光に浴びたそれに懐かしさを感じた。

「そうだな。大切なものだ」

念を押して頼もうかとも考えた。でもやめた。だから「大切なもの」であるただけ伝えた。後は雪憐が決めるべき事だ。

雪憐は少し、考え込む。いきなり頼んで、迷惑な気がした。でも雪憐ならちゃんと大切にすると俺は信じていたから頼んだ。

雪憐は俺の方を向くと、俺に微笑みかけた。「私は大丈夫」と言うかのように。その笑顔はとても美しく可憐で、そして少しでも触れたら壊れてしまいそうな繊細さだった。雪憐は俺に安心させるために無理をして笑っているのだと思った。その痛みを伴う表情を見て一瞬、後悔しそうになるが思い留まる。雪憐が安心させようとしているのに俺が後悔するなんて、雪憐の頑張りを踏みにじる事になる。そんなことはしてはいけない。

「わかりました。大切にします」

「ああ、ありがとう」

お礼を言ったのがずいぶんと久しぶりに感じる。今まで善意を向けられても悪意にしか感じなかった。素直に善意だと認められなかった。善意の振りをした悪意なのではないだろうかと疑った。相手は礼を望んでいないのではないかと疑った。今回も心のどこかで「善意じゃない可能性がある」と夜彩凜が叫び続けた。だからその声を潰した。例えば雪憐の行為が善意じゃなかったとしても、雪憐が礼を望んでなかったとしても…。雪憐に誠意を持って接しなかった。雪憐に辛くさせたくなかった。

俺はお礼を言うのと無性に恥ずかしくなった。頭の中で後悔を力づくで黙らせる。思考へのリソースを遮断して強制的に思考停止させ続ける。そして、俺は用も済んだし帰ろ

うと思った。

「じゃあな」

「さようなら、先輩」

挨拶をすると、俺は振り返らずに真っ直ぐと階段へと進んだ。俺が階段へと行く途中で教室のドアが開く音がした。今、雪憐が教室に戻ったのだろう。雪憐はもしかしたら手を振っていたのかもしれない。そんな馬鹿な想像をしてしまった。でも、もしそうだとしたら、振り返してやるべきだったのだろうか…。俺は無邪気に雪憐に手を振り返していた四年前を考え階段を登り始めた。

五章

雪隣に胡蝶蘭を任せた日の夜、俺は夜道を歩いていた。自然のことわりに反抗した人類達を作り出した人工の弱々しい街灯によって辺りが漆黒に包まれる事は無かった。前も後ろも人がおらず薄暗い脇道というほど細くなく、大通りと言えるほど広くない道を俺は進んでいく。孤独で薄暗いここは不気味な反面、とても落ち着いた。人に囲まれ、夜も昼間のような明るさの大都市の方がよっぽど孤独で不安に駆られる。孤独は自分のために時間を使えるチャンスなのだ。

などと思いつながら、進むとそこには古風で小綺麗な喫茶店があった。街灯の寒そうな光とは違い暖かそうな光を出すその店だ。ここが田舎の村だと言っても信じてもらえそうだと感じた。あれだけ孤独は良いと言いつながら、結局のところ目的地は知人のいる店なのだから、思考と行動が乖離している。思わず俯き気味で自嘲の笑みがこぼれてしまった。

自嘲の後は後悔が押し寄せてくる。だから、後悔に潰されないよう空を見上げた。夜

空は自然のことわりに従い暗く黒かった。都会化の副作用によって星は少ししか見えなかった。空を見上げていた俺は酷い顔をしていたと思う。

「いらつしゃい。って、凜君じゃないか」

喫茶店に入るなり女性店員は俺を見つめる。

「本当ならおひさしぶりはしたく無いんですけどね、藤堂先輩」

藤堂 沙月先輩はここでバイトをしている大学生で、俺がここにくるたびに相談ごとをするように求めてくる大変面倒な店員だ。もう、それ俺が店員なんじゃねえの？ 藤堂先輩から金とった方が良いんじゃない？

俺はカウンター席に座り、コーヒーを頼んだ。

「ここに来たということは、何か相談事かい？」

藤堂先輩はスタイリッシュな雰囲気醸し出しながら俺に聞いた。いかにも相談して欲しそうだな。

「そうですね、藤堂先輩がどうしたら黙るかを相談しに来ました」

「それは難しいな、君が自分で解決できる大人になったら黙ろうと思っている」

「残念ですけど、自分で解決できないような問題ごとは起きていませんよ。早く仕事を

してください」

「君以外客がないのにどうやって仕事をするというのかね？」

「簡単ですよ。唯一の客である僕のためにだらたらスマホでも見てれば良いんです。なぜ自分から仕事を増やそうとするんですか？」

「ふふ、君が心配だから……というのが正解だ」

いつまでも続くのであろう応酬を察知したのか藤堂先輩は話を打ち切り、藤堂先輩にとつての本題であろう相談事を持ち出してきた。

「どうだ、彼女とは順調かね？」

藤堂先輩は特に恋愛の相談事を大変好んでいる。もう自分でしろよって言いたくなるくらいその相談事が好きだ。その容貌なら余裕でできるだろ。

「そもそも彼女なんていませんよ。俺にできると思いますか？専門外です」

俺はキツパリと否定する。そもそも俺に彼女がいるかもしれないと少しでも考えるのもどうかと思う。恋は専門外だ。人の気持ちはよく分からない。

「ほらあの子だよ。確か名前は……紗恵だったかな？」

ああ、藤堂先輩やっぱり勘違いしてた…。

「何度も言いますが、彼女はただの知人です」

何度目かの否定の言葉を口にする。

「だが、好意はあるのだろうか？」

藤堂先輩の目は輝いていた。本当に恋愛話がお好きなようだ。

「俺が欲しいのは紗恵じゃありません、友人です」

藤堂先輩の期待には答えられそうになかった。でも誠実に答えたつもりだ。それにあいつに好意を抱いても誰も得しない。価値観が違いすぎるし、そもそもあいつが俺に好意を抱くかすら不透明だ。

「またまた、本当かね？」

先輩は追撃するかのように聞いてきた。

「本当ですよ。俺は嘘をつけるほど器用じゃありません」

少しだけ嘘をついた気分になった。心にちくりとなにかが刺さる。でもこれを嘘にしてはいけない。これは真実であると同時に“紗恵が好きではない”という真実を補強しているんだ。こうやって罪悪感をすぐに感じる自分の性質を利用して自分を制御する。もし好きになれば嘘をついた事になる。嘘をつけば罪悪感と自己嫌悪に悩まされる。

むしろ嘘をついてでも紗恵が好きになったのであれば、それは相当な覚悟をもって彼女を愛している何よりの証拠になるだろう、その時はその時に考えれば良い。

「そうか？後悔しないうちに答えを出さないと手遅れになるぞ」

藤堂先輩は何かを懐かしむような遠い目をして言った。もしかしたら先輩にもそのような過去があったのだろうか？先輩の目を追っても答えは出ないだろう。答えを知っているのは先輩だけだ。自分の過去は自分自身しか向き合えないから。

ここまで話したが、俺はこの話題を話したいとは思わない。他人の本心が良く分からないのに恋をしたいなんて思えない。俺は恋よりも先にやるべき事があるだろう。雪憐の事だって何一つ解決できていない。四年間、問題を先送りにし続けただけだ。

俺が考え込むと先輩はふと笑みを浮かべ俺に問いをぶつける。

「じゃあ、紗恵が君に好意を持っているとしたら、どうする？」

「そんな事は無いと思います。だから、考えた事はないです」

俺はこの人の事を“相談ごとをするように求めてくる大変面倒な店員”と称した。でも、藤堂先輩は相談するよう強要してきてくるくせに、相談に乗るのは上手いんだ。相手の悩みを的確に推測しうまく悩みを吐き捨てさせる事ができる。本当ならさっさと

断ってしまえばよかった。ある意味たちが悪い。

「では、紗恵が友達では無くなってもうまくやれるのか？」

「…それは」

藤堂先輩の顔は至って真剣であった。ニヤニヤとしていればそこを突っ込めたが、隙がない。その問いへの回答を避ける事はできなかった。でも答える事も…できなかった。俺が回答に窮していると、藤堂先輩は追撃するかのように次の問いを俺にぶつけた。

「紗恵に彼氏ができて君は何も思わないかい？」

本当にこの人は俺の心にブスブスと刺してくる。考えても答えが出ないのに答えを出さなければならぬ難題から逃げる自分を鏡で見させられている気分だ。人は心であれ体であれ痛みを感じると苛立ちを覚える事がある。俺も例外ではなかったようだ。

「…何が言いたいんですか？」

思わず声色に苛立ちが含まれてしまった。感情を抑えこんでも溢れ出てしまったのであろう。

「君は紗恵と一緒にいるのが楽なのだろう？」

藤堂先輩のことだ、きっと俺の考えている事は大まか予想がついているのであろう。

ここで隠し事をしてもあまり意味が無いだろう。俺は落ち着くため深呼吸に近いため息をつくと話始めた。

「そうですね。ただ、楽しくはないです」

自分でも言葉にするとスッキリとする。紗恵と一緒にいる事は楽なのだ。紗恵は事を深く考えず行動し、空気も読め、考える必要が無いアニメやライトノベルの話をする。好きなものは「それな」と言い、嫌な事はやんわりと断る。語彙力も適度に死んでいて、良くわからん社交辞令的な共感をして、地雷のような話は徹底的に避ける。空気清浄機並みの能力で、空気を改善し、絶対に居心地の悪い空気にしないよう努力する。絵に書いたような一般的なJKだ。今日のように「キモ」と直接的に言われたのは随分と久しぶりだ。今回は流石にあらから見ても不愉快だったのかもしれない。

「君の中では楽でも楽しくは無いのか？どうして？」

「嫌です、あんな生き方。辛くてもちゃんと考えて最善のものを選ぶべきです」

言い終わると俺は少し俯き気味になった。紗恵との今までの事を思い出した。思いだすと自信が無くなったのか、最後の方は声のトーンが自分でもダウンしたのが分かった。

「紗恵はもっと真剣に考えるべきです…」

俯いた状態で吐き捨てたその台詞は自分でも情けなくなるくらいの声だった。“依存している”とは言えなかった

そんな俺は何も言わずに見ていた藤堂先輩はふと優しくそうな声で言った。

「私は紗恵君も彼女なりに君の事を思ってくれていると思う。君が思っているほど醜いものではないよ」

「そうですね…」

藤堂先輩の声に俺は曖昧な返事しかできなかった。

「彼女にはしっかり謝っておきなさい」

「あ、はい…え？」

驚いて、思わず顔を上げたそこには声色と同じ優しく微笑んだ藤堂先輩がいた。目の前の人は人生の先輩という表現が近いと感じた。

しかし、どこから情報を仕入れたのか、俺から推測したのは不明だがどちらにしても流石だと言わざるを得ない。俺も出来る限り平穏を装っていたはずだが、無意味だったようだ。

凄さを実感すると、思考が鈍り、余計な事を口にしてしまった。

「昼ご飯、あいつ、俺はずっと断り続けてるのにな…」

藤堂先輩は「ふむ」というと、こう切り出した。

「紗恵君だって人間だ。我慢の限界だってあるだろうからな。人間断られ続けたら嫌な気持ちは溜まるだろう」

「だったら、なおさらです。なぜ、不快に感じる事を続けるのか理解できませんよ」

「それは紗恵君が君を…と言っても凜君は納得しないか」

「そうですね」

藤堂先輩の言おうとしていた事はなんとなく察した。俺も藤堂先輩も夜彩凜の回答は目に浮かぶように分かっていた。時間の無駄だ。

「君が私の言葉や紗恵の行動が納得できないなら、自分で納得できる答えを探すべきだ」

藤堂先輩のアドバイスはシンプルで明快であった。理解できない難問であるなら理解できるまで思考を続ければいいと。一番辛くて一番夜彩凜が望んだ解法だ。

「だが」

藤堂先輩はアドバイスを終えると少し視線を下げて言った。藤堂先輩はとも言いづらそうに切り出した。憐れむような悲しむようなそんな様子だ。

「それはとても辛いやり方だ。紗恵君とズレを感じ続けなくちゃいけない。きつと、そんな関係では、君も紗恵君も望む結果は得られない。君も紗恵君もとても後悔する」

だから俺は：

「それでも、ちゃんと考えます」

と答えた。言葉通りだ。覚悟はできてない。自信なんて微塵も無い。後悔しないなんて思えない。でも、俺は一番辛くて一番望んだ方法を選んだ。これが最善だ。

藤堂先輩は感慨深く頷くと、すぐにいつもの頼りがいのある顔で笑った。

相談するよう強要してきてくるくせに、相談に乗るのは上手い。ありがたいが、藤堂先輩に甘えてはいけない。自分の選択を最終的に決めるのは自分自身だ。そう思った。

少し間が開くと、藤堂先輩はそう言えばと、ポンと手を叩き俺に聞いた。

「胡蝶蘭はちゃんと世話できたかね？」

胡蝶蘭…。雪憐の事を思い出した。先輩から後輩へ、あれはこうして受け継がれてきた。

「ええ、ちゃんとしました」

嘘は言っていない。むしろこれは自信を持って言えた。物であれ人であれ、ちゃんと愛着を持って長期間接した数少ない事例だ。

「そうか。ありがとう」

藤堂先輩は少し嬉しそうに言い。言い終わるとコーヒーを飲んだ。え、藤堂先輩、店員だろ。なんでちゃっかり自分用のコーヒー作って、飲んでるんだ？客いなくても店員だろ。これはこれ、あれはあれ、ありがたくても仕事はするべきだ。

そう思い、ジロっとした目で見ていると、藤堂先輩は視線に気付き咳払いをした。

「凛君は相変わらずだな。ちゃんと許可はもらっているぞ」

藤堂先輩は呆れた表情を見ると、ダメ押しとばかりにもう一口コーヒーを飲んだ。

そして、話を続けた。

「胡蝶蘭は今年の一年一組の風紀委員に託されるのか。面倒事扱いされてなければ良いが」

藤堂先輩は懐かしむような声で言う。心なしか少し寂しそうだと感じた。

だが、俺もそれは同じ気持ちだったので理解できた。そして、言うべきだと感じた。

ちゃんと、あの胡蝶蘭は後輩に受け継がれたと。

「胡蝶蘭は俺の後輩に頼みました。大切なものだったので」

俺が藤堂先輩を見て言う。藤堂先輩は意表を突かれたような顔をしていた。

「君が胡蝶蘭を託すなんて相当信頼しているんだな。一体、どんな関係なんだ？」

新入生が入学してほとんど経っていないにもかかわらず、俺がその後輩を信頼している。藤堂先輩からしてみれば俺が答えを言っているのとはほぼ同義だろう。

「幼馴染ですよ。四年ぶりの再会ですけどね……」

藤堂先輩はそれを聞くと苦笑した。

「君は本当に世話が焼ける後輩だな。今日はもう遅いし、また今度にしようか」

藤堂先輩のその苦笑には苦痛が感じられず、代わりに無邪気さと嬉しさがあり、苦笑と呼ぶには不適切では無いかと感じた。

六章

藤堂先輩に会った後、俺は家に帰ってご飯と風呂、歯磨きを済ませ、自分の部屋で勉強を始めたのだが…。

「なん…だと…」

気付くと、俺はベッドの上で横になり、窓から見える外には暗闇が無くなっていた。ムクッとベッドから起きると窓からの外はやはり明るかった。

「と…言う事は…」

勉強をどこまでしたかの記憶が無くなっていった。いつからか疲れてベッドで眠ってしまったのだろう。そんな事を考えていると、ふと思い立ち、ぱっと布団を跳ね除けると時計を見た。遅刻という可能性が頭をよぎる。

だが、その心配は無用だったようだ。いつもより起きている時間より三十分ほど早かった。全然余裕だ。疲れて遅く寝ると、かえって長く眠れない現象が起きているのだろう。

「素晴らしい朝だな」

その一言は誰に向けたものだったのだろうか。最低でも自分自身には向いていただろう。だが、自分でも可笑しく思うほどの棒読みだ。

二度寝も考えたが、二度寝すると本当に遅刻しそうで怖かったのでやめた。机を見ると記憶に無い昨日の自分がやっていたのであろう数学の問題集とノートと鉛筆そして消しゴム、赤ペンが置いてあった。左に問題集、右にノート、ノートの右上に鉛筆と消しゴム、赤ペンがくつついて置いてあるレイアウトだ。ページ数を見るになんだかんだ進めていたようだ。

「∴根性で丸つけたんだろうな」

見ると御丁寧に丸付けがされており、最後にはまるで被害者のダイニングメッセージのように赤ペンで"TODO 見直し"と書かれていた。一番最後の問題の丸なんて寝ぼけて描いたせいか、半円になっている。そんな状態でも丸付けをする不器用さは夜彩凜だなと感じ自嘲気味な笑いが溢れる。頑張ったんだな昨日の俺∴。君の死は無駄にはしないぞ。結構量あるし、帰ったら見直ししよう。

そう思い、部屋を出る。ドアを開けてガチャと言う音がすると、見慣れた廊下が現れ

る。小学生の頃は天井がとても高く感じた。でも今は天井を見ても何も感じる事はない。天井が当たり前になってしまったから。天井を見ても新たな情報はもう得られないから。慣れというのは成長の一種なのだろう。人は慣れによって、重複した思考を防ぎ、必要な事のために効率的に思考が行えるようになるのではないかと感じた。

俺は朝ご飯を食べ支度を終わると、外へ出た。三十分程早く起きたおかげでいつもより早く家を出ることが出来た。玄関の戸を開けると、そこには春の暖かさと青空が広がっていた。鳥の鳴き声と少しばかりの風はまるで一日を始めるためのオープニングのようで、俺は室内とは違う外の空気を感じながら、一步一步今日を始めるために進んでいく。

とその時だった。俺は不意に立ち止った。別に今日を始めたくなくなったから、止まったわけじゃない。俺の自宅の前にある家を出ようとしていた雪憐と出会った。いつもの高校の制服に身を包み、いつものショートヘアをした雪憐だ。昨日と何も変わっていないのに、会う場所と時間を変えるだけでまるで“電車で最初に再会したあの時”をもう一度体験したような気分になった。

雪憐は一瞬驚いた顔をしたが、またいつもの顔に戻る。二度も会ったのだし雪憐の中

では割り切ったのかもしれない。俺を四年前の凜としてではなく夜彩先輩として接する事に関してだ。

歳月は人を成長させ、変える。油分が適度に乘った色っぽく艶のある髪、美しい曲線を描く身体の輪郭、そして服越しで分かるその柔らかそうな張りのある膨らみは女性としての証であり、四年前雪憐に抱いた感情がより大きくなって蘇り、深く俺の心に焼き付かれた。時間は待たない。常に人は変化する。だから、変わった雪憐を俺は受け入れないといけない。だが、理解はしていても、受け入れる事がまだできていない。

優しい風が俺たちの撫でるかのように横を通り過ぎた。雪憐の髪は風を受けさらさらと靡く。まるで海の宝石のような砂が風に待ったような美しさだと感じた。布でできた雪憐のスカートはパタパタと下の部分が揺れ、それは何かを誘っているかのようだった。

その誘いを、俺は理性で欲望を抑えて、正しい選択をしようと努力する。無難な問いかけが最善の選択だと思った。

「おはよう。雪憐」

だから、俺は後輩に挨拶をした。四年前の解決すべき事があって、それらは解決しな

ければならないが、それは四年前であって今起きた事じゃない。今は“夜彩先輩”として接するべきだ。

俺が挨拶すると、雪憐は安心したように微笑んだ。

「おはようございます。夜彩先輩」

雪憐の微笑んだ顔は辛そうな顔や凜とした顔より似合っていて、雪憐にふさわしい表情だと俺は思った。しかし、いつもの雪憐の表情よりも四年前のあどけなさを感じられた微笑んだ顔の方が良いと思うあたりに、自分がどれだけ後悔しているか理解もできる。

「雪憐も最寄り駅は俺と同じなのか？」

俺が聞くと雪憐は答えた。

「先輩と同じです」

「雪憐はこのくらいに家出ていたんだな」

雪憐は俺を見ながら聞くと、雪憐は道路に視線を向ける。何かと思い、道路の方を見たが別にエイリアンがいた訳でもなく、出勤途中の近所のサラリーマンや学生が歩いているだけだった。何だろうと思いついて考えた時、雪憐は言った。

「歩きながらでもいいですか？」

「え？あ、ああ。悪かった」

そういうと、雪憐は駅の方へ歩き出した。

そうだ。学校に行かないとな。歩きながらも問題の無い話だし、それに立ち止まって喋った俺の方が明らかに不自然だろう。こういう思考が回っていないところにもう少し気付けるように、大局的に物事を考えるべきだと感じた。これじゃあ、どっちが先輩なのか分からない。

少し、歩くと雪憐は振り返って、俺の方を見て、すぐにまた視線を前に向いた。多分、ちゃんとついて来ているか不安だったから、見たのだろう。もう、高校生なのだから付いていくなんて事お互い分かっているだけけど、きっとあの頃の名残りがそうさせたのだ。

俺は懐かしさに背中を押され、歩く速度を早めて雪憐と横に並んだ。

雪憐と並ぶと、身長は俺の方が高くなり、当たり前なのだが女子の制服を着ている。

身長も出会った時とは同じくらいだったし、服も違いなんて気にした事もなかった。どちらがどちらの服を着ても問題無いように思っていたんだ。

「どうしたんですか？先輩？」

考え込んでいた俺を雪憐は心配して覗き込んできた。覗き込むときにほどけ揺れる髪。そして、覗き込む雪憐との距離は近く、それはさあつと穏やかな波が押し寄せ俺の心の中を潤した。俺は高鳴る心臓を押さえ冷静な思考を心がける。雪憐は素朴な善意から心配してくれているのに、俺は邪推な事を考えていた事に罪悪感を感じ、目を逸らす。純白の物を絵具で汚したような気分になった。

「いや、何でもない」

俺は自分に言い聞かせるように答えた。

「そうですか」

心配そうに言うと、雪憐は距離を取る。雪憐は心配そうに遠くを見ると、と雪憐は何かを思いついたように「あっ」と言った。

「先輩。ちゃんと朝ご飯食べてます？」

雪憐も四年前の事は分かっているが、触れず、あくまで夜彩先輩として接しようとしている。それは俺を傷付けまいとする優しさだと思ふ反面、紗恵の近い空気を読むと言ふ事にも近い。それは、言葉通りの意味では無く、四年前から関心を逸らす事が目的で、考える事の放棄だ。話すら切り出せていないような状態で、客観的には“四年前から逃

「「げている」と思われても仕方が無い。でも、ちゃんといつか四年前と向き合って話す。だから、考える事を放棄してはいけない。」

「関心が無いなら聞かなくて良いだろ。雪憐の時間が勿体無い」

諭すような声で、俺は前を向きながら言った。これは言葉通りだ、四年前の事は俺に責任がある。それなのに雪憐が俺に氣を使うのは違う。雪憐の時間なのだから雪憐のしたい話をすれば良い。

言い終わり、雪憐の方へ向くと雪憐も俺の方を見ていた。雪憐の何かを言いたそうな表情をして凜とした表情は最初にあった時を彷彿させた。

「私は今の先輩を知りたいから聞いているんです」

雪憐のその真っ直ぐとした声色で言われ、俺は驚いた。罪悪感や恥ずかしさが俺を襲い心の中で後悔という形に変化する。自分の中の雪憐というものが自分自身によって歪まされ、それに基づいた身勝手な推測で行動していたと痛感する。実際は俺が考えた事とは違う純粹でシンプルな考えだった。自分がどれだけ過去に囚われていて、それによってどれだけ見るものにバイアスがかかっていたかが分かる。

「…ちゃんと食べてる」

俺は少し間をおくと、小さめの声で答えた。そう答えると、雪憐は柔らかな表情で微笑んだ。

「本当ですか？先輩、ご飯ばかり食べたりにして偏ったりしてないですか？」

雪憐の声は暖かくからかうようであった。

「大丈夫だ。最近ちゃんと、パンも食べるようになった」

と俺が言うと雪憐は少し驚いた声をして。

「パンも炭水化物です、先輩。バランス良く食べた方がいいですよ」

そう言われ俺は、

「俺は炭水化物から三大栄養素を作り出せるんだ」

とふざけ半分で厳かに言うと、雪憐は少しあきれたような顔をした。

「それでも、ミネラルとビタミンもいりますし、ちゃんとバランス良く食べましょう」

優しい声で諭された。なんか、標語みたいな事言われたし。食のバランスには確かに余り気にしていなかった。別に親が全く料理しない訳では無かったが、高校生になると不摂生なバランスになりやすい。…いや、炭水化物ばかりは食べないな、普通の高校生。小学生の高学年頃、よく料理が得意な雪憐はうちにご飯を作ってきてくれた。家族と

の交流もあり、母親も喜んでいたし、俺もあいつの作った料理は好きだった。小学生だったしそんなに、すごい料理では無かったが、頑張って料理を作った事は伝わった。それだけで俺は嬉しかった。

昔の感傷に浸かっていると、駅に着いた。

「もし良かったらお弁当、私が作りましょうか」

改札を通った後のあたりで雪憐が言った。

ちょうど、俺の考えていた事だったが、雪憐が知る由もない。だが、自分の大切な思い出が相手にとっても大切な思い出である事は不思議では無いし、今この話をして雪憐が俺と同じ事を考えていた可能性もある。

「いや、大丈夫だ。手間かかるだろうし」

昨日の母親がくれた弁当を思い出しそうになるがやめる。あれは中身が余りに栄養バランスが悪く、味が壊滅的な上に、残りものという事で臨時に支給された弁当なので、普段は食堂で食べていた。やはり外のものとは味付けが濃かったし、成長した雪憐の料理スキルも興味があり俺から見ると魅力的な提案であったのも事実だ。しかし、お弁当をもう一つ作るとなると大変だろうし、なんの対価も無く働かせるのは申し訳ない。

「そうですか。…その…余計な事言ってごめんなさい」

雪憐は申し訳なさそうに言う。顔を俯き気味で少し恥ずかしそうにも見えた。それを見て少し申し訳ない気分になる。そして、誤解されないように説明するべきだ、そう思った。

「いや、雪憐がお弁当を作ってくれたらは嬉しいしありがたいが、後輩に委任するものな…」

そうふざけた口調で先輩としての謎のプライドを見せると、雪憐は少しだけ笑って顔を上げた。

「請負でやりますよ、先輩」

雪憐も優しさからか話に乗ってくれた。いや、雪憐が詳しいだけだな…これ。

「請負契約だと報酬発生しちゃうんだけど…」

俺は困ったような声で言う。と雪憐は答えた。

「報酬は先輩が笑ってくれればいいです」

俺の「請負契約の報酬は金銭じゃなくても大丈夫だったのか」という切なる訴えはホームに來た電車の音によってかき消された。

都市化の代償に人類が支払った物は大きかった。満員電車で揺られ、大量の人々の海に飲み込まれた俺はそう感じた。距離を取れるほどのスペースは無く、常に接する必要は無いにしろ揺ればすぐに当たるような距離に他人がいる。しかしそれでも、比較的空いている方では無いだろうか。

いつもと違うのが隣にいるのが他人では無く雪憐である事だ。雪憐はスマホを見る訳では無くぼーっとしていた。いや、口があんぐりと開いている訳ではないし、瞼が閉じそうになっている訳でも無く、落ち着いた顔をしているから、世間一般的なイメージのぼーっとしているとは違う。どちらかと言えば、考え事をしていると云った感じか…。

乗り始めて最初の方はそれはもう、雪山に遭難した時のような極限状態であった。満員電車の中で雪憐と近くに居るのはある意味荒治療だ。四年前よりも大人びたその少女は先程よりずっと近い距離にいるし、少し揺れば普通に接触をする。だが、人間というのは適応する生き物、この荒治療はなんとか、正常な思考ができるまでの成果をだした。これは治療法として論文発表するべき。

荒治療の成果で、雪憐を見ると、何故スマホをやらないのかと疑問が湧いた。しかし、良く考えれば知り合いがいるのにスマホをやるのは失礼だ。俺は人がスマホをやっ

ても、そもそも俺はそいつを知り合いと認めないからセーフだが、真面目な雪憐はそんな事をしないのだろう。

「混んでるな」

俺は雪憐に言った。別に答えを求めた訳では無いし、独り言にも聞こえたのかもしれない。だが、雪憐もこうしてスマホをやらないでいてくれる事もあり、このまま黙って過ごすのも良いことでは無いと考えたからだ。

「ですね。朝ですし」

雪憐は答えた。話の切り口として使った話題だが、余りに当たり前すぎた。朝の帰宅ラッシュに混んでいるのは当然ではないか。話題を広げるのに適していたものだったかは疑問だった。

「…」

雪憐が答えたのはいいものの沈黙が続く。話を広げる良い話題も思い付かず、ただ時間ばかり過ぎていく。最初に出会った時もそうだったが、最初の時よりは居心地が良かった。

雪憐は「今の先輩の事が知りたいです」と言ってくれた。果たして俺はどうだろうか。

四年前の雪憐の事は良く分かっているつもりだ。では、今の雪憐の事は？雪憐の本質的な価値観が変わっていないくても、四年という歲月は人の多くの部分を変える。きっと、俺の知らないところは沢山あるし、四年前とは変わった所も同様だ。

じゃあ、知るべきか。俺は今の雪憐を知りたいか？知ったところで、何になる。四年の歲月を感じるだけだ。むしろ、知る事は苦痛を増やす。苦痛を背負ってでも知りたい事か。メリットは思い付かないのに、デメリットばかり思いついていく。損得で言えば明らかに損だ。

でも、頭の中からこの考えがこびりついて離れなかった。否定しようとしてもできなかった。きっと、紗恵ならこうは思わなかった。きっと、藤堂先輩ならこうは思わなかった。雪憐が大切だから、選ぶんだ。花ちゃんだから、選ぶんだ。これは、四年前と同じ考えだ。だとしても、俺は知りたい。

「雪憐、『エンドロールと恋の果て』見たか？」

俺はふと、前に見ていた映画の名を言う。『エンドロールと恋の果て』、くたびれた独身の中年エリート銀行員にある日一通の手紙が届く。それは彼の初恋の人と同名同名からで、そこから奇妙な文通が始まる。と言ったどこかで聞いたようなあらずだが、主

人公の一途な想いと、夫と子供がいながらどこか自分に疑問を感じ主人公との間で揺れるヒロインの苦悩と後悔が描かれており、色々な層から幅広い評価を受けた作品だ。この手の作品が若者層からも受けたのだから、クオリティの高さは折り紙付きだと言える。……先ほど、あれだけ、今の雪憐を知るかどうかに悩んだのに、聞いた内容が「最近やった映画を見たか」なのだから少し複雑な思いだ。だが、今の雪憐の事を聞いたのには変わりはない。

雪憐も俺から雪憐のことを聞いたのが意外だったのか驚いた顔をした。だが、すぐに雪憐は嬉しそうに微笑んで言った。

「見ましたよ。おもしろかったです」

雪憐の率直で非常にシンプルな感想。だが、適当に答えていない事は顔と声色で分かる。不器用でも一生懸命答えようするその姿は実に雪憐らしかった。

「ああ。そうか」

若者も沢山見ているし、特段不思議ではないが、高一の女子があれを見るのもな。雪憐の事だし流行りと関係無く純粹に見たかったのかもしれない。となると、雪憐は結末を知っているのか。

「結末どう思った？」

『エンドロールと恋の果て』の最後は主人公に惹かれながらも、夫と子供への想いも捨てきれなかったヒロインを見た主人公は、ヒロインのために関係の解消を提案する。

二人は相手を幼い頃の姿と重ねた後、別れをつけるのだ。

この結末には議論を呼び、痛みを伴いながらも引きずり続けた初恋に決着をつけたこれをハッピーエンドと捉える人と、初恋が叶わず心に傷を負ったこれをバッドエンドと捉える人がいる。

しかし、俺もこんな聞き方しないで「最後やばかったよなー」とか間接的に聞けば良かったのかもしれないが、周りくどいと感じたためやめた。そんな器用な聞き方はできない。

「モヤモヤする終わり方でしたね」

モヤモヤする終わり方か……。一体どういう事だろう。確かに一般的にモヤモヤはするかもしれないが。

「モヤモヤする終わり方？」

俺は疑問をぶつける。雪憐は考え込むようにして。

「ええ、あれだけ想いがあつたなら初恋を叶えるべきかなって」

少し遠慮しがちな声で答えた。

主人公とヒロインは惹かれあつていたし、おそらく何もなければラブラブカップルになっていただろう。だが、過去の2人の出来事や時が経って変わってしまった事、多くものを背負った事で、初恋を叶える事はメリットよりデメリットの方が大きくなってしまったのではないか。だから俺は聞いた。今の雪憐の意見を。

「でも、失う物が大きすぎたから選べなかつたんじゃないか。家族がいたわけだし」

問いがあれば正面から考える。雪憐の良いところだと思う。

「自分にあそこまで嘘を続けても誰も幸せになれないと思います」

雪憐の回答は言い訳が無くシンプルなものだった。あんな嘘を続けてヒロインが子どもや夫と接してもヒロインや主人公、そしてヒロインの家族、どれも幸せにならないという事だろう。“優しい嘘”は本当に優しいかは分からない。人によっては悪意に感じる事もある。これは賛否両論あるところだろう。

「そうか、じゃあ、バッドエンドか？」

俺は急かすような質問をしてしまい少し後悔した。

「そうですね」

雪憐はそう答えた。その後、少し俯き気味に間を置いて聞き辛そうに聞いてきた。

「…初恋を選んでも、誰も傷つかなければ良かったと思いませんか？」

その声色は後悔があり、どこか拗ねているようでもあった。

そんな選択があれば素晴らしいことだ。誰も傷付かず自分の望む選択ができる。

だが、それが無いから人は考えて選択肢を選んで、時に後悔するんだ。

「人は複雑に利害が絡み合ってる、全員が幸せになる方法なんてないだろ。取捨選択するしかない」

雪憐の意見を否定したくはなかった。しかし、意見を求められた以上答えなければならぬ。答えるのであれば嘘をつきたくはない。それに、雪憐も嘘の同意なんて望んでいないはずだ。

「…理想論ですか…？」

雪憐が寂しげに微笑んだ。電車の中では距離が近く、雪憐の顔がよく見えた。その儚げな表情はどきっとしてしまう。

「そう…だな」

俺も少し不器用に笑って答えた。

この会話が続けば良いと思った。今なら、少しずつ、四年前の事も向き合っていける。だからこれで良いんだ。四年前に戻る事はできないけど、ちゃんと“夜彩先輩”と“雪憐”として接する事ができてる。後は4年前と向き合う事ができれば、先輩後輩としても幼馴染としても両方の関係が大丈夫になるはずだ。だから、これで大丈夫。学校の最寄り駅に着いた電車の中でそう思った。

電車から降りるとそこはいつものホームだった。俺はすでに一年間通った、この場所。高校一年間で慣れた光景に幼馴染の雪憐がいるというのは、まるで四年前を境に断絶していた、“俺の人生の前半”と“俺の人生の後半”を繋ぎ合わせてくれたような気分になった。

そんな事を考えていると、ふと見慣れない金髪の少女を見つけた。うちの制服を着ていて、日本の駅にいますと相当浮世離れしているなと感じた。…クリスタさんか。うちの高校の金髪の少女なんて一人しかいないだろう。

「先輩……」

が、隣に居た雪憐がクリスタさんを見つけると酷く驚いたように言ってきた。戸惑っ

ているのも伝わってきた。何か自分の犯した罪を見るような表情で、事の異常性を表した。

「クリスちゃん…ですよね…」

雪憐の絞り出すような声で言う。

「あ、ああ……」

クリスちゃん。雪憐が言ったその響きで四年前の記憶が浮かび上がる。俺はあいつの事を知っているのか。記憶を辿ろうとすると「やめろやめろ」と頭の中で自分が騒ぎ立て、周りに人が沢山いるのに時が止まり、俺と雪憐とクリスタしか居ないような錯覚に襲われる。

クリスタがふとこちらに気づきこちらに向いた。

それが引き金となり、記憶の固い何かが外れて、記憶が頭の中を行き渡る。

クリスタ・アレンス。

それは、四年前に俺が忘れようとした事。

それは、四年前に俺の選択の生贄。

それは、四年前の俺の罪。

クリスタは俺達に気付くと、にっこりと笑って会釈した。何気ないそれが、酷く不気味に感じ、気持ち悪い何かが身体を食い荒らして身震いがした。彼女は俺を恨んでいるのだろうか。いや、恨んでいないはずがない。

クリスタ・アレンス、雪憐花乃、夜彩凜。

贖罪に必要な人物はすべて揃った。

もう一度選択するんだ。例え間違っても、大切な物を守るために。

過ちは繰り返す。

七章

目が覚めると、そこは教室で、夕焼けのオレンジが空全体を覆っていた。周りに誰もおらず、孤独な自分自身を表している気がした。

この夢を見るのは久しぶりだ。一昔前は一週間に一度ほど、疲れた時に必ずこの夢を見た。何度見ても、全く同じだった夢。

同じだった…？

俺の中に疑問が湧いた。クリスタの事を忘れていたのに。今まではクリスタの部分はまるでノイズが入ったように自然に切り取られていて、忘れていた事自体を忘れていたたぶん、俺は名前自体に関心が無かったのだろう、俺の後悔は“クリスタを傷つけた事”では無く、“クリスタに関連して、雪憐が傷ついた事”なのだから。

そう思うと、“初恋は四年前のかたちをとどめたまま”というのは間違っているのでは無いか。俺は外見を見てかたちは変わっていないと思って、実際は奥深くへと沈んでいくうちに、俺の手によって中身は無意識に歪まされグチャグチャになっているのか

もしれない。もはや、俺を呪う初恋は“四年前の初恋”ではないのかもしれない。

四年前、雪憐に抱いた感情。四年前のあれはある意味、俺の幼馴染としての最後になるはずで、あの子の物語は、幼馴染としての雪憐の話ではなく初恋の人としての雪憐の話になるはずだった。

だが、それはハッピーエンドならばの話。終わった過去は変えられない。

聞き覚えのある音がした。ボーっと夕陽を見て、夢の事を考えていた俺はドキッとして、音の方を見る。

教室のドアから入ってきた雪憐がそこにはいた。黒とオレンジと白に夕陽に照らされた少女は美しいの一言で、夕陽というものはこの少女のためにあるのか。夕陽に照らされた少女の髪はもはや芸術。さらに、夕陽は少女の制服の曲線をくっきりとして、綺麗な肌を化粧した。神様はこの世にいいものを残してくれたと思う。

こんな美しい少女がいるのであれば、俺は初恋の呪いでもなんでも喜んで受け入れる。しかし、突然、視界がぼやけ、ゆらりと頭がゆれる。

視界が戻ると、そこには美しい少女はおらず、変わりに、紗恵が雪憐がいた場所に立っていた。

ああ、そういうことか。重症だなと俺は自分で思った。初恋の呪いは幻覚まで見せる。恋は痛みを伴うんだ。

どうして、俺はあいつにあそこまでの想いを抱いてしまったのだろう。いつからだろう。なぜだろう。しかし、一度愛してしまえば、もうどうすることも出来ない。考えても仕方がない。そして、忘れたくても忘れられない。

紗恵は黙って、俺のほうに近づいてきた。紗恵も美少女だ。雪憐に比べて紗恵は決して劣っていない。

でも、紗恵には美しい以上の事は思えず、身体が燃えて染み渡るような特別な感情が湧かなかった。いつも通りの感情。雪憐のように痛みや整理しきれない感情はそこには無い。

「起きたんだ」

俺に近づく、紗恵は俺の横の席に座り、心配そうに聞いた。起きてから空を見て考え事をしていた時から急速に意識が戻りハッキリする。ホームルームの時から記憶が無い。という事は、その時から寝てしまったんだろう。朝に駅で、クリスタの事を思い出したせいで、今日一日上の空だった。

「あ、ああ」

俺は返事をする。少し気怠そうな声だったかもしれない。

と答えると、少し間が空いた。居心地の悪い空気が流れる。

なんとか、思考を巡らせると、ふと一つのことに気が付いた。

「キモい人を待ってくれたのか？」

俺がジト目で、皮肉を込めて言うのと、紗恵は「あーあ」と言わんばかりに頭を抱えた。別に紗恵がキモいと言った事には俺はなんとも思っていない、だがキモいと言ったのにキモいやつを待つのには理に反している。その事を皮肉ったのだ。

結局、一日上の空だったせいで紗恵に謝れていなかった。

「別にその事許した訳じゃないけど……。その話まだ続けるの？夜彩はドMなの？」

紗恵は相変わらずその事は許してくれてないようだった。特に「夜彩はドMな

の？」の部分では本当に悪そうな笑顔していた。確かに、あれだけ怒っていたのだから、当たり前か。そして、余計になぜ待ってくれたのか俺の疑問が膨らむ。

「Mじゃない。許してくれないなら、俺を待っていたのが不自然だっただけだ」

俺はMではない。先に重要な事を申し上げてから、本題に入った。紗恵が俺の価値観

では不可解な行動を取る。もしかしたら、雪憐も待ってくれるのかもしれないが、それでも雪憐の場合は“助きたい”という明確な意思があって助けるはずだ。

「そうなんだけど。その…そんな顔して寝られるとね」

紗恵は先ほどの「ドM?」とは打って変わって申し訳なさそうな自信が無い小さな声だ。そんな顔をするほど俺に何かあるのか。ゾンビか？俺はゾンビになってしまったのか？紗恵がそれほどの顔をするなんて、ゾンビくらいしか可能性が無い。

「え…？そんな顔？俺、ゾンビにでもなったのか？」

聞いてしまった。もし、「そうだ」と言われたら俺はもうおしまいだ。俺は初恋の終着点はゾンビ化によって辿り着けずに死んでしまう。悲劇的なENDだ。ついでにそのゾンビ映画の売り上げも悲劇的なENDだ。いきなりゾンビ化なんて、展開が唐突すぎる。

「ある意味、ゾンビよりたちが悪いね。ほら、鏡」

紗恵だが、ゾンビになったとは言わずに哀れむような悲しい声を出した。真剣な紗恵の声で少し俺も違和感を感じる。ゾンビよりたちが悪い顔。少し怖い反面興味もあった。

「どうも…」

俺は紗恵が貸してくれた、女子が化粧用で使いそうな鏡を受け取ると、いつものように顔を見た。いつもと同じ顔見慣れた顔。何も違和感はないと思っていた。

「え．．．」

見始めて少し時間が経つと、俺は違和感に気づいた。一度気付くと、違和感はどう든大きくなり、なぜ最初に気づかなかったかと、真逆の違和感が湧いてくる始末だ。

俺は泣いていた。正確には子供が泣くような痛々しい悲しい顔をして泣いた後の顔をしていた。泣くなんて何年ぶりだろう。そう思うと、今まで何気なく話していた紗恵にこの顔を見せ続けていたのがひどく恥ずかしくなる。こんな幼稚で辛そうな姿を紗恵に見せるのが嫌だった。俺は、慌てて紗恵の反対の夕陽が沈み始めた窓の方を見る。

「夜彩、今頃顔を逸らされても…」

紗恵は横から呆れたような声で言った。確かに正しい指摘だ。

「私だって友達にそんな顔されて寝てたら帰れないよ」

紗恵が同情するかのような悲壮感の漂う声で言う。これは優しさなのか。それとも同情のフリをした軽蔑なのか。わからない。

でも、俺はこれが善意からのものであって欲しい。仮にもこうしてたらだと一年、

人間関係を続けたのだから。

「夜彩何か、あったの？」

紗恵は絡めとるような声で言う。俺は反射的に、紗恵の方を見る。心配してくれていのような声で、それは藤堂先輩とはまた違うものを感じる。

紗恵が善意で言っているか悪意で言っているか分からない。でも、こうして対等な立場から気にかけて、心配してくれる紗恵の姿に俺は毎回甘えてしまうんだ。本当は紗恵のこれを拒否するべきなんだ。藤堂先輩と似ているがこれは違う。藤堂先輩のものはあくまで主体は俺でくれるのは必要な知識だ。だが、紗恵がくれるのは“何一つ解決してないのに安心感を感じる何か”。それは普通の高校生なら誰もが持っていて、俺が持っていないもの。

「なんでもない。何も無い」

俺は必死で否定する。嘘だ。何にも無いわけでも、なんでもないわけでもない。それに、慌てて否定する俺の姿は嘘だと言っているのと同じだった。夜彩凛は本当に嘘がつける人間では無い。

「嘘だよ。人は何も無かったら泣いたりしないんだよ」

紗恵は反論する。先ほどの俺の否定する姿に加え、証拠が揃いすぎていた。俺も本当に何も無かったら認めない。しかし、今回は嘘な訳で、これ以上嘘を吐くのは不誠実な気がして自分でも嫌悪感があつた。

「仮にあつたとしても、これは俺も問題だ。自分でちゃんと考える」

これが正解だ。俺はそう思い、言つた。嘘はついていない、“ある”とも“ない”とも俺は一言も言っていない。俺は仮定の話をしている。

「そっか……。夜彩だもんね」

紗恵は諦めたように、そう言つた。紗恵の拒否して話したがらない人には無理に聞かないところは紗恵らしいなと思つた。価値観が異なる人間と話しているとその人をキャラクター付けして、“○○らしい”と言うのは珍しい事ではないだろう。

紗恵が言うのと、しばし沈黙が訪れる。誰もいない教室も沈黙を外の部活動の音と都会の喧騒が補った。外の部活動の音を聞くくらいしかする事が無く、お互い、何を切り出すべきか分からないでいた。

「……えっと」

紗恵が居心地の悪そうな声を出す。典型的な延命措置だ。

しかし、例えば居心地が悪くても、沈黙は俺に考える時間をくれた。四年前の俺の選択は雪憐の気持ちを考えずに自分の推測と価値観だけで行動した結果だ。そして、今俺は四年前と対峙している。もう、間違った選択は許されない。

ならば、目の前に紗恵という俺と価値観が全く異なる人がいるのに使わないのはもったいないのではないか。仮に価値観が受け入れられなくても、だからと言って意見が無意味な訳ではない。むしろ、異なる視点からの考えが貰えるのではないか。そう感じた。「紗恵って、初恋はいつだった？」

だから、俺は聞いた。最初は躊躇したが、きっとここで立ち止まれば俺は二度と聞かないだろうと思い、勢いで言い切る。

「それ、さっきの話実質言ってるのに等しいよね？自分で考えるんじゃないの？」

紗恵が先ほどとは打って変わって、物言いたげな目で俺を見つめてきた。確かに間違っていない。だから、嘘をつかないために別の角度から反論する。

「さっきの事も人の意見を聞かないとは言ってない。それに、これはあくまで一般論の質問だ」

俺は半ばドヤ顔で言うと、紗恵は「うわあ」と言わんばかりの顔をしてきた。

紗恵が少し考え込むと、少し恥ずかしそうに髪をいじり始めた。確かに俺も初恋に地雷はあるし、紗恵も地雷があるのかもしれない。だとしたら、申し訳無いし、謝罪して質問を撤回するべきだと思う。紗恵の少し顔を赤くしては言おうとするのは、普段とのギャップを感じ、少しだけどきつとする。まるで別人のようだ。

「私は…初恋まだでさ…」

そ、そうだったのか。なるほど、初恋がまだのパターンも存在するのか。正確な統計を見た事がないため、何とも言えないが俺の予想以上にいるのかもしれない。

しかし、先ほどのあの恥ずかしがるような感じだと、地雷なのかもしれない。これは円滑にコミュニケーションを進めるために、聞きそびれたフリをして、別の話題を切り出そう。

「え、なんだって？」

アニメでは定番のセリフを使った。まさかこの台詞を現実で使う日が来ようとは、夢にも思わなかった。

が、紗恵はほんのり赤かった顔を真っ赤に蒸発させて、興奮気味に言った。

「私、初恋まだなの！大体、夜彩今の聞こえてたでしょ！」

紗恵の子供じみた行動に少しだけ笑みが溢れる。今日はいつもと違う紗恵が見れた気がする。本当に全く違うな、思わずまじまじと見てしまった。だが、俺にも反論すべき点があるのだ。

「なんて事するんだ…。ヒロイン、空気読めなさすぎだぞ。地雷感漂っていたから、空気を讀んだのに…」

“俺の努力は無駄だったのか”という悲痛な訴えは届いたのだろうか。

紗恵は子供じみた行動をやめ、落ち着かせるように深呼吸をする。シンデレラタイムが終わったようだ。紗恵から見ると到底シンデレラタイムでは無いだろうが、俺は少し気に入っていたのだ。

「別に地雷な訳じゃないけど」

声はいつもの紗恵だった。あれ、地雷では無かったのか。あれだけ言いづらそうに恥ずかしがっていたからってつきり俺は地雷だと思っていた。

それにもう一つ、地雷だと思った理由がある。

「どっかの怪しいネット記事に『女子におすすぬ、ブランド彼氏　く愛よりブランド！女子会でマウント取り放題！』ってあったから、アクセサリーみたいな感覚でとつか

えひっかえしてるのかなと…」

紗恵のように友達も普通にいて、女子社会に馴染んでいる人となれば、やはり協調性は必要なのだろう。しかも、それも結構な同調圧力があるはずだ。だから、ひっきりなしに恋をする周りと違う事を紗恵が嫌ったのではないかと。

「なにそれ…。夜彩、そんな記事ばかり読んできると彼女でなくなるよ。偏りすぎだよ、その記事」

紗恵はさぞ困惑した様子で違っていると訴えてきた。ついでに俺の未来予知もしてくれていた。反論の仕方にも“偏りすぎ”と言う表現で適切だし、反論の反論が思いつかないほどの正論だ。

「そうだったのか…」

いや、流石に俺も偏りすぎだと思ったんだけど、周りの女子の会話を聞いてみたりすると、その記事の信憑性がどんどん上がってしまったのだ。うちはそこそのレベルの高校のはずなのだが、いくらレベルが上がっても所詮は高校生だ。イケメンサッカー部員とクラスのアイドルの熱愛でみんな大盛り上がり。破局すると、一見鎮火したように見えるが、実際はみんな裏で新元号発表並みの勢いで超大盛り上がりをしている。世の

中は残酷だ。

「私に初恋はくるのかな」

紗恵はふと不安そうな声で言った。紗恵の周りみんな初恋を知っているとしたりきつと不安になるだろう。自分は人を愛せないのではないかと不安になるのかもしれない。でも、俺が経験則で言える事は一つだけだ。

「初恋は大変だから頑張れよ」

嘘はじゃない。むしろこの四年間で確実に分かった事の一つだ。自然と、昔を懐かしむような重い声になってしまった。

紗恵はそれを見て何かを察したような表情をすると、俺に微笑んだ。

「『経験者は語る?』」

紗恵のその微笑みは冗談めかしていて、そして冗談めかしている事自体が冗談くさかった。まるで辛い中無理して作っているような印象だ。

「あながち間違っていないな」

聞かれたから、答える。紗恵には関係の無い事だ。下手にとにかく言う必要は無い。

「そっか」

紗恵寂しそうに呟いた。先ほどの冗談めかした笑顔が簡単に崩れて、やはり嘘だったんだと感じた。その表情は何を意味するのだろうか。それは本人しか知り得ない事だ。紗恵の選択だ。

紗恵は少し俯き気味に考えると、「あつ」と何か用事を思い出したかのような事をし、て自分のバックを取った。

「私、そろそろ行くね。この後クリスちゃんにも用があるし」

クリスちゃん。突然言われたその言葉にどきつとする。俺は出来る限り平穏を装い聞いた。

「え、ああ。紗恵、クリスタと仲良くなったのか」

紗恵はなんでそんな事を聞くんだという顔をした後答えた。

「うん。連絡先も交換したし」

紗恵は交友関係も広いし、誰でも良好な人間関係を築ける。クリスタも女子の輪から弾き出されているような事は無かった。紗恵とクリスタが仲が良くても別に不自然な事は無い。

「そうか」

俺は素っ気なく、答える。気持ちを込めるとクリスタの事を紗恵が察してしまいそう
で怖かったためだ。

紗恵は机の間を通り抜けて、前のドアに向かっていった。夕焼けが終わる。俺はこれ
でいいのか。このまま何も言わずに行っているのか。紗恵に言うべき事があるだろう。
俺が見ないようにして、藤堂先輩が気付かせてくれた事。

「紗恵」

俺は息を吸うと、覚悟を決めた。こんな単純な事を俺は一体なんでこんな大掛かりな
気持ちを背負って言わなければいけないのか。でも、今はそんな事はどうでもいい。
ちゃんと、伝えるんだ。

「この前は、昨日の昼ご飯の言い方は悪かった。後、待っててくれてありがとう」

言った。自分でもびっくりするくらい素直な言葉で、拙かった。俺はこんな事を言え
なかったのかと思うような内容だ。

紗恵は拍子抜けしたような顔をして俺を見た。驚く気持ちも分からなくもない。だが、
紗恵は笑った。大人びたその笑顔に今度は俺が驚かされる番だった。

「うん」

紗恵はそういと嬉しそうにドアを開けて出て行く。

まるで自分の事のように喜んでいた紗恵を見て俺は苦笑してしまった。

八章

始業式からの雪憐の再会、雪憐に胡蝶蘭を任せて、クリスタとの再会した怒濤の三日間を経て、俺はとりあえず今のところ特に何も起きずに五月の半ばを迎える事ができた。雪憐とは会ったら話す程度の関係性を続けていて、紗恵とは安定のだからとしたりたくない人間関係を続けている。クリスタに関して俺は今のところ接触できていないが、関心を持って注視している。

昼休みになり俺は図書室に来ていた。紗恵とはあれ以来、一緒に食べるようにしているが、男子の視線がうるさく集中できない上に、元々俺は一人でご飯を食べるのが好きなのであくまで時々である。今日はそのボッチデーであったため、早くご飯を食べ終え図書室で癒しの経済本を読んでいた。美味しい。

経済学は色々な学派があるにもかかわらず、何故経済オタクが台頭しないかは疑問である。“俺の推しはケインズ派”とかあっても不思議ではないはずなのだが…。

そんな事を考えていると、ふと本を持った少女が横に座った。ショートヘアの少女に

は見覚えがある。

「あ、先輩奇遇ですね」

お決まりの台詞を言われる。雪憐 花乃。始業式に再会した雪憐とも大分慣れて、関係性を掴めつつあると俺は感じていた。

「ああ、こんにちは」

俺も無難な安全な挨拶をする。余談だが“奇遇ですね”と言えば、回数制限付きで大抵の場合許される。ちなみに何度も“奇遇ですね”イベントをやると好感度によって、近くに住んでるんですか？”イベントと“ストーリーカーを通報しました”イベントに分歧する。

雪憐は“初版 グリム童話集”を手を持っていた。学校図書室のラベルはついていなかったため、おそらく自分のものなのだろう。誰かが同じ本を持っていたはずだ。確か、クリスタだ。

クリスタを教室で見かけた時、彼女が読んでいた本。雪憐とクリスタ。普通だったら偶然なのだが、二人の関係性を鑑みると何か必然性を感じてしまう。…いや、考えるのはやめておこう。今考えるべき事ではない。

「そろそろ、定期テストだな」

俺は別の話題を振ることにした。

「そうですね。この学校のテストは難しいですか？」

「レベル相応って感じの内容だ。雪憐なら上位を取れると思う」

「本当ですか？でも、結果がどうであれ、テストのためにやるべき事をやるだけです」

可愛いな、それ。なんか、アニメ的な可愛さがそこにある。本人は全く気付いていないようだが、良い。無意識がやっている辺りがまた可愛い。後、内容も意欲が感じられてまた良い。多分、真面目なボンコツだから雪憐は評価されるのだろう。

雪憐の事を満足そうに俺が眺めると、雪憐は心配そうに聞いてきた。

「大丈夫ですか？先輩」

「いや、大丈夫」

嘘ではない。別に大丈夫ではないわけではない。むしろ満足だし。ただ、雪憐のこういう方面の察しの悪さは昔からの事だ。男子だったらハーレム主人公向きの人だ。

昔か……。四年前の事、雪憐は俺の好意に気付いていたのだろうか。聞く訳にもいかななし、仮に雪憐が気付いていなくても、俺が責める権利は無いだろう。言葉で伝えてい

ないのに、正確に伝わるわけがない。

「本当ですか？ 顔色悪いですよ、先輩」

雪憐は俺の言葉が信じられなかったのか。食い下がる。確かに、昨日は遅くまで勉強をしている。楽しかったが、朝の目覚めから、調子は良くなかった。

「多分、大丈夫だ」

俺は答えた。多分と付けないと嘘になってしまうからだ。病気や風邪では無いと思う。寝不足気味なだけだ。

「多分って大丈夫なんですか……。ちょっと、おでこ貸してください」

雪憐はそういうと俺に手を伸ばしてきた。雪憐はそういうところは頑固だなと思った。今回だけではなく、人を助ける努力をできる。

しかし、俺も男子であり、その上相手が雪憐な訳だ。雪憐が知らなくても、初恋は俺の中で勝手に始まり、まだ終わっていない。そう簡単におでこを貸す訳にはいかない。

「大丈夫だと思うから」

そう言って俺は軽く雪憐の手を振り払った。雪憐は少し困った顔をした後、「あれ？」と言って後ろを指差した。何？ 幽霊でもいたのだろうか？ それともクリスタとか俺た

ちのとつての過去に関する事か。でも、過去の話ならばそんな明るい顔をしないはずだ。俺は好奇心に負けて雪憐が指差した俺の斜めを見る。

すると、ぱっとおでこの温かみのある何かが当てられた。柔らかい手。先ほどの脈略から雪憐の手だとすぐに分かった。

「先輩…。食べちゃうわけではないですから…」

抵抗しようとする俺を雪憐が呆れ気味に説得する。俺もこうなると振り払う訳にもいかず、素直に雪憐の方を向いて諦めた。

トクンと心臓が高鳴り、脈動が早くなる。このせいで寿命が縮まったのではないかと思っただ。雪憐は前のめりになっているため、俺と距離が近い。

おでこに手を当てるという短い一瞬がすごく長く感じた。

「熱は無いみたいですね」

そう言いい、雪憐は俺のおでこから手を離そうとした、その時だった。

「あれ…夜彩？」

聞き覚えのある声でした。

俺とそのままの体制の雪憐が声の方を見ると、そこには予想通り紗恵がいた。紗恵は

顔を赤く染めて、モテない弟が彼女と歩いているのを見て感動した姉みたいな表情をしていた。…いや、それはブラコンだな、世間一般の姉とは違う。

と、効果音でも付けた方がいいだろうというくらい高速な速度で俺達に近づいてきた。

「夜彩？夜彩？もしかして、彼女さん？」

紗恵は悪戯っぽい表情をして教科書通りの勘違いをしていた。図書室で騒ぐのは良くないと思います。紗恵の捲し立てるようなノリについていけずに雪憐は困惑していた。それを見て、根拠の無い勘違いより雪憐の紗恵に関する誤解を解いた方が良い気がした。今後雪憐は紗恵に会う可能性があるだろうし。

「雪憐、紗恵は普段はそんな感じじゃないから」

雪憐に紗恵を見ようと言っていると、雪憐は少し考えるようにした後、俺に聞いた。

「え、えーと、先輩、紗恵…先輩？は下の名前ですよね？」

なんで、俺に聞くんだ。情報は情報源に聞いた方が確実だぞ。と思ったが、紗恵のノリに若干引き気味の雪憐は俺に聞いてきた。雪憐は“よく知らない他人”とのコミュニケーションが苦手なようだ。

「ああ、芝浦 紗恵。俺と同じクラスの二年生だ」

雪憐は名前を聞くと、ぶつぶつと名前を復唱していた。そんなに名前覚えてもテストにはでないぞ。

「芝浦 紗恵先輩…。先輩が下の名前で呼ぶなんて珍しいですね」

雪憐が意外そうに聞いてきた。確かにそうかもしれない。俺はコミュニケーションが好きではないし、下の名前を呼ぶ事はほとんど無い。今は、クリスタと紗恵だけで、信頼を込めて下の名前を読んでいるのは紗恵だけだ。

と、その紗恵本人は方針転換をしたのか、落ち着いたいつもの紗恵に戻っていた。最初から、それで行けばよかったのに…。

「はじめまして、私は芝浦 紗恵。あなたは？」

紗恵は雪憐に初対面の人に言う挨拶をした。相手に合わせて柔軟に対応を変えられるあたり流石紗恵だと思った。

「一年の雪憐 花乃です」

最初は戸惑っていたが、紗恵が印象を変えた事もあり、シンプルに答えた。紗恵は雪憐が答えてくれたのが嬉しかったのか喜んでるのが分かった。

「雪憐ね…。雪ちゃんって呼んでいい？」

紗恵は女子的な流れで聞いた。親しみやすい名をつけるのは、女子はじめましての公式だろう。この公式に従うとこれは雪憐が紗恵の名前に関して何か言う事だろう。無難なのが「可愛い名前ですねー」とかだと俺は予想した。

「別に構いませんけど」

雪憐は少し居心地が悪そうにそう答える。俺は雪憐が別に嫌がっている訳ではなく、単に適切な回答をしたただけだと分かるが、女子的には部分点も貰えない綺麗な不正解だ。と、今度は紗恵が俺に耳打ちをしてきた。

「私、何か怒らせるような事言っちゃったかな…」

そう考えるのも無理が無いだろう。

「別に悪気は無いし、それに人並みに喜んでると思うよ」

紗恵はうなずいた。その後、ちらつと雪憐の方を見た後、より小さい声で聞いてきた。

「夜彩みたいな感じの人？」

なんで、聞かれないように聞くんだ…。そんなに、“夜彩みたいな感じの人”は侮辱行為なのか。それ、俺も巻き添え食らってるんだけど。

「方向性は違うが、共通している部分も多い」

今現在の俺の解析だ。周りから見れば、同じようなものかもしれないが、根本的には違う。

「わかった」

紗恵はそう頷き、納得してもらえて良かった。きっと俺になれた紗恵ならばちゃんと接する事ができるだろう。

そう思っていると、少し前に見た悪戯な笑みを浮かべた。

「で、どういう関係？」

紗恵はツンツンと俺の腹を突つついてくる。そういうことをされるとくすぐったくて困ってしまう。

「昔からの知り合いで、後輩だよ」

紗恵は納得したような顔を見ると、さらに話を続けた。

「へー。幼馴染ってやつ？」

紗恵の質問は正解なのだから反論のしようがなかった。別に隠すべきことでも無い。

「そうだな」

俺は気持ちを込めずに簡素に答える。紗恵は不思議そうに俺達を眺めている雪憐を見

る。

「夜彩にそんな可愛い幼馴染が居たなんて。私初耳だよ」

紗恵はウリウリと冗談めかして言う。外見は可愛いし、性格もクセはあるが俺は気に入っている。可愛いと言うのには十分過ぎるくらいだ…恋してしまったくらいに。

「紗恵には、話してなかったしな」

四年前の事もあったし、雪憐の事を勝手に紗恵に話すのは不誠実だと思ったから。個人的に、俺が話したくなかったのも理由の一つだ。

「ふーん」

紗恵は何かを察したのか、それ以上は聞かなかった。

これで話を終わると、紗恵は雪憐のところへ近づく。

「連絡先交換しない？」

紗恵はいつも通りのペースで話始め、雪憐は頷いて携帯を取り出した。オタクのキーホルダーに溢れて、カバーにはカラフルなアニメキャラが描かれた紗恵の携帯と革の単色スカイブルーのカバーをつけた雪憐の携帯。強烈な対比を感じる。

ふと、携帯を交換する時に雪憐のホーム画面を覗き見してしまった。覗き見は決して

褒められることではなかったが、実はホームが彼氏とのツーショット写真になっていたりしないかなどと馬鹿な想像をしてしまったせいだ。いっそう、そっちの方が精神的に完膚なきまでに叩きのめされて、綺麗に諦めがついたのかもしれない。

幸いにも、雪憐のホームはツーショット写真などではなく、変わりに見覚えがあるものがそこに写っていた。昔いつも雪憐と遊んでいた草原の上に置かれた丁寧に作られたシロツメグサのネックス。雪憐が俺のために作ってくれて、そしていつかこのネックスが無くなるのを恐れて親からカメラを借りて写真に残していたのをよく覚えていた。懐かしい光景だった。雪憐が過去をぞんざいに扱っていない事が分かって俺は少しほっとする。

一昔前は赤外線通信の連絡先の交換が流行ったようだが、もはや“今は昔”のレベルになってしまっている。技術発展を感じながら、俺は雪憐と紗恵の連絡先の交換を見ていた。

「雪ちゃん。送つといたよ」

紗恵が嬉しそうに言うのと、雪憐は戸惑ったように紗恵からの初めてのメッセージを見る。メッセージを見た時の雪憐は心無しかより困惑度を増していた気がした。

「届きました。芝浦先輩」

雪憐が事務報告をする、紗恵がバッチグーとばかりに言う。

「これから、よろしくね」

安定の紗恵を見ていて、俺はいつもの紗恵を思い出す。紗恵と俺が仲良くなったきっかけがアニメの話だし、そう考えると、雪憐にもするのだろうか。…ん？雪憐に紗恵がアニメの話をする？その結論にたどり着いた俺に寒気が襲った。それはまずい。戸惑っている雪憐に紗恵がグイグイと布教する光景が目に見えかぶ。雪憐はそう言う類には手を出しては行けない。紗恵のようにオタク道を駆け上がるのではなく、真つ当な道を生きてほしい…。ここは俺が釘を刺さねば。

「紗恵、雪憐にオタクの話をするんじゃないぞ。特に、全年齢以外の話は禁止だ」

俺の突然の発言に紗恵が「えーと」と言いながら聞く。

「え、レーティング制限低すぎない？十二歳以上もダメなの？というか、雪ちゃんにオタクの話するなんてどういう事…？」

紗恵…やっぱり話すつもりだったんだな…。俺は雪憐を守らねばならない。

「俺は、雪憐には健全で真つ当な道を突き進んでほしいんだ。だから、紗恵がそういう

事を教えては駄目なんだ。真面目で真っ直ぐな人はそのままでもいいと思わないか、紗恵？」

「いや、『思わないか、紗恵？』とか言われても……」

紗恵が戸惑っていると、雪憐もなんとかしようと思ったのか助け舟を出した。

「大丈夫ですよ。その、頑張りますから」

雪憐が必死に紗恵を弁護していた。雪憐がなにを頑張るのは不明だったが、努力する意思と必死さが伝わり、なんかこう、良かった。

それは、紗恵にも伝わったのか、半ば目を潤ませ感動して、紗恵はガバツと雪憐に抱きついた。

「雪ちゃん、いい！」

紗恵が女子特有のノリで抱きついた。雪憐が完全に困り果て戸惑っていたが、振り払う事もできず、中途半端になっていた。

目の前で繰り広げられる百合百合しい光景と、俺に突き刺さる図書室の男子の視線。男子の皆さんには本当に申し訳ないと俺は感じています。

一見すると、幸せそうだが、結局俺の“紗恵が雪憐にオタクの話をしない”という案

はうやむやにされて、完全に俺の戦略的敗北だった。さらに、学校ではこのせいで夜彩の株がストッパーになるだろう。幸せどころか、デメリットしかない有様だ。

しかし、ふと、雪憐が図書室の入り口を見て表情が曇った。紗恵もなにかを察したのか、抱きつくのをやめる。視線の先には図書室に入ってきたクリスタがいた。クリスタは紗恵を見つけると、近づいてくる。

「紗恵。先生が呼んでたよ」

クリスタは紗恵に用件を伝える。四年前、俺が犠牲にしてしまった人物にも関わらず、俺はクリスタ本人の特徴の事をあまり覚えていない。しかし、クリスタとはどこかで会った事があるということはすぐに俺は確信できた。

「うん。分かった」

紗恵はいつも通りの友達と話しているように明るく返事をした。

その一方で、雪憐は申し訳なさそうな顔をしてなにかを言いたげにクリスタを見ている。

「あ、その、クリス……先輩……？」

雪憐はクリスの後に不自然なほどの沈黙があった、きつと“クリスちゃん”と呼ぶべ

きか迷ったのだろう。

雪憐のその控えめで小さな声を聞いたクリスタは雪憐の方を向いて、微笑んだ。会釈の代わりなのだろうか。しかし、クリスタはそのあと何も言わずに紗恵を向く。

「紗恵。後輩に抱きつくのやめた方がいいよ。女の子が好きならいいじゃないでしょ」

クリスタの冗談半分の言葉。だが、裏を返せば、半分は本気で聞いている。

「ち、違うよ。その、ごめんね。次から気をつけるよ」

紗恵の回答はクリスタの質問に答えているわけではなかった。紗恵はきっと、半分本気で言っていたクリスタの質問に、間違った答えをすれば眠っていた地雷を踏み抜く可能性があったからだろう。空気を読み不確定なものには首を突っ込まない紗恵らしい選択だ。

空気が悪くなったのを察知した紗恵は無理に明るめに切り出す。

「誰先生が呼んでるの？」

クリスタもそれに答えるように声色を変える。

「田中先生。私も用があるんだ」

クリスタはまるで紗恵を俺達から引き離すように歩き出すと、紗恵もクリスタに付い

て歩き出した。

何気ない、二人の女子の歩く姿を見ながら、俺の中で一つの疑問が湧く。確かに過剰かもしれないが、別に抱きついたからと言って、女の子が好きだとは限らない。なぜクリスタはその事に過度に反応したのか、俺には分からなかった。

九章

時は流れても、やるべき事は変わらないのだと感じる。雨が降る機会が多くなった梅雨の七月。この休日だったこの日、俺は紗恵と勉強会の約束をしていた。普段ならば、大抵なんとか理由を探して断ろうとするのだが、今回は勉強会と言うことで快諾したのだ。そして、俺は指定されたファミレスで自習をしながら待っている。俺の周りでは、二年生になってから色々な事があったが、“六月の下旬に期末テスト”と言う事実は何も変わらない。

数学の練習問題解く。考え事をやめてまた無心になろうとした時だった。

「いらっしやいませー」

集中しようとする俺を現実世界に引き戻す声。からんからんと鳴った音の方を見ると、そこには人影がある。紗恵が来たのだろう。待ち合わせの時刻の10分程過ぎていて、俺が上司ならば紗恵の人事評価は最低の部類だ。

しかし、紗恵1人にしては足音が不自然である。足音の間隔が短い上に音が干渉して

いる気がする。そもそも人間はこのような音を正確に聞き分ける機能が無いのだから、俺がどんなに努力しても限界はあるはずだ。

「夜彩ー。遅れてごめーん」

そこに現れたのは、紗恵である。スポーティーな白と英文が書かれたTシャツにカーキパンツ。少女と女性を融合させたような印象を受け、いつもより大人びた印象だ。確かに、可愛いらしい部類に入るのとは間違いないが、俺にはそれを上回る関心を持つものがあり、そちらに意識が行ってしまう。

「それより、何故クリスタがいるんだ？」

ポロシャツと、スカートを着たクリスタに問うが返事がない。クリスタはぷいっとそっぽを向く。クリスタの代わりに、紗恵は拗ねたような声で俺の問いに答える。

「ほら、人数多いほうが勉強会楽しいかなって」

紗恵が何故拗ねたか疑問だが、それ以上に発言内容に疑問を感じた。

「勉強会は人数少ない方が効率上がるぞ」

人数が多ければ、誰かが話し出す。誰かが話し出せば、それに誰かが釣られる。元々、勉強とは個人競技なのだから、個人でじっくりやるべきなのだ。だからこそ、人数が多

いより個々でやりやすい少人数の方が良い。

「でも、ほら、人数少ないと人間性は勉強できないよ。夜彩みたいになるよ」

紗恵は「えー」と考えた後に、パンと思いついたように手を叩き言う。こんなボンコツが、学年九位だとはこの学校も終わっている。しかし、真面目に反論しても埒が明かないと思い、詭弁には詭弁を返す事にする。

「夜彩が増えれば、俺としては居やすくなるんだよな。むしろ増えてほしい」

これは、本心だ。夜彩を相手に話すのなら、相手の考えていることもわかるし、接しやすい。俺としては大変ありがたいのだが、紗恵には不評だったようでドン引きした顔をしていた。

「嫌だよ！私は嫌だよ！何人も要らないよ！」

紗恵は身振り手振りで全力否定をする。流石にそこまで全力否定をされると、俺も少し悲しい思いをした。そういわれると理解はできていたんだけどな。

「…そうか」

俺は悲しそうに言うと、紗恵が少し申し訳なさそうに「ごめんね」と言い、クリスタを奥に座らせて自分は手前に座る。俺も仕方無く諦め、勉強会を始める事にした。

さあ、何の教科をやるのか？そう聞こうと、二人を見ると、彼女らは一つのファミレスのメニューを二人で見て、ガールズトークに花を咲かせていた。会話もすることながら、何故、ファミレスのメニューが一つしかないのか。そう疑問に思いながら、彼女らから目を逸らすため下を見ると、俺の手前にメニューが一つ置いてあった。そうか、俺のせいだったのか。もう注文したから、言ってくればあげたのに。

「クリスちゃん、何食べる？」

「私、スバゲティ」

「あー、私も麺食べたい」

などと、クリスタと紗恵は、自分で決めるよと突っ込みたくなる、会話をしている。どこの情報元かは知らないが、女性は共感を重要視する生き物だと聞いた事がある。なんでも、大昔、男性が狩りに行っている間、集落で暮らす女性達は自分が仲間外れにされないため、共感は極めて重要だったのが今につながっていると。狩りの時代が昔に終わったにも関わらず続くと言うことは、遺伝子レベルで受け継がれていると言う事なのだろうか。大変興味がある。

などと考えていると、クリスタと紗恵は注文を決めたのかボタンを押す。注文が決

まったようだ。

ピーンポーンと間抜けな音がすると思うと、少しして若い店員の女性が現れた。バイトだとすぐに分かる。おそらく学生だろう。

紗恵は目線で先にどうぞ、と言ってきた。俺は既にドリンクバーを頼んでいたため、答える。

「もう、ドリンクバーを頼んだ」

そういうと、紗恵は分かったと頷いて、クリスタの方を見る。クリスタは紗恵にどうぞとジェスチャーをした。

「あ、私、カルボナーラとセットのドリンクバー」

紗恵は言うど、クリスタにメニューを渡す。

「スパゲティとドリンクバーで」

クリスタがそういうと、店員は業務的な復唱をする。確認が取り終わると、店員は気持ち微塵もこもっていない挨拶 with 営業スマイルをすると、去っていった。

さあ、やっと勉強会ができる。俺は、そう感じた。他人と接するのは好きではないが、勉強ならば出来る限り遮断でき個々でできる。と思い、再び見ると、紗恵は席を立って

いた。俺は、何か用かと視線で聞く。

「私、飲み物取ってくるね、クリスちゃん何飲みたい？」

なるほど、飲み物を持つてくるのか。二人以上でファミレスに行った事は少ない俺は新しい知識を得た気分になる。

「オレンジジュース」

クリスタは答える。少し冷たい印象を受けたが、紗恵は慣れているのか気にしていない様子だ。

「はいはい。夜彩は？」

紗恵はクリスタと同じように聞いてくる。俺はさりと省かなかったあたり、空気を読んだなと思う。マジ空気清浄機 ★紗恵さんは伊達ではない。しかし、空気は読めても、ポンコツさは変わらないようで一つの事実には俺は気付く。

「お前、腕二本しか無いだろ。自分で取るから良いよ」

3つのジュースを二つの腕で運ぶのは難しいだろう。しかし、紗恵は恥ずかしがる様子もなく

「分かった」

と答えた。もしかしたら、二回に分けて運ぶつもりだったのかもしれない。

そして、紗恵と並んで歩き出すと、ちょうどクリスタが見えなくなる位置の時俺に小声で俺に話しかけてきた。

「夜彩、クリスちゃんに相変わらず無視されてるよね…。その…仲良くできなくても、話くらいはすれば？」

それは紗恵らしいアドバイスで、俺たちの事も考えての助言だったんだと思う。しかし、俺がどうにか無理に話しかけるのは良い選択だとは思わない。相手が話したくないならその意思を尊重するべきだ。

「いや、別に俺は話す意思はあるけど、あっちが無視する以上どうしようもない」

俺は話す意思はあったので、嘘を言ったつもりはない。ありのままに伝えた。

「あのさ…。過去に何があったか知らないけど…。今は同級生として接せないの？」

紗恵は先程より、より言葉を詰まらせて言った。それはたとえ俺たちの事を考えての助言でも、第三者からの無責任なものに聞こえ、不快感を感じた。

「クリスタから何か聞いた？」

その不快感の一部を吐き出すように言うと、紗恵は黙って首を横に振る。

「いや…。図書室の時、雪ちゃんと夜彩、明らかに様子が変だったから」

図書室の時。きつと、五月のあの時の話だ。あれでは察しの良い紗恵から見れば、答えを言っているのとはほぼ同意味だったかもしれない。

「それは…そうかもな」

そう考えると、ふと意味が合わない受け答えになってしまった。何に対して俺は“そうかもな”と答えたのだろうか。

ドリンクバーに着くと、紗恵に俺は手で“先にどうぞ”とやると、紗恵はそれに従ってコップを二個取りオレンジジュースを先に入れ始める。

紗恵の後ろから並び、ふと考え事をしてしまった。

俺はいつからか、“芝浦 紗恵”と紗恵の事を下の名前で呼んでいるが、紗恵は“夜彩 凜”を夜彩と上の名前で呼んでいる。もし、夜彩と芝浦が対等な友達であるならば呼び方も統一すべきなのだろうか。そう思い、芝浦に声をかける。

「そういえば…」

俺は、紗恵に声をかけた。紗恵はオレンジジュースを入れ終え、自分のカルピスを入れ始めている。

「ん。何、夜彩？」

紗恵は振り返らずに、返事をした。言うべきか迷った。もし、紗恵が俺を下の名前で呼ばないのは、その程度の友達だからだとしたら、俺はその事実を受け入れられるのか。もし仮に俺が受け入れられないなら、紗恵の事を面倒くさがっておきながら、実際は俺が紗恵に依存していた事を認めた事になる。思考を続けるうちに、紗恵が返事をしたのに俺が話しかけないのは不自然だと感じ、話を打ち切る事にした。

「いや…なんでもない。気にするな」

俺のぼそりとした自信の無さげな回答に、紗恵は

「ふーん。変な夜彩」

と興味がなさげにぶっきらぼうに答え、こちらに振り向く。きっと、紗恵と面と向かって話していたら、紗恵に察しられていたなと感じた。

俺も手短にお代わりのメロンソーダを入れると、わざわざ待っていてくれた紗恵に軽く礼を言って、テーブルに戻る。

「はい、クリスちゃん。オレンジジュース」

紗恵はクリスタにいつものガールズスマイルで微笑むと、クリスタも全く同じ顔をす

る。

「紗恵、ありがとう」

…これで、勉強会が始められる。

甘かった。いざ勉強会を始めて少しすると、カルボナーラとスパゲティが届き、ガールズ二人組はご飯を食べ始めてしまったのだ。黙って一人で勉強を始めるも、目の前で女の子二人が楽しそうに食べている光景は集中力を削ぐ。ご飯を食べ終え、勉強会をやっと始められて、始まったのは分からないと言う、具体性にかける質問と雑談の嵐。もはや、雑談会になっていた。

「うー、数学分からないー」

文系の紗恵は甘ったるい甘える声で俺に聞いてくる。可愛らしいが、やっている事は酔っ払いと一緒だ。

「分からないから、勉強するんだろ」

俺は出来る限り適切な回答を選び、誠実に答えた。が、俺の“勉強しろ”と言う願いは通じなかったのか、紗恵は雑談を続けた。

「でも、これ、いつ使うの？一生使わないよ、これ」

長年、数学が嫌いな人間にとっての伝家の宝刀となっている事を指摘する。これによって、多くの大学が予算削減の被害を被ったはずだ。しかし、高校生にはこう反論できる。

「安心しろ、二年後、早速使う」

言うまでも無い、大学受験だ。大学受験には数学は不可欠で、そして、大学受験は人生を大きく左右する。

「受験……。受験嫌だよ……」

紗恵は死んだ魚の目をして、机に突っ伏してしまふ。確かに、ストレスとプレッシャーで憂鬱になる気持ちは理解できる。

そう言って目で、紗恵を見てみると、紗恵は突っ伏したまま聞いてきた。

「あのさ、夜彩、どこ受験するの？」

二年の四月の時点で志望校を決めている人は珍しいだろうから、きっと大体の回答でいいのだろう。

「国立の理系」

俺は参考書をまた見ながら、言う。

「夜彩、テストの点数良いもんね」

紗恵は、そういうと、何を思ったか、死んだ目を休息に生き返らせ、ムクッと起きる。

「クリスちゃん、この人、前回の学年末の点数、この学校の歴代2位だよ」

紗恵はクリスタに謎の布教を始める。クリスタに俺の良さを布教して何になるんだ。

クリスタなんて苦しさが伝わる苦笑いしてるし、「知らねえよ」と言わんばかりだ。俺も逆に紗恵にクリスタの良さを布教したら大変面倒だと感じる。お互い様だ。

俺が自分で自慢するのも癪だったので、比較的安全な謙遜をする事にする。

「結局、藤堂先輩には勝てなかったけどな」

この学校は“五教科のテストを作成する担当の先生”が何十年も変わらずにやっておりテストのレベルがほぼ均一である。我が校が誇るその無意味な伝統を活用し、歴代の1、2、3年の学年末テストの優秀者は学校の敷地に所属年度と合計点ともに彫られる制度があるのだ。

現在は1年生のテストでは、

1位 藤堂 沙月 四九3点

二位 夜彩 凜 四九1点

となっている。3位は藤堂先輩が来る前までは大昔から1位だった人らしい。この歴代1位も藤堂先輩をある程度尊敬している由縁だ。

「でも、夜彩、すごいよ。人間性を代償に得たものは大きかったね!」

紗恵は目をきらめかせながら絶賛する。しかし、内容は悪口同然だと感じた。

「だから、人間性を犠牲にしたとか言うなよ!」

間違っていないのかも知れないが、俺は認めるわけにはいかなかった。それに、「人間性を犠牲にできるほど持っていない」と言わないあたり、紗恵は優しいのかも知れない。いや、これは怒って良い内容なのでは?

そう思い、紗恵の方を見た時、紗恵の携帯が鳴った。

「あー、ごめん」

紗恵はジェスチャーでわざとらしく俺達に謝ると、席を立って、店から出て行ってしまった。

残されたのは、紗恵という通訳を失った、クリスタと夜彩。先程のメンバーから1人減った二人なのか疑われる程の沈黙がこのテーブル席を覆う。友達の友達問題の時もこんな気分なのだろうか。しかし、クリスタが会話する意思がない以上、俺もどうするこ

とも出来ず、勉強の続きをしようとした時。

「ねえ」

クリスタの低い声がした。顔を上げて見ているとクリスタが真っ直ぐとこちらを見ている。それは雪憐よりも冷たく、黒い何かを感じるもので、同じ表情でも人によって違うのだと感じた。

「夜彩くんは、花ちゃんの事どう思ってるの？」

“花ちゃん”、クリスタから出たその呼称は小学生の時の雪憐の事であり、四年前の話である事がわかる。クリスタは四年前の事を忘れた訳ではなく、間違いなく覚えているのだろう。そして、花ちゃんと呼ぶからには最低でも四年前は親しかったはずだ。四年前、雪憐を傷つけてしまった俺は、クリスタと雪憐の関係など怖くて考える事は出来ずに放置した。

「幼馴染だ」

簡素に事実だけを述べる。嘘は何一つなく、そこにあるのは客観的事実だけだ。クリスタが何をどう考えているか分からない以上、余計な事を言うべきでは無い。

しかし、クリスタは不満そうに口を尖らせると、オレンジジュースをストローで吸い

上げる。そして、俺に問う。

「夜彩くん、まだ花ちゃんの事を引きずっているの？」

クリスタは質問を変え、より深くに踏み込んだ。クリスタ自身にもリスクがある事はわかっているだろう。にもかかわらず、クリスタは踏み込む。クリスタにとっても四年前は重要で、そして向き合おうとする強い意志を感じられる。

「人は変わるんだよ、四年の歳月で」

クリスタは俯き気味になって、俺に吐き捨てた。まるでタバコを捨てる時のような投げやりさで、俺に伝わっているかなど気にしていないようだ。

「仮に変わったとしても、今の雪憐も雪憐だ。だから、雪憐が変わったなら今の雪憐とちゃんと向き合いたい」

だから、クリスタの深い意図など考えず、言葉通りに自分の思っている回答をする。

すると、クリスタは俺を小馬鹿にするように笑った。悪戯な表情と言うには悪意と苦痛が多過ぎる。声色は少し高い声でクリスタは答える。

「夜彩くん、ストーリーカー向きの性格したんだね」

先程の質問は、あまり意味のない事だと感じた。四年の歳月で雪憐と俺の関係性が変

わっても、それは俺達の問題でクリスタには関係ない。何故、興味を示すのか疑問である。しかし、俺は聞かれた以上答えなければならぬ。会話のキャッチボールはボールを持ち続けられ成立しない。

「ストーカーなんて、向いてないぞ。無視され続けたら、すぐに凹む自信がある」

雪憐と俺の関係性は関係無い。あくまで俺の性格の話。人間空気清浄機は好きではないが、悪化させる必要も無いだろう。俺もふざけた答えをする。

「じゃあ、メンヘラ？」

クリスタはこの無意味なキャッチボールを続けるつもりようだ。本当なら、こんなもの返さずに勉強を始めるが、クリスタと会話ができるのは大変珍しい事だ。ならば、多少無駄でも続けるべきだろう。

「誰にも知られず、勝手に自分の後悔で病むのはメンヘラと呼べるのか？」

これも、嘘ではない。誰も知らなければ、それはメンヘラではない。勝手に自滅する馬鹿だ。自分で分かっている自身の性格の一つ。

「呼ばないね。それは馬鹿だよ」

クリスタも同じ結論に達したのか、そう断じた。きっと、藤堂先輩も紗恵も雪憐も絶

対にその結論に辿りつかない。クリスタだから辿り着く。段々と、クリスタと話し性格を考えていくと、ある意味夜彩に共通する部分も見えてくる。

クリスタも感じていたのだろう、今までも何一つ中身のないキャッチボールは時間の無駄だったと言わんばかりにため息をついた。自分で始めたくせに。そして、会話の軌道を修正しようとする。

「夜彩くんは、もし花ちゃんが四年前の事をもう過去の思い出にしてるなら、どうするの？」

それを、言われると動揺する。ある意味、考えられる可能性で最悪のパターンなのかも知れない。雪憐が過去の思い出になっているのであれば、きっと雪憐にとっては古傷のようになっていて、俺のようにまだ傷が開いている訳では無いだろう。雪憐が一番幸せになれる可能性でもある。だから、俺は喜ぶべきなのだ。しかし、同時に俺の中でまた新たな後悔が生まれる。“雪憐は前を向いて歩いていたのに、俺は過去に縋り続けていたのか”と。

「それに、四年前の事を引きずり続けて、花ちゃんもあなたも満足？」

クリスタは動揺した俺を見て、追撃するかのように聞いた。その悪意に溢れた笑みに

俺は奇立ちを覚える。四年前を引きずり続けるしかなく、選択肢が一つしかなかった俺に“その選択は正しかったのか”と尋ねているのだ。

「：そう言うお前だって、今でもの“花ちゃん”と呼んで、四年前の事を引きずり続けているじゃないか」

それが、俺の出した答えだ。詭弁であるのも理解しているし、正しい答えかどうかは分からない。事実、クリスタは求めてないと大きなため息をつき失望感を露わにしている。

「だから、クリスタが自分自身に聞けば答えを知れる」

クリスタも四年前を引きずっているのは事実だ。ならば、どんな思いを抱いているにせよ、強い思いである事には変わらない。その自分の抱いた思いがすでに“四年前の事を引きずって満足か”という問いの答えになっているはずだ。

「分かった。質問を変えるよ」

クリスタは先程の失望感に加え、さびしさを滲ませて言う。クリスタが何を考えているかは分からない。でも、きつとクリスタの瞳にも何かが写っていて、俺と同じように何か強い思いを抱いている。

クリスタは少し前を置くと聞いた。

「四年前の事……いや、四年前の初恋にどう結末を迎えたいの？」

クリスタの言葉に最後まで聞かずに、世界は固まった。なんで、クリスタは俺と雪憐の事を知っているのか。分からない。雪憐が言った？ いや、その可能性は全く想像が出来なかった。

「私だって花ちゃんと親友だったわけだし、近くに居れば分かるよ。当然、花ちゃんもね」

俺が固まっていると、クリスタは俺に事情を説明する。クリスタはそんなことも分からないのかと、そんな事が通用すると思っていたのかと、俺を嘲笑う。それは、もはや説明に俺は感じなかった。

「それとも、気付いてないと思ってたの？ だとしたら、鈍感さにも程があるね」

説明の化けを被った、嘲笑の最後には説明の皮を破り、本心が剥き出しになる。四年前、そんな未熟な人間が初恋をして、そんな気持ちで恋をしていたのかと。そう言うのに等しい。何も分からなかったくせに、推測だけで雪憐を助ようとし傷つけ、そして知らないと推測した事は、実はクリスタにすら理解されていた。

「夜彩くん。もう一度聞くんね。あなたはどうしたいの？」

クリスタはひどく動揺した俺の狙うように優しい声で聞く。それは優しいさなのではなく、優しさに見せかけた悪意なのだとすぐに分かる。動揺は後悔に変わり自分の頭を覆い思考を遮る。

「俺は……」

クリスタは笑った。「吐き捨ててしまえ」と、そう言っているように見える。

吐き捨ててしまう考えが後悔と俺の頭の中に一緒に現れる。普段考える事さえないことは後悔のせいで正常に切り捨てる事は出来ない。

しかし、吐き捨ててしまえば……。

それは、正しい選択では無い。これを言うべき相手はクリスタでは無い。

「ノーコメントだ。それを言うべき相手は、雪憐だ」

夜彩らしい笑顔ができていと自分でも分かる。これが正しい選択だ。そう感じると、今まで頭を支配していた後悔が綿のようにすうっと飛んでいく。

「それなら、最後までそう信じることだね」

クリスタはそう答えた。先程の悪意と苦痛の含まれる表情は無くなり、あるのは素朴

な表情だ。クリスタは四年前にどんな思いを抱き、今、四年前に何を託しているのか。そんな事を考えると、興味が湧いてしまい。ふと口走る。

「なあ、もしかして、クリスタの……」

それは、可能性の話。それはきっとクリスタが四年前に抱いた思い。でも、真実かどうか分からない。だから、知りたくなったのだ。

「私もノーコメント。それは私の問題だから」

だが、クリスタは歯切れが悪そうに答える。それは、まるで先程の俺のような感じだと思う。苦笑いをする。

クリスタが先程の俺を問い詰めたように、俺がしつこく聞く選択肢もあったのかも知れない。でも、それは既に俺が答えを出した事だ。

「そうだな。悪かった。クリスタが考えるべき事だ」

十章

セミが合唱を歌い、日本列島は大音量に満ち溢れる。日本にもこの季節がやってきたと感じる八月。かつて俺は人類の都市化を批判したが、騒音ならばセミも負けていないだろう。

そして、この騒音の時期に始まるのが、学生達の休息、夏休みである。小中高と上がつても彼らの喜びは変わらない、十二年越しで受け継がれる大切な思い。この思いは、学校が変わっても歳を重ねても学生である証、“真の学生証”なのである。

夏休みは、自分のやりたいこととやるべきことをやる期間である。あるものはゲームに明け暮れ、あるものは勉強に打ち込み、またあるものは青春に打ち込む。夏休みには一人一人、ストーリーがあるのだろう。

六月に行われた期末テストを終え、クリスタともあれ以降完全な無視は無くなり業務連絡と俺への皮肉ならば口を開いてくれるようになり、雪憐とは一進一退を繰り返しながらも、お互い距離を近づけられている気がする、紗恵は特筆すべき事は無くただ生産

性のかけらのないだらとした関係を続けている。今までで、きっと一番変化があった夏休みの入り方である。

七月の終わり頃、雪憐は俺に今日近所のショッピングモールで買い物をしようと提案してきた。急な提案だったし、四年前に雪憐の私服で会う事は無かったので俺自身戸惑ったが、断るという選択肢はなく、承諾し、今に至る。

俺は大型モールの待ち合わせに指定されたベンチの近くに立ち、約束の時間の十分ほど前にも関わらずソワソワとして周りを見渡している。結局、タイミングを逃した俺は雪憐と連絡先を交換できていなかった。

服も勉強会の時とは違い、俺の持ちうる最大限の知識を活用し、最適解と思われる選択をし、待ち合わせ時刻の三十分前の到着、もちろん可能な限り近辺もチェックした。

これは最適だな。間違いない……と信じたい。

からん、頭の中で鈴が落ちたように、ふと人の気配を感じた。

振り替えると、その少女はそこに立っていた。純白のワンピースに身を纏い、平均より少し小柄の雪憐。その美しさと、美化され尽くされた俺の初恋の思い出、そして幼馴染の昔の日常が重なり目眩がし、身体の芯から熱い何かが俺の心を焦がす。たとえ計算

でやっつていようと、雪憐のその可憐な姿に変わりはない、そんなことちっぽけな事に感じる。

俺は見惚れてしまったんだ。俺は思考が止まり、四年間の後悔と愛が蘇る。自分でも、気持ち悪いと感じる。四年間ずっと初恋を続けて、一人の少女を想い続けていたんだ。再開した時から今日まで、俺はまるで雪憐という後輩に初めて出会った後輩な様だと感じる時もあった。でも、こうしてみるとこの感情は“初恋”で、答えの出しようの無い難題を俺に突きつける。

雪憐は黙って見ていた俺の事を不自然に感じたのか、少し恥ずかしそうに俺から目を逸らして俯き気味になる。それは保護欲を掻き立てる。いや、保護欲だけでは無い、俺の全ての欲望を掻き立てた。四年間、いくら雪憐を想っても湧かなかった“本物の雪憐”を見た気持ち。

「先輩……その……似合っていないませんか……？」

四年の歳月、第二次性徴を迎えて、俺の身長より小さい雪憐が上目遣いで遠慮しがちな声で聞く。それは四年前の雪憐を重ねてしまう。だが、四年前の雪憐はこんなに可憐な服は着ていなかった。四年前の雪憐はこんなに女の子らしくなかった。そして、四年

前はこんな関係では無かった。

「すごく似合ってる」

シンプルな答え。これはもはや答えではなく、心の叫びだ。そして、真っ直ぐにそんな感想が言える自分が嫌いだ。四年間ずっとほったらかしにしていたくせに。

「そうですか！うれしいです」

しかし、雪憐は満面の笑みを浮かべる。それは言わなくても、嬉しさが伝わってくる。シンプルな答えでこんなにも喜んでくれるのが、俺も嬉しくて、心の何かを加速させる。雪憐のその喜びの表情は俺にとって、とてつもなくありがたい贈り物だった。

「先輩と出かけるから、わざわざ着たんですよ。ずっと、着てなかったのをちゃんと綺麗にして」

雪憐はほくほくと、ワンピースを何故着たのか教えてくれた。そして、クルリと回る。それは白鳥の飛び立つような様で、四年前の無邪気さ。そんなどうでもいい解説も、宝石のように価値と、すぐに壊れてしまいそうな儚さを感じる。雪憐がそんなどうでもいい話を、俺に話してくれるのが嬉しくてたまらなかった。

雪憐は「あっ」と気づくと、しゅんとなる。無邪気さがある“四年前の雪憐”から

恥ずかしそうに“今の雪憐”に戻り、その瞬間が愛おしい。

「その、余計な話でしたよね…ごめんなさい…」

雪憐が申し訳なさそうに、謝る。それすら見てみたい気持ちが湧き、俺が話しかけるのすら躊躇うほど、絵になっていた。壊したくは無い。でも、雪憐に誤解されて悲しむのは嫌だから、答えなければならぬ。

「いや、俺も聞けて、嬉しい」

たどたどしく、不器用に答える。雪憐のように可愛らしく笑えないが、それでも俺は笑った。綺麗には笑えていないと思う、だがそれは四年間で一番自然に笑えた笑顔のはずだ。雪憐は驚いたように俺を見て、そして笑う、笑い合う。お互いがお互いに答えるように。どうして、こんなどうでもいい話が嬉しいのだろう。それはきつと論理では言い表せない難題で、心が受け入れられる感情。

「行きましょうか、先輩」

雪憐は言う。始まりの合図。俺も答える。

「ああ、だな」

何気無い、シヨッピング。しかし、それはまるで四年前の続きのような気がした。

「先輩はどこへ行きたいですか？」

雪憐は心躍るように聞いてくる。

「雪憐はどこか希望とかあるか？」

俺は答える。が、言い終えた後に後悔した。これではまるで何も考えておらず、雪憐に丸投げしているように聞こえてしまう。

「い、いや、投げやりな訳じゃないけど、希望を聞かないといけないと思って」

俺は拙いが、伝わるよう賢明に説明した。自分でもすごくカッコ悪いと思っていたし、何故こんな些細な誤解……いや“誤解の可能性”を解こうとしているのか自分でも、理解に苦しむ。そもそも、雪憐が誤解しているか不明確にも関わらずだ。

そんな俺を雪憐はきょとんと見つめている。そして、にこにこ満足そうに笑う。

「先輩……分かってますから、大丈夫ですよ」

雪憐は分かってくれていて安心した。少し、心配しすぎだったのかもしれない。

「私、服を見たいです」

雪憐は笑うのをやめるとそう言った。それは雪憐にとって提案だったが、俺の中では決まったようなものである。

「雪憐がしたいなら、それでいい」

俺は優柔不断な発言をするが、これが自分の意思であるからどうしようも無い。先程のように雪憐が誤解していない事を祈ろう。

「はい」

俺が祈るまでもなく雪憐は答える。

「それにしても、どうして服を？」

俺は服の知識は無いし、センスも無い。俺が今来ている服も当たり障りの無いノーマルなシャツで、あるのは清潔感だけ。特筆すべき事は何も無い。そんな俺がましてや女性用の服を手伝えるとは思えない。俺の意見を聞かないなら一人で行った方が良いのでは無いか？

「その…先輩の意見を聞いてみたいなって…」

しかし、雪憐は恥ずかしそうに俺が想定していた答えを言った。少し顔を赤らめて言われてしまい、俺も動揺して少し間拔けな返事になる。

「そうか。でも、俺はそんなに服に詳しくないけど」

俺が懸念している事を伝える。心の中で思っているだけでは相手には伝わらないだか

ら、相手に言葉として伝える必要がある。もし、雪憐が俺に的確な意見を期待しているのであれば、期待外れだったと悲しむ前に通達するべきだ。

「いいんですよ。先輩の意見なら」

雪憐はそんな些細な事であると言わんばかりに答える。その返事は男として何か保護欲のようなものを引き立てた。俺は落ち着かせるように心に気合を入れ答える。

「分かった」

雪憐がこんな俺の意見でも必要としてくれるなら俺は雪憐の期待に応えたい。

雪憐とそんな事会話をしているとふと雪憐が通路の方を見る。俺もつられてみるが別にエイリアンがいる訳ではなかった。何故かと疑問に思うと、昔こんな事あったな 생각이湧いてくる。しかし、その記憶を思い出す前に雪憐が言った。

「歩きます、先輩？」

雪憐はふと止まっていた俺に問う。何故歩かないのかと。それはかつての雪憐がお弁当の約束をしてくれたあの時を思い出す。

「そうだな」

俺は答えると、雪憐の後について歩き出す。

しかし、夏休みだけあり人も多く、すれ違う人はカップルや友達によるグループが非常に多い印象を受ける。リア充牧場である。きっとこれを反リア充の方々が見たら吐き気に襲われて、自分自身を見失ってしまうのではないだろうか。

雪憐と一緒にエレベーターに乗り込むとそれは満員電車を彷彿とさせる人口密度である。周りに人がいるため距離が近いのに雪憐と話すことさえ困難である。乗り込む時にインフレしたように高層なモールの階に服屋のあるところをパッと押す事ができた。おそらく事前調べがなければ、乗る時にまず確認せねばならず、素早く押す事は出来なかっただろう。

エレベーターを降りてすぐ服屋があった。雪憐は服屋を見つけると子供のように小走りに行くと、入り口付近に行って俺に手を振ってくる。四年前の無邪気さのある雪憐は可愛らしく、苦笑ながらも俺は嬉しい気分で近く。

「先輩、この服どうですか？可愛くないですか？」

俺も店内に入ると、雪憐は入り口付近にあった服を示す。確かに雪憐が着たら可愛いらしそだな。俺はその姿を想像すると現実にしたくなってしまうた。

「可愛い。着る？試着する？」

俺は先程の小走りの時の雪憐のように言う。俺は、声変わりをした高校生なのにテンションは少年の声だった様に思われたかもしれない。

「早過ぎです。ここ、入り口ですよ」

雪憐は嗜むように少し呆れ気味に言う。しかし、俺は納得行かずに少し考え込んだ後、ボソリと不満を漏らしてしまった。

「雪憐になら、可愛いのは、似合うだろ」

それは小声で言ったが、内容を考えてと自分で恥ずかしくなる。後悔が襲い、雪憐に何かしら言い訳じみた事を言おうと雪憐の方を見ると、そこには雪憐は居なかった。

「あ、先輩これとか」

雪憐はもう少し奥にあった別の服を取りに行っており、俺の言葉は聞いていなかったようだ。有り難いと感じていると、雪憐がその服を持って寄ってくる。

「うん、可愛い。着る？試着する？」

先程よりも明るい服、可愛らしく雪憐に似合うのは間違いない、不思議と先程と全く同じ感想になってしまう。

「それ、二回目ですよ、先輩…。私はこうなるって分かってましたけど…」

雪憐はふっと笑みをこぼして言う。嫌われないかと心配だったが、本心から感想を言って正解だったようだ。しかし、よく考えてみると決して褒められているわけでは無いと感ずる。

「あ、“何をわかってたか”、聞かない方がいいな」

俺がふざけて軽いノリで聞く。紗恵もそうだが夜彩に対しては何かみんな諦めた上で接しているような気がしてならないからだ。

「その方がいいですよ」

雪憐は不敵に笑う。なんとなく察する事ができた。

「夜彩の風当たりは強いな」

夜彩は辛いよと思ひ肩を落とす。夜彩の生きやすい社会の実現を是非急いでいただきたい。

「大丈夫です。私は分かっていますから」

そんな俺を見て雪憐は何かを思ったのか励ますように言う。その励ましには複雑な思ひはあったが、励まそうと努力した姿勢はありがたい。

「そうか、それはありがたいな」

雪憐とせっかく買い物に来ているのに暗い雰囲気になるのも申し訳ないと感じ気分を切り替える。ふと周りを見ると未だに入り口近くにすることに気がつく。

「もう少し、奥行ってみるか」

俺は服屋にはあまり行かないが、きっと他のお店同様、奥にも品が揃っているはずだ。シヨッピングは可能な限り多く見比べる必要があるだろう。

「そうですね」

雪憐の同意も得られ、歩き出す。

歩くと、メンズ用品、ビジネス服、子供用など順にある。一列向こうには女性用の下着コーナーがあり、俺はたまたま目に入ってしまったため、慌てて目を逸らした。目に入っても罰則があるわけでは無いが、じろじろ見るのもよろしくない。それにあまり見ると、俺の寿命も縮まる。

服を見ていると、ふと気づく事があった。今は八月にも関わらず袖の長い暑そうな服が置いてある事だ。何故だろうと考えていると、ふと答えにたどり着く。これは秋物という事なのだろう。もう、秋物が置いてあるのか…どういう事だ、今八月だろ。

雪憐はふとレディース用品で止まり服を見始める。いくつか雪憐は自分の中で検討す

ると、ブラウスと半袖のシャツ、そしてズボンを持つてくる。

そして、俺の前でブラウスとシャツを掲げる。

「先輩、どうですか」

どちらが良いと言う問いだろう。答えは決まっている。

「うん、可愛い」

どちらが来ても雪憐が可愛い事実には何一つ変わらない。得られる結果が同じであるため俺はついに一時的に思考を放棄してしまう。雪憐可愛い。

雪憐はと言うと、仏の顔を三度までと言う事なのだろうか、驚いたように俺を見つめている。というか、先程俺のこと“分かっている”って言わなかった、雪憐？

雪憐は数学の証明問題を途中でこのやり方では出来ないと気が付いた時のような顔を見ると、パンと手を叩き何かを思い付いたようだ。雪憐は嬉しそうに聞いてくる。

「この服とこの服どっちが良いと思いますか。先輩？」

雪憐は先程より情報量を増やして、質問してくる。俺も雪憐の期待に応えようと先程放棄してしまった思考を再起動してシンキングを始める。

「人によって好みが別れるから一概には言えないんじゃないか？でも、可愛いぞ」

思考の結果をありのままに答える。思考をしてもしなくても可愛いと言う結論には変わらないようだ。

雪憐は“知ってた”とばかりに苦笑いすると次の手を打つ。

「…じゃあ、“先輩は”どちらが好みですか？」

先程の俺の答えを元にフィードバックをして自分の欲しい情報を得るために雪憐は質問を変えた。俺は再び考える。

「人間、時間の経過で価値観や好みは変わるし一概には言えないと思うぞ。でも、可愛いぞ」

これが適切な答えだろう。子供はピーマンが嫌いだが、中年になると好きになる人も多い。五十歳で女子高生の服は似合わないだろう。きっと、似合う服が変わりファッションの戦い方が変わるのだ。これは極端な例だが、とにかく一概には言えない。

「……今」、先輩はどちらが好みですか？」

雪憐は“うぐぐ”と効果音が出ても不思議では無い苦しむ声で聞く。しかし、内容を精査して最善な答えを探すとこちらも同様の答えになる。雪憐はどちらでも可愛いだろうから。

「どっちにもそれぞれの魅力があるし一概には言えないんだよなあ…。でも、可愛いぞ」

雪憐はついに諦めたようにがくりと肩を落とす。それを見て俺も申し訳な無い気持ち湧くが、決して雪憐を馬鹿にしていた訳では無い。雪憐の期待に応えようと嘘偽りのない最善な回答を心がけた結果だ。

だが、雪憐はふと顔を上げる。こんな単純な解法があったかという顔をして聞いている。

「先輩はどちらの私を見たいですか？」

雪憐はチェックメイトだと言わんばかり。どちらと言われても、俺が見たいのは服では無く“服を着た雪憐”なのだから。

「俺は、雪憐ならどっちでもいい」

俺は正直に答える。

雪憐は驚いたような顔をする。心なしか顔が少し赤いように感じる。

「え？そ、そうですか」

動揺していたのか少し言葉を途中で囁んだ。照れる所がまた愛らしい。

「そうだ。両方見たい」

これは雪憐を喜ばせるためでは無く、俺の本心だ。見てみたい。

「先輩がそういうなら仕方ないですね」

雪憐は諦めているのに嬉しそうにそういうと、試着室へ行こうとする。後は、雪憐の買い物なのだから最終的には雪憐が決め、購入するだけだ。俺がいても邪魔なだけだろうと思い、店の外のベンチで待つために引き返そうとする。しかし、雪憐が俺に手招きをした。ついて来いということらしい。

雪憐についていくと、ふと雪憐がワンピースを着ている事に気がつく。ワンピースについては良く分からないが、着替え辛いのでは無いかと思った。だとしたら、わざわざ俺のために着てくれたのか。それはとても嬉しく一人で喜びに浸かる。

そんな事を考えていると、雪憐について行くと別れるタイミングを逃し、試着室に着いてしまった。

「着替えてきますね、先輩」

雪憐はさも当然のように言うとかーテンを開ける。

「なあ、雪憐」

しかし、俺は聞かなければならない。ここは試着室であり男が一人待っていて良い場所では無い。

「なんですか？先輩」

しかし、どう伝えたものか。決して、良くない真似をするつもりは無いのだが、何故かこれを言い出すのに少し抵抗があった。

恥ずかしそうに俺がしていると、雪憐は不思議そうに見つめる。ふと、なにかの可能性に気がついたのか、アニメのように顔を赤くして雪憐まで恥ずかしそうに言う。

「の、覗きはやめてくださいね、先輩」

俺はとんでもない勘違いをされているようだ。その誤解に比べると、この事など小さな事に聞こえ、話す気が湧く。

「いや、そうじゃなくて、試着室の前で立って待つものな」

俺は自然に事情を説明する事ができた。何故、俺はこんな単純な事を言えなかったのだろう。

「あ、そうですね」

雪憐は自分の勘違いが恥ずかしかったのかわざとらしい咳払いをすると、そう答える。

「そうだ、俺は通報されたくない」

俺が切実な訴えをすると、雪憐は納得したようにうなずき、ベンチを指差した。

「なら、あっちのベンチで待っていてください」

俺はうなずく。

「わかった」

俺はベンチに腰掛け、雪憐が着替え終わるのを待ち始める。

四年前、ショックを受けた時、“俺はもう雪憐に会う資格は無い”などと考えていて、四年前の自分は今の自分を想像できなかったはずだ。今はとても楽しいし、例え、歪んだ初恋の思い出であったとしても、それは恋そのものの感情を雪憐に対して感じている。しかしながら、こうして思い出に浸って、雪憐を引き摺り回し、俺は縋り雪憐につづけていて良いのだろうか。雪憐は可愛いし、学校では普通にモテるだろう。むしろ、俺が雪憐の優しさに甘えているのではないか。

…いや、この思考は止めよう。せめて、せめて今くらいは全力で楽しもう。

そう思い顔を上げると、

「着てきました」

雪憐は少し恥ずかしそうに着替えを終えて出てきた。先程の白ワンピース雪憐が天使や白鳥に例えるならば、今のブラウスとズボンの雪憐は現代的な美少女と言える。四年前とは身体つきが変わる事は再会して分かっていたが、こうしてみると、やはり違う事が分かる。

へそ出しというほどでもないしろ、お腹の一部が見え露出度が高いオフショルダーなブラウスだと身体の曲線が目立ってしまい、胸が目に入ってしまった。雪憐が俺のわがままを聞いてくれて純粋な気持ちから、着ているのに申し訳ない気分になり、そのせいか成果で補おうと評価に熱が入る。

「うん、シンプルで大胆なブラウスは夏特性の薄手の女の子らしさと女性的を兼ね備え。着心地が良さそうに見えるその姿は、おおらかさを演出する。おおらかな女の子らしいのに明るい活発な印象とは……いいと思います」

支離滅裂な意見に見えるが自分の思った事をそのまま述べた結果だ。色合い鮮やかで今の雪憐に活発な四年前の面影もあり最高だった。

「そうですか。いつもの先輩の意見が聞けて嬉しいです」

雪憐はこんな意見でいいのか。嬉しそうに伝えてくれた。何故、こんな意見でいいの

か疑問に思いつい聞いてしまう。

「これで良いのか？」

自分でもお世辞でも良い意見だと言い難く、その上纏まっていない。小論文なら0点レベルだ。

「はい、十分です」

しかし、雪憐は何も根拠を示さずに自信を見せて笑った。雪憐が信じてくれているのなら、それで良いのではないかと思い、質問をやめる。雪憐が何を信じるかを決めるのは雪憐自身だ。

「役に立ったのなら、良かった」

これが最適だと思い、当たり障りの無い答えを返す。

「その、もう一着着てきて良いですか？」

雪憐は聞き辛そうに俺に確認を取る、願ってもいない事だ。

「ああ、楽しみにしてる」

俺が声を弾ませてそう答えると、

「はい」

雪憐はそれに応えるように明るい声で言った。

雪憐が試着室に行くと、また暇になってしまふ。先程の思考の続きをやるうかと考えたが、鬱っぽくなりそうだったので思考は行わなかった。ボーっと頭を休ませていると、雪憐が現れる。

「どうですか？」

雪憐は今回、半袖のシャツで出てきた。今回の雪憐は女性的というより大人しい上品な感じがし目のやり場にもさほど困らない。

「知的な感じでビジネスライク、そう言った意味では性格面ではこちらの方が、雪憐にあっているかもしれない。先程にはキャピキャピ女子感があつた。これはこれで、いいと思います」

先程は本当に似合っていたが、先輩としては悪い男に絡まれるリスクが少しでも上がるのなら避けて欲しかった。その点、こちらは比較的安全で、どの場面でも使えそうだ。「結局、先輩はどちらが良いですか？」

雪憐は熱が冷めないうちに聞いてくる。同時に二つの服を見られない以上、記憶が飛ばないうちに聞いておこうと言う事だろう。

「どちらも捨てがたいが：前者が良かった」

両方良かったが、前者が強力すぎたのだ。予想以上に思考量は少なくて答えが出る。

「ブラウスですか？」

雪憐は確認のため聞いてきた。

「そうだな。なんとというか白ワンピース並みのドストライクだった」

少し気持ち悪いと思ったが、例えば気持ち悪い事でも本心であるから言ったほうが良い
と思い覚悟を決めて言う。

「よかったです。じゃあ、これにします」

雪憐はそれを聞き、あっさりと決めてしまう。それを見て俺は違和感を感じた。

「俺としてはそれが良いが、俺が着て欲しい服と自分が着たい服は違うのか？」

人の好みと、自分の好みは違う、そしてこれは自分の買い物、自分自身のための買い物なのだ。だから、

「別に雪憐の買い物だから雪憐が選ぶべきでは？」

と俺は言った。自分自身の選択は自分の手によって選ぶべきだ。

「先輩が似合うものが欲しい」のはちゃんと、今の私の意思です」

俺の疑問に対して、雪憐は凛と毅然に答えた。それが本心である事を俺が確信する程の言い方である。

「なら良いんだ」

雪憐の意思によってその選択を選んだのであれば、俺は何も干渉する権利は無い。

だが、雪憐は言い足りないことがあるようで静かに口を開いた。

「それに、私は今の先輩と選んだって思い出を買う訳ですから」

その言葉に俺は驚いた。思い出を買う。それは良い事なのだろうか。いつ壊れるか分からない俺たちの関係性の思い出は、終わった後呪いに変わる。そう考えると、怖くない、余計な事を言ってしまう。

「思い出は買い過ぎない方がいいぞ」

それは経験則であり、言うまでもなく四年前の経験から来るものだ。雪憐には同じ呪いを背負って欲しく無いし、思い出が呪いに変わる瞬間を見て欲しく無い。

「そうなんですか？」

雪憐は寂しそうに俺に聞く、納得がいかないとそう言っていた。

「そうだ。思い出は買い過ぎると背負い切れなくなる」

雪憐の考えを否定したくは無かったが、同時に嘘も吐きたくなかった。特に雪憐の前では。

「じゃあ、先輩は思い出、もう足りてるんですか？」

雪憐はそう言われると、寂しさに満たされて聞く。その声色を聞いて、自分が間違った選択をしている事を再認識させられた。

「…ああ、俺は…どうなんだろう」

俺は思い出が足りているか？それはとても難しい難題ですぐに答えは出ない。思い出は呪いに変わり、既に、その呪いは俺が背負うには十分過ぎる量である。でも、同時に歪んでいても俺の中で眩しく輝き続ける、初恋思い出も俺は知っていた。

「分らない」

曖昧な答えになってしまう。これで良いのかは分からなかったが、本心であるのは間違いない。

「そう…ですか…」

雪憐は寂しさを悲しみに変えて言った。俺は雪憐をそんな気持ちにさせて申し訳なくなり、何か言おうとすると、雪憐は「着替えてきます」と断り試着室へ行ってしまった。

夕日の中、二人は歩いていった。背後には無限に伸びる影。正面には我々を熱する灼熱の太陽。背後に戻る訳にも行かずに正面の太陽に向かって一歩一歩、歩く。

雪憐とのモールでの買い物と食事を終えて、家が目の前の俺達は今日の余韻に浸かりながら帰路に着いていた。そして、俺はそんな光景を四年前の思い出と重ねながら感傷に浸る。

服屋の後、小物店と書店、ファーストフードを回り、雪憐は買ったブラウスと小物と小説を袋に持っている。ブラウスの袋にまとめてそれらを入れており、服の買い物袋は大きく見えるため余計な事を言ってしまった。

「雪憐重いなら持とうか？」

俺は言うと言を伸ばす。本来、人の持ち物を持つのは気が引けるが、重いのを持たせるのも良くない。しかし、雪憐は首を振った。

「大丈夫ですよ。大きいだけで軽いですから」

雪憐は笑ってそう言うと言、俺はうなづく。雪憐が持ちたいのであれば、それは雪憐の物だから雪憐の選択を尊重するべきだ。

「分かった」

雪憐は付け加えるように言う。

「その、ありがとうございます」

雪憐にそう面と向かって言われるのが凄く恥ずかしく、俺は雪憐の方を見る事が出来ず照れ隠しのように雪憐から目を逸らす。

そして、俺は気が付いた。ここが四年前のあの草原の前である事に。

「先輩」

雪憐は先程の四年前に近い声とは違い凛とした今の声で俺を呼び止める。

「寄って行きませんか？」

どこに、と聞くまでもなかった。雪憐、夜彩、そしてこの草原。それは四年前と関わりがある何かである事は良く理解していた。

俺が答えに窮していると、雪憐が草原に入る。真っ赤の夕陽に照らされ、何もない草原を歩く白色のワンピースの少女は四年前のあの頃のように。無数の思い出と強烈な初恋の思い出が頭を駆け巡る。俺は飲み込まれるように草原へ入っていった。

淀みが無く一歩一歩しっかりと進んでいく雪憐に対して、俺は進む毎に後悔と不安に襲われていく。雪憐が何をしようとしているか分からない。とても告白や何か喜ばしい

事をしようとしているようには見えない。雪憐の背後を振り向かない歩き方は過去と決別するかのような、覚悟のあるものだったから。

雪憐が不意に止まる。俺もどうしてここで止まったか良く分かった。俺たちの場所は四年前の場所と同じ場所だったから。

「先輩」

草原に入る前と同じ声色と問いかけ。決して逃さないと俺を真っ直ぐと視線に捉えていた。

「ここへ来たのは先輩と話をするためです」

雪憐と俺達の間を夏の風が通り過ぎていく。話をするために来たのくらい察しの悪い俺でも分かる。

「ああ、分かってる」

そして、何を話すのかも。

「四年前の話と…これからの話だろ」

言ってしまうば、後戻りが出来なくなるのは理解していた。しかし、言わなければ、雪憐から話を切り出されるのだろう。四年前の事の俺の責任を放棄して、それを雪憐に

押し付けるのは許されない。

「ええ、その、先輩には辛い話なんですけど…」

雪憐は申し訳なさそうに言う。それは確定した過去をどうする事もできない目で見ているような、そんな印象を受ける。でも、本当に辛いのは俺なのだろう？ 四年前で本当に苦しんでいるのは誰だ？

「雪憐に比べたら全く辛いから安心しろ」

きっと、四年前の親友だったクリスタを傷つけられて、俺が裏切った行為をして、一番傷ついたのは雪憐だ。

「…だから」

これ以上、雪憐を傷つけてはいけない。それは今の俺の願いであり四年前の願い。

「先輩」

だが、雪憐は俺の言葉を遮った。その声色は低く、誰に何を言われても揺るぎはしなそうだった。

「私は話しますよ。辛いですけど、ちゃんと話さないと伝わらないから」

雪憐はそう言う。雪憐は淀みの無い純粋で輝いている気持ちを持っていた。雪憐が覚

悟をして自分で考えて選択したのであれば俺が干渉はできない。雪憐の選択だ。

「そうか。悪かった」

俺は端的に謝る。雪憐の選択を邪魔した事、そして雪憐の選択を止める勇気がなかった事を。

「いえ、こちらこそ…」

雪憐はそんな俺を見て言う。何か見るに耐え難いものを見るような目で。

雪憐は軽く深呼吸をすると切り出した。これは四年前の続きだ。

「先輩はどうしたいですか？この私達の今の関係を」

“今” ”言う事をわざわざ雪憐はつけ、強調したのは昔があるからに違いない。連続的では無い四年の歳月がぼつかりと開いた、昔の関係と今の関係。

「俺は…」

俺は思考をフル活用させて考える。どれが正解かは分からない。だが、どれが俺の本心かはなんとなく分かる。ならば、本心に出来る限り近い回答を俺はするべきだ。

「雪憐が望んでくれるなら、この関係が続けたい」

それが俺の回答で本心。シンプルでありきたりな物だが、今はそれに物凄く価値と重

みを感じる。

「そうですか……」

雪憐はそう言う。まるで聞きたい答えが聞けなかったような声色。雪憐が聞きたかった質問は実は別の事なのだろうか。

「あの、先輩……」

雪憐は言い淀み、これで良いのかと苦悩した顔で俺に聞く。四年前とは違う色っぽい女の子の唇が動く。

「四年前、私が好きでしたか？」

雪憐が開けたのは俺たちのパンドラの箱だった。開けたら最後、俺は事実を直視しなければならぬ。四年前雪憐がどう考えていたか、そして、今四年前を雪憐はどう考えているのかを。

きっと、逆も同じなのだろう。この問いは雪憐が俺の本心を知る事になるんだ。

これで、後戻りは出来なくなる。

「好きだった」

俺は深呼吸の後そう答えた。雪憐が息を呑むのが分かる。雪憐は知れた事への喜びと

知ってしまった事への苦しみが表情に現れていた。きっと逆の立場なら雪憐のような表情を俺がしていたはずだ。

「俺もあの時はとても戸惑ってさ……」

俺の言った事は言い訳のようで情けない。しかし、本当に戸惑っていて、何をするのが正解なのか、どうすればこの気持ちに答えが出るのか分からなかった。その気持ちは初恋を終えていない今も変わらない

「よく覚えてる」

俺はこれ以上何も言わないように全ての息を吐き出して、締め括った。後悔を頭の中で封じ込め、思考を目の前にもみ集中させる。きっと、今後悔すれば、後でさらに大きな後悔をするから。

「じゃあ、“今”私が好きですか？」

少し間を置くと、雪憐は聞く。雪憐の声は先ほどの動揺を引きずったままなのか、それともこれから先にあるものへの不安なのか声色は震えていた。それは内容とともに俺の心を酷く掻き乱し、えぐり取り、四年前だけではなく雪憐に初めて会った日から今日までを記憶から引きずり上げる。

「え？今…」

先程の問いで俺はリソースを相当使ってしまい、新たな爆弾にすぐに対処出来なかった。そのため、こんな時間伸ばしのような無意味な事をする。

「今は…」

目の前に雪憐がいて、四年前のこの場所。今こそ伝えるべき時なのに、肝心な俺の本心が分からない。俺は果たして今の雪憐は好きなのか？四年間傷つけて、ほったらかしにした男が今の雪憐が好きだと言っても良いのか？正解が分からず、四年間積み重ねた深く広く浸透した呪いが俺全体を侵食していく。俺がどんな顔をしているのか分からないが、最低でも嬉しそうな顔をしている訳がなかった。

「“花ちゃん”は今も先輩を苦しめていますか？」

雪憐はそんな俺を見て、赤子をあやすような声を出した。雪憐のその優しさは俺にもう苦しまなくて良いと言っているように感じる。

「俺は…」

雪憐の優しさは、俺の惨めさを加速させて、抑え込んでいた後悔を決壊させる。俺がどれを選べば正解だったのか分からなくて、どうしようも無いこの想いを口から吐き出

してしまった。

「…雪憐はなんて言って欲しいんだ？」

それは、雪憐に答えを伝えず、雪憐から見れば実質的な回答拒否。俺はちゃんと伝えなかったのに、自分の覚悟が足りずに言えなかった。

「私は、もう先輩に苦しんで欲しくないから…」

雪憐の顔を見て、俺は心臓を加速させるような驚きを浴びる。それはいつ四年前のを連想させるような痛々しい悲しい顔で、後悔に溢れている俺の頭の中に四年前の記憶が溶けて染み渡る。

「先輩が“花ちゃん”にもう囚われずに、ちゃんとちゃんと…」

雪憐は止める気は無く、時だけが進む。俺はどこで選択肢を間違えたのか分からず、途方に暮れて、ただただ後悔だけが湧き出てくる。俺は、雪憐の言葉を聞き取るだけで精一杯だった。

「幸せになって欲しい」

雪憐はそう良いった。雪憐の“幸せになって欲しい”という言葉に強烈な違和感を俺は感じ、声が大きくなる気持ちを抑えて、冷静を心がける。

「俺は別に不幸なわけじゃない」

雪憐の言葉は違う。今が幸せでは無いなんて他人が決めつけるのはどうかと思う。

「今日、俺はすごく楽しかった」

きつと、雪憐と共有でき、雪憐に対して一番説得力のある根拠。

「だから違う」

俺は言い切った。これで良いのかとこれが本心かと問い続ける自分自身を抑えて。

「では、本当に“花ちゃん”は先輩を苦しめていないのですか？」

雪憐は凜とした声、四年前を連想させる顔で四年前とは程遠い力強い声。それは俺を再び動揺させて、“俺は不幸じゃない”という考えが急速に偽物に感じてくる。

「それは…」

言えない。言える訳がない。これが正しい選択だなんて、四年間、初恋をずっと引きずり続けた男が幸せだなんて、断言できない。

「先輩は優しいから、ずっと四年間苦しんできた」

雪憐が俺を苛むような、優しい声色で諭す。もうやめてくれ、凜。四年前の雪憐の聲が頭の中で響く。

「違う…」

だからと言って、苦しんでいたなんて言えない。四年前の初恋は四年前の雪憐のせいで俺が不幸になったなんて言えない。悪いのは俺のはずだ。

「私の中学校では色々な人が色々な恋をして終わりを迎えてました」

そんな俺を見て、雪憐は唐突な昔話を始める。しかし、それは俺が四年間の歳月で何もない空白の中学時代の話で、同級生が恋とか愛とかに浮かっていた時代だ

俺が苦しんでいる間に雪憐はちゃんと、幸せな中学時代を送れたのだろうか。もし、送っていたのであればそれは、俺の数少ない救いであり贖罪になる。

「私も、何人かに告白されましたよ。全部振りましたけど」

雪憐は俺と落ちる夕日を見て言う。雪憐の方を見ていた俺はきつと、泣き出しそうな顔をしていて人に見せられるものではなかったと思う。

「ほら、先輩、責任を感じて、そういう顔をする」

雪憐は俺を見て笑った。それはとても自然とは言えない笑顔で、俺を安心させるために俺の初恋を止めさせるための笑顔だとすぐに分かる。

「先輩、四年前の花ちゃんはどういいます」

その事実、俺の心をえぐる。四年の歳月が俺を責め立て始める。

そして、雪憐は息を吸って言う。

「凜は、いつまで初恋を続けてるの？」

雪憐の声は四年前の花ちゃんそのもので、俺の心をトドメとばかりに引き裂いた。

「雪憐……」

何も言えなかった。何も言うことが無かった。何を言っても後悔する。ただ、ただ、何も無かった。

残された俺たちにセミは無慈悲な合唱でエンドロールを流し始める。

「先輩、もうやめてください」

雪憐の声は泣きそうで弱々しくて悲しいものだ。

「先輩は、自由になるべきです」

雪憐はもうやめて欲しいと。

「私は……これ以上先輩を苦しめたくない……」

雪憐はもう俺に苦しんで欲しくない。

「お願いします。もう、私の事を忘れて、新しい恋を見つけてください」

雪憐はもう俺に初恋をやめて欲しいと。

何も言えなかった。雪憐の悲痛な叫びを、この納得のいかない結末に何も言えない自分がいた。これは四年前と何も変わっていない。これでエンドロールを流せば失われた初恋のバッドエンドだ。そんなもの俺は要らない。俺はきっと初恋が残したものが後悔だけだなんて、受け入れられない。

「納得がいかない。こんな結末：納得がいかない：」

俺はただ、繰り返した。雪憐が俺から目を逸らす。例えば、雪憐の望んだ選択でなくとも、俺はこの選択を選ぶって決めたんだ。

「じゃあ、雪憐は四年前、俺を好きだったのかよ？」

選ぶと決めたなら、これでいいんだ。これが正解なんだ、夜彩凜。

「俺は新しい恋で幸せになんかなれない。そんなもの偽物だ。ちゃんと初恋を終わらせなくちゃ意味が無い」

俺は雪憐から答えを聞いていない。俺が苦しんでいるから初恋を中途半端に中止しても、それは一生拷問にかける行為だ。

「他人が苦しまないため」なんて、理由になってない」

雪憐の願いは雪憐自身の願いを俺はまだ聞いていないから。

「俺は、雪憐の想いを知りたい。俺は雪憐自身の選択を知りたい」

俺は後悔を全て吐き捨てるように語気を強めて言う。それは四年間ずっと引きずった初恋の答え合わせ。

雪憐はただただ俺を見ていて、目を逸らした。

「先輩…ひどいですよ…」

雪憐は嘆くような声を出す。聞いて欲しく無かった質問であつた事はすぐに分かつた。

「そんなの…私は……凛が好きだった…」

雪憐は、ぼそりと四年前の雪憐の想いを、俺が喉から手が出るほど知りたかつた“模範回答”を始める。

「あなたに負けないくらいあなたを愛していた」

雪憐は俺を見て、真っ直ぐと答える。これが四年前の雪憐の想い。

「花ちゃん…」

俺が呼んだ目の前の少女の四年前の呼び方。そして、俺の初恋相手の名。

言い終わった後、沈黙が訪れる前に雪憐は唇を噛み締めて、続ける。

「でも……私は今の先輩は好きじゃない……」

雪憐はそう言う。それは俺が答えるのを避けた問いで雪憐は後悔が滲み出た声色で言う。

「苦しんでる先輩なんて好きじゃない！」

雪憐は自分が正しい選択をしたと、自分を信じ込ませるように言った。

「違う！俺は苦しんでなんていない！」

だとしても、雪憐が俺は苦しんでいるように見えたとしても、俺の苦しみは自分のみ決めるべきだから。

だが、雪憐は信じてくれる様子も無く、ただ不信な顔をして拒絶する。

「嘘です。なら、どうして私をあんな懐かしむ顔で見るとですか？！」

雪憐は凜と反論する。俺は反論の反論をしようとすると、言葉を発せなかった。何故なら発するべき言葉が何一つ思いつかなかったからだ。

「それは……」

俺はまた逃げ込むように無意味な言葉を続ける。

「今の私を愛してくれているなら、先輩はそんな顔をしない！」

雪憐の主張はとても正しくて、間違っていないくて、美しい。

「私は帰ります。今日は楽しかった。さようなら、凜。さようなら、私の初恋」

雪憐は言い終え、話を打ち切ると、振り返って、道路に戻ろうと歩き出した。

その背中はとても悲しそうで、四年前の再現のような気分になる。また、俺は何もできなかった。何もできなかった“かった”？何故俺は過去形なのか。目の前にはまだ雪憐がいる。話しかける事もできる。ここで雪憐に何も言わなければ、きつとまた今までの四年間と同じ事が始まるだけだ。

「雪憐」

俺は呼んだ。雪憐が呼んだ時と同じように。雪憐が立ち止まった。

「ふざけるなよ…。これで終わらせるつもりかよ…」

それは俺の主張では無かったが、雪憐に聞きたかった事である。雪憐はこんな結末で納得なのかと。

「雪憐は納得できたのかよ…。これで…？」

最低でも俺は納得ができていない。雪憐にも少しであっても納得できていない思いがあった欲しかった。

「私は……」

雪憐は振り返らずに何かを言おうとしてやめた。

だから、俺は言った。言ってやった。

「俺の選択は……俺の四年間の選択は……今この数分で否定されるほど、安っぽい物じゃない！」

そうだ、これが正解なんだ。二回目の想いと共に俺は自分自身を奮い立たせる。そう
だ、これでこそ夜彩凜だ。

「俺の苦しみを勝手に推測して憐れむなよ」

“人の苦しみを勝手に推測して憐れむ”、それは四年前の俺の過ちと同じもの。

雪憐はそう伝えられて黙る。振り返らずに何を考えているか分からなかったが、考え
込んでいるのは分かった。

だから、もうどうにでもなれとばかりに、俺の信じた選択をぶつける。

「クリスマス、ここに四時に待ってる」

それはとても馬鹿な選択で、後悔を握り潰し言う。

「え？」

雪憐は相当意外だったのか、驚いてこちらを見た。

「俺の四年前の初恋で告白するつもりだった日」

雪憐に今言うべき事はきつとこの事実だけだ。

「先輩…意外とロマンティストだったんですね」

雪憐は少し呆れて言った。自分でもよく分かっている事だ。

「だな」

それに関しては俺自身も否定できない。

「気持ち悪いですよ、周りから見たら」

雪憐にふざけたようにそう言われて、俺も冗談が溢れた。

「周りなんてお互い気にしないくせに」

俺がついた冗談は冗談では無かったが、冗談と同じ作用をもたらす。

「ですね」

雪憐は痛々しいものの、先程のものよりはずっと自然に感じる笑顔で笑った。それを見て俺はすごく嬉しくて、何も解決していないのに安心感をくれた。

「ちゃんと、来ます。それで先輩が救われるなら」

雪憐はそう言う。これは雪憐の選択。考えた上で俺の提案に乗ってくれたのであれば、言うべき台詞は一つだけだ。

「ああ、ありがとう」

俺がそう言うと、雪憐は会釈に近い柔らかい笑みをして、俺に背を向ける。歩き出す雪憐の背中は沈みゆく太陽に照らされていた。

十一章

とても、意味の無い校長先生のお話を聞いたのち、威勢だけは良い掛け声で我が校の体育祭は始まった。今は夏も終わりを迎えつつある九月のことである。

俺たち生徒は、開会式を終え、持ち場に戻るべく後ろの生徒席に向かう。生徒達のその姿は統制された何か、家畜に近いものを感じる。家畜とは違うのは“楽しそうに歩いている点”なのかもしれないが、そもそも家畜はあの状態で本当に不幸かどうかは分からないため、家畜と違うとそれを根拠に主張するのは違うだろう。我々は家畜とは違うと信じているが、一体何が根拠なのだろうか、ルールに縛られているという点では同じなはずだ。

そして、もう一つ、こちらは重要な問題であるが、雪憐とは夏休みの一件以来、一度を除いて話してはいない。その一度と言うのは学校が始まって数日が経過した頃に雪憐が「私も色々考えたいので、お弁当を一時的に止めても良いですか？」と言われた事。

生真面目で約束を最後まで守ろうとする姿勢は雪憐らしく、可愛らしいが、側から見れ

ば少し異質に見えるかもしれない。

そんな事を考えていると、ふと一人の女子が近づいてきた。

「よ、夜彩。体育祭始まったね」

この声には良く聞き覚えがある。

「そうだな」

「いや、そうだなって……。夜彩って去年までバスケットだったのに楽しみじゃないの？」

紗恵が不思議そうに聞いてくる。いや何故元バスケットを根拠にするのだろうか？根拠としては使えないと思う。

「楽しみじゃない。別に、バスケットと体育祭の期待値に因果関係は無いと思うぞ」

俺がそういうと紗恵がわざとらしくがっかりすると、

「そっか」

と言った。紗恵は話が途切れるとまた考え込んでしまう。俺から紗恵に話しかける事もなく、沈黙が訪れる。二人の音が崩れると話している時は気にしなかった環境音が気になるようになる。今まであったものが無くなると周りが良くも悪くも見えるようになるということなのだろうか。

紗恵が沈黙を嫌うように俺をチラチラと見るとあつとなにかを思いついたようで、新たな話題を提供した。

「こういのでカッコいいところ魅せればモテるかもよー」

紗恵がからかうように言う。それはとてもどうでもいいことで、裏を返せば思考をせずに済む楽な話題だ。だが、くだらなすぎて反応する気も湧かず、結果的に俺はなんて反応をするか考え込んでしまう。俺が黙り込み続けると、紗恵が笑って

「仮にも、夜彩くんは学年一位で元バスケ部の文武両道だからね」

おどけた様子で俺の実情とあっていない肩書きを俺に伝えてくる。肩書きというものは端的に自分の置かれている立場を表現するのであるが、これほどまで実態と乖離したものは珍しいだろう。詐欺レベルと言わざるを得ない。

「確かに、肩書きだけ見ると、凄いスペックだよな。きっと友達に囲まれているんだろうな」

俺もまともに答える気も湧かないため、適当なことを言うておく。本当に詐欺だ、これ。しかし、嘘は言っていないわけだから恐ろしい。夜彩の広告を作るのは楽そうだな。

「でも、夜彩、男子でも女子でも完全に別枠扱いだよね…」

紗恵がシクシクと声のトーンを下げて言う。その事実は先ほどの肩書きがなにも役に立っていない証拠で、どんなに肩書きに美辞麗句を並べても紗恵が言った事実を見ると価値を失うのであった。

「そうなんだよな。現実是非情」

こればかりは俺が半ばマジトーンで凹むと紗恵が慌てた。

「大丈夫！大丈夫だよ、夜彩！私が友達続けてあげるから！」

紗恵に明らかに慰めに受け止められないことを言われる。人間関係を紗恵に頼っていた証拠だった。強く反論する事もできず、代わりに悲しみが湧き上がってくる。

「何だ、その哀れみ。悲しくなった」

もはや、凹むしか手段は無い。俺が孤独感溢れる現実を見ながら声のトーンを上げて答えた。しかしながら、孤独であつてもさほど困る事でもないのかもしれない。中学時代は現に紗恵もいなかったわけだし。昔に戻るだけだ。

「夜彩…。ほら、夜彩面白いから、話せばすぐに友達できるよ！」

紗恵が慰めたふりして俺を刺し殺した。予想はついていたがここまで予想通りに殺しかかってくると逆にショックを受ける。紗恵にこの状態をなんとかするのは無理難題

だったかもしれないが。

「怪しい通販より信用できない宣伝文句だな」

そういうと俺は生徒用観客席の右側の最前列に座る。紗恵が困惑するように手でもつと奥の席にしないと訴えてくる。紗恵の方を見るとその問いに答えなければならず、面倒だったので目に入らないふりをする。紗恵は好きな席に座ればいい。無理して同じ場所にする必要性は無いわけだし。

少しすると、紗恵が露骨なため息を吐くと、俺の横に座る。体育着なのにスカートを着ているときのような座り方だった。

「そう言えば、藤堂先輩もバスケットだったよね？」

諦めた紗恵は校庭のトラックの方を見た俺に話しかける。沈黙が訪れると紗恵はいつも空気を浄化するかのように話題を供給してくれた。無視する事もできず俺は答える。

「ああ、バスケット部でお世話になった」

俺が一年生の時、藤堂先輩は三年生でバスケットの先輩だった。女子と男子で当然分かれてはいるが、藤堂先輩はそこらの下手な男子よりはよっぽど上手かった。文武両道な藤堂先輩は間違いなくこの学校の数年に一度の逸材だった。

「もしかして、夜彩、藤堂先輩目当てだったとか？」

紗恵がいたずらな笑いを浮かべてからかう。紗恵の考えている意味とは違うだろうが、あながち間違っているかもしれないかもしれない。俺はあの人には少なからずの尊敬と憧れがあったのは事実だ。が、そう答えるのは少し恥ずかしく違うことを答える。

「藤堂先輩、勉強教えるのがうまかったから、敵陣調査と兼ねてな」

嘘は言っていない。藤堂先輩がどう勉強していたのか興味はあった。勉強を教えてもらったのは事実だ。俺はありがたかったし、同時に一番近い俺の目標だった。

「そういう意味じゃなかったんだけど…。夜彩が勉強教えてもらっていたって言うのは意外だね。想像できないよ」

紗恵が話を広げるのを優先したのか話題を微妙にシフトした。紗恵の言った意図はなんとなく推測はできたがそれは否定するまでもないだろう。

「確かに勉強は一人でしたいが、一年の時はこの学校のテストの出題傾向が良く分からないから、色々教えてもらった」

俺が勉強を教えてもらうのを想像するのは難しいだろう。何故ならいつもぼっちで一人を好むような人間だ。俺も勉強会とかは嫌いだし。

だが、藤堂先輩の教え方はそれに時間を割く価値がある。憧れだった藤堂先輩をそばで見てみたいという思いもあったかもしれない。

「藤堂先輩と夜彩どこで勉強してたの？あっているのを見た事無いよ」

紗恵は疑問が尽きないようで、続けて質問をしてくる。周りから見れば俺と藤堂先輩は一緒にいるような関係には見えないだろう。想像すらできないかもしれない。

「ああ、学校ではあまり話さなかったし。勉強する時は喫茶店だったな」

藤堂先輩が今バイトをしているあの喫茶店である。俺も藤堂先輩も学校で話しかけるような人間ではなかった。ビジネスライクと呼ぶのが近い関係で、俺の相談を藤堂先輩が聞いてくれることがあっても、決して俺の行動に干渉はしてこなかった。藤堂先輩が俺に相談してきたことは一度もない。

「へー。結構仲が良かったんだ」

紗恵は感慨深く、そういう。明らかに違うが話だけ聞くと、文武両道の藤堂先輩と二人、喫茶店で会っているのだ。確かにそう勘違いしても不思議では無い。

「別に、仲は良くないけど…」

仲が良いと言う表現は適切ではないだろう。友達というわけではなく、あくまで先輩

後輩関係だ。紗恵は分かっていると言わんばかりの顔をしていた。

「夜彩ー。失礼だよ、せっかく仲良くしてもらってたのに」

明るい口調でわざとらしくそう言う。せっかく俺のような人間が藤堂先輩と話せていたのに、もったいないということなのだろうか。

「そういう感じの先輩では無かったと思うぞ」

俺がうんざりとしたように言くと、紗恵は半分納得できないような顔をした。藤堂先輩と俺の住む世界が違う。紗恵は俺の発言を誤解したのか

「そんなこと無いよ。藤堂先輩、夜彩と違って友達たくさんいたよ」

と納得できないようにそう言う。確かにそうだろう藤堂先輩は社交的では無かったが、周りから尊敬されていた。

「そうだよな…」

入学当初の学力だけを見て俺が藤堂先輩の再来と言われていたのが嘘のようだ。俺は藤堂先輩ではないし、なれることもないだろう、なりたいたとも思わない。

ぼーっと準備を続けるトラックの方を見ながら、考えてしまったくだらない話を切り出す。聞いても仕方がないこと、だからこそ気楽にきける。

「なあ、藤堂先輩って結局彼氏居たのか？」

俺が吐き捨てたそれは紗恵が食いつくこと間違いなしの内容だ。多分釣り堀の魚より食いつくのが早いだろう。

俺の予想を裏付けるように、紗恵がいつもの勘違いした顔をして、俺の方を見てくる。
「あれれー。夜彩くん気になる？」

うわ、すぐく面倒なやつだ。聞くのをもったいぶって最悪のケースでは教えてくれないやつ。そんなリスクを払ってまで聞くようなことではないため話を打ち切ることにした。

「紗恵の態度が気に障る。聞くのをやめる」

俺が端的にそう言うのと、紗恵がため息をついた。

「夜彩ほんと冗談通じないんだね…」

半ば呆れたように紗恵が言う。少し言いすぎたような気がして補足するように俺が付け加える。

「単に面倒だったただけだ」

紗恵はまた話が途切れるのが嫌だったのか、少し間をおいて藤堂先輩の話を話し始め

た。と言っても俺の問いに答えるだけだが。

「藤堂先輩、男子から告白されたけど全部振っていたよ」

それは事実とし述べる一文だが、色々な人が関わっているのだろう。それぞれに想いがあるって物語があったはずだ。藤堂先輩はどんな思いで振ったのだろうか。

「そもそも高嶺の花だったし、そこまでではなかったけどね」

紗恵は付け加えるように言う。声に妬みがあるようには聞こえず、むしろ当たり前の事実として受け入れているようだった。

「そうだろうな」

俺が同意するように言う。確かに藤堂先輩が男と付き合うのを想像できない。一人でも堂々と生きていけそうだ。そんなことを考えていると紗恵が少し恥ずかしそうに切り出した。

「後、その…。同じくらい女の子からも告白されてたね…」

え…？そうですか…。なるほどな、藤堂先輩のようにスタイルが良いバスケット部はカッコいいもんな。その上、学力お化けだから。

「お、おう。なるほど」

が、俺も少し動揺したのか、変な声を出してしまう。女の子同士か、俺はあまり詳しくないからよく分からないな。

「女子が女子を好きになる事ってあるんだな」

俺が噛み締めるように言うと、紗恵が何故か残念そうな目で俺を見てきた。

「藤堂先輩、すごくカッコよかったから、女子からの人気も凄かったんだよ」

女子社会に住んでいる紗恵はきっとその実態を俺よりも見てきたのだろう。その言葉には重みがあった。

「カッコいい女子は女子からモテるのか」

別にかっこいい男子がこの学校にいないわけではないと思うが。そう言う思いを込めて言う。

「そうだね。別に同性に恋するのは不思議な事じゃないんじゃないかな？」

俺の問いに紗恵が返したのはとてもシンプルなものだった。俺の知らない世界でもう少し踏み込んだ問いをする。

「じゃあ、同性でも異性でも恋する気持ちは変わらないのか？」

俺が聞くと、紗恵は落ち着いて答える。

「そうだと思うよ」

ゆったりとした声は淀みがなかった。同性か異性かの違いなどどうでもよく、恋をしたか、していないか。“好き”という気持ちが大切なのかもしれない。

「そうか」

なるほどな、と思いながら返答をする。

俺はパンフレットを開きながら、今後始まるであろう体育祭の予定を確認する。特段興味があるわけではないが、念のため再度確認すべきだろう。興味が無いことは頭に入ってこないものだからな。

「夜彩はどの種目だっけ？」

と見ている俺を見て、紗恵が聞いてくる。興味が無いことだったため、集中力がすぐに途切れてしまう。

「走り高跳びとクラス対抗リレーだ」

俺は紗恵の方を向かずに答える。たいてい重要な話をするわけではないだろうと思っていると紗恵がふとポンと手を叩いた。

「あ、私もクラス対抗リレーなんだよね」

それはとんでもない爆弾であった。え？あの、運動音痴な図書室勢の紗恵がクラス対抗リレーだと…。冗談だろうか。

「え？聞いてないぞ。というか、なんで紗恵なんで？」

当然の疑問だ。嘘であって欲しいという俺の祈りが叶うことを望んで聞く。紗恵にはどうか「嘘だよー」と間抜けな声で言って欲しい。

「あはは。一人欠席しちゃって、代わりに出る事になったんだよね」

が、そんなささやかな祈りすら神は叶えてくれなかったようだ。

「なん…だと…。補欠とか用意してなかったのか？準備の段階から我々は負けていたんだな」

大体、補欠を用意しておかないとは一体どういうつもりなのだろうか？最低でも二、三人ほど用意するのが常識だろう。どうせクラス対抗リレーなんて誰もやりたがらないブラック企業みたいなものなんだから、代わりの補欠は山ほど用意しておくべきだ。やめること前提で進めるのがブラック企業の鑑。組織として我がクラスは圧倒的に統制力とやる気のなさを感じる。

「そ、そんな事言わないでよー。私も頑張るからさ」

紗恵がおどおどとしながらそう言うが、それがより不安を助長させる。負け戦を俺はしなければならぬのか。リレーをやる必要性が疑わしくなってきた。

「むしろ、人数一人減らしたほうが速い気がする」

俺がぼそりと本音を言うと、紗恵がわざとらしくガーンとして。

「ひどい。確かに遅いけど」

紗恵が拗ねるように言う。確かに少し言いすぎてしまったかもしれない。人には長所と短所があるし、短所を必要以上に批判するのも問題だな。

「まあ、たかが一人遅くなったくらいじゃあ負けねえよ」

紗恵を励ますようにそう適当なことを言う。

「夜彩にしては珍しいかっこいい台詞だ」

紗恵、わざとらしい。紗恵の棒読みの褒め言葉を聞いた後、俺が言ったことが小っ恥ずかしくなった。

「だろ。負けても大して損失が無い事には安心して大口を叩ける」

ネタばらしとばかりにそう言うと、紗恵はガツカリしてうなだれる。なんか、紗恵は最後の希望まで失われたようなそんな印象だ。

「そういうこと……聞いて損した」

紗恵が声色まで心底損したような声で言う。いつもの事だ。もう、紗恵に失望された程度でどうと思うことは無い。

紗恵との沈黙が生まれる。特に話すべきことも失われて、トラックの方をお互い、見ていると今時な若者音楽が流れたのち、競技の参加者と思われる人達が入場してくる。

「そろそろ最初の競技始まるね」

「ああ、何の競技だ？」

俺がそう質問を返す。先程出していたパンフレットをすでにしまってしまい。再度出すのも面倒であつたためだ。

「綱引きだって」

紗恵もありがたいことに俺のことを何も責め立てずに教えてくれた。

「ああ、分かった」

紗恵の好意のおかげでこの競技が興味のないものであることが確認できた。安心して読書ができる。

読みかけな本をバックから取り出す。しおりを外してページを開くと、不快な現実と

決別することができた。

「競技名聞いて速攻で読書始めるのもどうかと思うよ」

紗恵の正確なツッコミは空を切り、俺は答えることを拒否するかのように、読書へと引きずりこまれた。

読書というものは睡眠に近いのではないかと思うほど、一度集中し出すと急速に時間が過ぎる。俺もその例外では無く、周りの雑音を集中力で遮断し、時間を湯水のように浪費していた。

と、ふとそろそろ時間を確認したいと思った。大抵、“そろそろ時間を確認したい”と思った時にはすでに目的の時間になっている。しかし、読書に一度集中し出すと、一時停止をするのがとても面倒だ。紗恵がパンフレットを手を持っていたことを思い出す。「今の競技、何やってる？」

まるで、アレクサ感覚で聞いてしまった。パンフレットをバックから出すのが面倒で、手に持っていた紗恵ならすぐに答えられそうだったからだ。

「夜彩、読書読みながら聞くのは止めたら」

紗恵が呆れるようにそう答えた。確かに正論だ。自分のことなのだから自分で調べろ

ということだろう。紗恵に甘えていたのかもしれない。

「そうだな。そろそろだし自分で見ろ」

俺がバックに手をかけ開けようとすると、紗恵がまたため息混じりの不満そうな声でぼそりと言った。

「…次、女子一年の騎馬戦だよ」

「なん…だと…」

そこまで時間が経っていたのか。危うく本を読み続けてしまっていたところだった。騎馬戦は俺の体育祭で唯一の楽しみだろう。

「どうしたの、夜彩？いきなり読書止めて？」

本を閉じると、今まで全く関心が示さなかった俺の行動を不審がるように聞いてくる。

「騎馬戦に雪憐が出るんだ」

雪憐がでる競技となれば話は別だ。見なければならぬという、使命感…いや、義務感さえ感じるのである。これは俺の明確な意思と選択に基づいている行為だ。

「あ、ああ…なるほど…」

かたや紗恵は俺のテンションの高さに呆れていた。しかし、それでも紗恵は俺のテン

シヨンに慣れた方だと言えるだろう。最初の方、紗恵はもっと酷い引き方をしていた。

「夜彩、騎馬戦を楽しみにしてたの？」

紗恵が苦笑いをしながら、聞いてくる。質問の内容までは頭が回らなかったのか、中身が無い質問になっている。

「いいや、元々、雪憐が騎馬戦に出るのに俺は反対だったんだ」

雪憐が騎馬戦という危険な環境に出るより無難で安全な競技に出て欲しかったのが俺の本音だ。だが、雪憐とコンタクトを取れない以上俺が言っても仕方が無いことなのだろう。

「え、ど、どういう事？」

俺の情緒不安定なテンシヨンを目の当たりにした紗恵はさらに困惑する。今日の紗恵はいつもに増して困惑率が高い気がする。

「雪憐が騎馬戦に出て怪我なんてしたら大変だろう」

俺が真剣にそう答えると、紗恵は目を丸くした。困惑を通り過ぎて混乱している様子で、固まっている。少しすると、紗恵は再起動したパソコンのように目に生氣を取り戻した。

「夜彩、ちょっと雪ちゃんの事心配しすぎじゃない？雪ちゃんだって子供じゃないんだし」

紗恵は何となく俺の言いたい事を理解したのか、疑問点をぶつけて来る。納得しているわけではないようだ。しかし、空气清新機は伊達ではないな。固まっからの飲み込みが速い。

「考えてみる。騎馬戦は身体が接触する競技な上ドロドロした女子騎馬戦に、純粹無垢な雪憐が入るんだぞ。言語道断だ」

俺はそう毅然に答えた。一般的に運動会の女子の取り合いをする競技は危険なイメージがある。偏見なのかもしれないが、リスクは可能な限り潰した方がいい。万が一の事も考えられるし。

「夜彩：雪ちゃんを一体何だと思ってるの：」

紗恵は頭を抱えてそう言った。別に頭を抱えるようなことではないと思う。大切な人に傷ついて欲しくないと思うのは当然の感情だ。

「雪憐が怪我なんてしたら俺の心も怪我してしまう」

俺は素直にそう言った。本心だ。きっと、雪憐が傷付けば俺はひどく悲しい気持ちに

なるだろう。そして、俺は雪憐が傷つくことを許すはずがない。

「ドヤ顔で気持ち悪いこと言わないでよ」

紗恵は俺の本心は知らないのか、ふざけたようにそう言ってくる。もしかしたら、本心を見抜いた上で気付かないふりをしたのかもしれない。紗恵だって自ら地雷を起動させたくないはずだ。

「俺は嘘を吐くのが嫌いだ」

俺はまたいつものことを吐き捨てる。これで何度目だろうか。これが正しいと思ってずっと信じてきたのだ。今さら変えることなどできない。

「夜彩だもんね」

紗恵はまたそう当たり障りの無いことを言った。もはやその空気を読むことは紗恵を縛る“呪い”にすら見えてきて、ある意味俺に似ているとさえ思えた。

「まあ、雪憐が決めた選択に俺が干渉する権利は何も無いのから、あくまで俺の希望だけだな」

俺は締めくくるようにそう言った。結局今まで俺の言ってきたことは“俺の希望”でしかなく、雪憐の選択は雪憐自身が決めるべきだから。

「それはそうだね」

紗恵は頷くようにそう答えた。

「ああ」

俺はそれに意味もなく頷く。

ナレーシヨン騎馬戦の始まりを宣言すると、選手が入場してくる。観客席はだらけるような時間帯になり、少しの喧騒があった。

「ほら、始まるよ」

紗恵は確認するかのように俺に言った。分かり切っていることなのに確認する必要性はあったのだろうか。

しかし、よく考えれば隣にいる紗恵は貴重な労働力ではないだろうか。人件費ゼロの労働者など使わない選択肢は無い。

「そうだな…。確か、三試合目の右側、生徒観客席から四番目の騎馬の一番上だと聞いているが、念のため紗恵も探してくれないか？」

俺がそう頼む。いくら友達とは言え、無給料で働かせようとしているのだから、それなりの礼儀を払うべきだろう。

紗恵はうわあと若干引いていた。やはり、賃金も出ないのに働かせようなんて通じないか。俺が紗恵の立場ならきつと同じようにドン引きだ。

しかし、紗恵の口から出た言葉は予想外のものだった。

「え、夜彩何で知ってるの…。怖い…」

紗恵はストーリーカーを見るような目で俺を見る。今にも通報されそうだ。

「今気にすべきはそこじゃないだろ…」

確かに、そこを気にする気持ちも分からなくはないが、今の論点では無い。そこを今議論しても仕方がない。

「そこだよ！夜彩ちよつとキモいよ！」

紗恵は芸人のようにツツコミを入れる。キレツキレなツツコミと少しドヤ顔気味の紗恵は見えていて面白かった。

「情報収集は何事においても基本だ」

俺からはそう答えることしかできないためそう答えた。

が、紗恵は聞く耳を持たないようで、考え込んでしまった。椅子の方を見ると回路が繋がったようで、さっと俺の方を向いてくる。次は何を聞かれるのだろうか。

「もしかして、この席って…」

紗恵は犯人に犯行を確認するように恐る恐る聞いてくる。なんとなく紗恵の聞きたい事は察することができた。

「ああ。おそらく一番見やすい席だ、しっかりとハーサル時に確認した」

下見は基本中の基本だ。ましてや学校側がわざわざリハーサルというものを用意してくれているのだから活用しない手はない。最優先事項で確認した。

「夜彩…」

紗恵はあの時の疑問が解決できたと同時に、もはや救いような顔をする。目が手遅れと語っている。

「おい、哀れんだような目で見るな。それより今は雪憐を探そう」

紗恵の今日何度目かの視線を誤魔化し俺は雪憐の探索を始める。紗恵と話して通報されるのは怖いからな。雪憐の騎馬戦を見られずにお縄なんて冗談じゃないぜ。

俺が全力で探す、見る人すべてが名も知らない一年女子である。顔を覚えるのが苦手な俺は「あれ、こいつさっき見なかった？瞬間移動？ドッペルゲンガー？」などと思いつきながら探していた。他人って本当に見分けつかないな。

まあ、他人と他人を見分ける必要性は無い、他人と雪憐さえ見分ける事が出来ればいい。しかし、他人と他人が見分けられないと、二度同じ人を確認したりと無駄が多いのも事実だった。

隣にいる紗恵は諦めたように雪憐のことを探してくれていた。紗恵は散々迷惑をかけたも、こうして友達でいてくれるのも紗恵のこういうところのおかげなのかもしれない。DV被害者になりそうで怖いので、くれぐれも紗恵の初恋の人はクズ男でない事を祈りたい。

「多分、いないね」

俺より一足遅く探し始めたのに紗恵はそう搜索の打ち切りを宣言した。流石クラスがよく分からん連中とコミュニケーションを取れるだけの事はある。顔を覚えて人探しができるわけだ。

「だな」

俺も大体探し終わったため、同意する以外に無い。これ以上探しても時間をドブに捨てるだけだろう。

次の試合まで俺は読書でもしているか。そう思い、仮にバックの上に置いてあった本

を取り出す。本を開こうとしたその時だった。

「夜彩、雪ちゃんの事どう思ってるの？」

それは他でもない今隣にいる紗恵の声だ。いつかクリスタにも聞かれたこと。俺がずっと悩み苦悩し続けた相手。そして初恋の人。

「どうもなにも、幼馴染だろ」

しかし、それは紗恵に言うべきことでは無い。雪憐と俺の問題である。

「ふーん、それ本当？」

紗恵はいつものように少しおどけたように、聞く。それは半ば本気で知りたがっているように見え、少し意外だった。

「なんだよ。事実には反してないぞ」

動揺を隠すように俺は答える。吐き捨てしまえば楽だ。紗恵ならきくと聞いてくれるだろう。紗恵は聞いてくれるだけなのにとっても居心地が良すぎて、それが怖い。紗恵には特に大切な話をしたくない。

「本当の事は教えてくれないの？」

紗恵が急かすようにそう聞く。少し不安そうに聞くその淀みが無い瞳がかえって俺を

不安にさせた。紗恵は空気を読み、俺の気持ちを的確に推測する。地雷は避け、落ち込んでいれば励まし、話しかければ耳を傾ける。

都合が良すぎる。だから、大切な事を紗恵に話したくなかった。話したら最後、それを紗恵に委ねてしまいそうな気がして。

「ああ、これは俺と雪憐の問題だ。ちゃんと俺が選ばないといけない」

きつと、話すべきじゃない。委ねてしまう可能性が少しでもあるなら、リスクを取るべきじゃない。最後まで自分を貫くべきだ。

紗恵は俺がそう答えると黙ってしまった。きつと紗恵のことだから、今ので、俺が話す意図が無いことを理解してくれたはずだと思う。だからこそ、次にでた紗恵の言葉が意外だった。

「夜彩は私のことが信用できない？」

紗恵は踏みこんだ。踏み込んだ範囲はほんの少しだけだが、それは今まで紗恵が絶対にしなかった行為だ。

紗恵といるのはとても楽だ。空気と相手の心境を的確に読みうまく立ち回る紗恵は俺は意味とても信用していると思う。だからこそ限度がある。俺は紗恵に甘えてはい

けない。

「信用できても、できなくても自分の選択を他人に委ねてはいけない」

俺はそう言って明確な拒絶を口にした。他人から見たら大袈裟でも、これを他人に委ねるなんてあつてはいけないから。

「そっか。夜彩らしいね」

紗恵はいつものようにそう答える。空気を読み、俺が提示した地雷原の境界線を避けるように通る。

「ああ。例外は作りたくない」

念押しとばかりに俺はそう言う。俺は紗恵以外でも同じ選択をする。

紗恵からは返事はなく沈黙が訪れる。沈黙を嫌う紗恵にしては珍しいことで少しだけ驚いた。なにも言わないことを不審に思い紗恵の方を見ると、まっすぐとトラックに視線を向けて、こう言った。

「私は、それでも夜彩の話を聞きたいな」

明確に拒否した話に踏み込むことは一年間半続けた紗恵の中でも初めての出来事だ。

その行為はまるで雪憐のようで、俺の中のイメージとは乖離した行動であり。今まで

浸食していなかった俺の奥深くまで“紗恵の依存”が浸食している気がした。溶けるような甘さと焼けるような不愉快さに満たされる。

「紗恵… 変だぞ」

それは動揺か、それとも思考のための時間稼ぎか。俺は否定すべき場面でうまく否定することが出来なかった。

「あはは。そうかもね」

紗恵は残念そうにそう答える。

その姿を見ていよいよ俺は分からなくなった。紗恵が善意でこれを行っているのであれば、それを否定するのは違うのでは無いかという疑念がよぎる。これが“紗恵に依存した結果”であつたとしても、それでも関係が続けた俺の責任ではないのか。

「紗恵… そのさ…」

言うべきかどうかは分からない。でも、それでも、せめてもの償いとして。

「ありがとう。気持ちだけでいいよ」

それは一年半の関係でも数えるほどしか無い、紗恵への感謝の言葉。

「夜彩」

紗恵は俺を呼び掛けた。いつもより真剣な声色と表情で。

「がんばってね」

「え？」

俺は思わず声を上げてしまう。“がんばってね”？何を頑張れということなんだろう。情報量が抜き落ちすぎていて肝心なところが伝わっていない。俺がどういう意図か聞こうとしたとき。

「あ、ほら、夜彩。雪ちゃんの試合始まっちゃうよ！」

紗恵が誤魔化すようにトラックを指差してそう言う。本人が説明する意思がないのであれば聞いても無駄だ。説明しないということは俺が意図を理解する必要性がないという他に他ならない。

「あ、ああ。予定通りの場所だな」

俺はそう紗恵に合わせるようにふざけて言う。この歪な関係でさえ、これ以上悪化させないため、肝心なことを見ないことが最善だと信じる。

「予定通りって言い方良くないよ。ストーカーみたいだよ」

本当に予定通りに行っているのだから、嘘は言っていない。紗恵から見ればそう言う

問題ではないのかしれないが、俺はなぜそこを気にするかよく分らない。

「本当に予定通りなんだから仕方がない」

俺は愚痴に近い声でそう吐き捨てた。

「だーから」

紗恵は拗ねたように間拔けな声で反論する。その話題を続ける気は湧かなかった。

「うるさいぞ、紗恵。それより雪憐の勇姿を見るんだ」

俺はそう早々と話を切り上げて、今始まろうとしている騎馬戦を見る。

雪憐は緊張したおもむきで、真っ直ぐと目の前の対戦相手を見つめている。少し小柄な雪憐は騎馬の上のようだ。しかし、雪憐は騎馬の上の人の人の中では背が高く、上の人の中には非常に背が低い女子もいた。

開始の合図がなると同時に、大きく聞き取りにくい実況が始まる。素人がやる実況などたかが知れており、雑音以外の何物でもない。

雪憐は何かを下の人と話すと、迫ってきた騎馬をすり抜け、孤立した騎馬へと向かう。ちやうど反対方向からはもう一騎味方が来ており、二対一で包囲する形になる。なるほど、ちゃんと事前に作戦を立てていたんだな。

孤立した相手騎馬は後ろに後退するが、好機とばかりに、雪憐は右翼方向からもう一騎は左翼方向から近く。淀みなく相手だけを見つめる雪憐には俺が恐れていた懸念など微塵も無く、ただ競技を心から楽しんでるように見えた。

包囲戦となった雪憐の初戦は相手が左辺の味方に注目していた一瞬の際に雪憐が相手の帽子を取り完封勝ちだった。

相手の帽子を敵の首とばかりに掲げる雪憐にもう一人の戦友の味方は祝福するように近づきハイタッチをする。お互いの勝利を祝福したように友達と喜ぶ雪憐を見ると、意味の無いその行為にかけがえのない価値があるように感じた。俺が雪憐の競技に要らない心配をしていたことがひどく馬鹿らしくそして、その雪憐の笑顔に比べて汚れきった利己的な行為だと感じた。

「雪ちゃん、がんばってるね」

紗恵はそう活躍する友達を見てそう言う。紗恵も雪憐と連絡先を交換したくらいなのだから、気にはいるのだろう。

「ああ、先輩、感動……」

俺は感慨深くそう頷いた。今まで色々な思考をすべて捨てていくような気分になる。

俺はただただ満足している。

「夜彩、そんなに嬉しいの？」

紗恵の聞いたことは先ほどのものとは違って、雪憐との関係では無く、俺の個人的感想について聞いたものだ。だから、答えるべきか俺の一存で決められる。

「昔からそうだったけど、忬が強かったからな、あいつ」

隠すようなことでも、答えてはいけないものでもないためそう素直に答える。

「だから、こうして全力で目の前のことをやってるのが見ていて嬉しいんだ」

俺はどんな声で今話しているかは分からない。だが、これは心からの本心で、きつと満足そうに喋れているはずだ。

「そうなの？」

紗恵は特に感情もなくそう答える。何一つこもっていない言葉だ。

「そうだ。そして、その分融通が聞かない」

俺がそう付け加えると紗恵はいつもの表情で笑った。

「あはは。それは私も思った。雪ちゃん、真っ直ぐな子だね」

その当たり障りの無い言葉は紗恵にふさわしいと思った。都合が良く、優しく、望ま

れ、誰も傷つくことはない。

食事を終え午後の部を迎える。いくつかの競技を終えたのちついにクラス対抗リレーが始まる。このクラス対抗リレーは学年ごとに三ゲーム行われ、三クラスが順位を競う。

「夜彩準備できた？」

入場前の場所で待機していると、近くにいる紗恵にそう聞かれた。聞いても仕方がないだろうと思いつつも、俺は答える。

「ああ、俺はな」

暗に“紗恵は大丈夫なのか？”という問い。別に意図が読めなければ、それはそれでいい。紗恵がどうであろうと俺はやるべきことをやるだけだ。

紗恵は俺の期待を裏切らなかった。察した紗恵が何かを答えようとしたとき

「いやー、ごめんねー、紗恵。急に頼んじゃって」

思わぬ横槍が入った。現れたのはおそろくうちのクラスの女子。名も知らず接点もない。クラスで紗恵と仲がいい友達の一人だろう。

「大丈夫だよ、気にしないで。むしろ、私で大丈夫なの？」

紗恵は何かのスイッチが入ったように声のトーンを変えた。あと俺は大丈夫ではない

と思います。

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるさー」

と紗恵のお友達は無責任な回答をする。なんの権限があってそう言っているのか謎だ。そもそもうちのチームは責任者すら決めてないのか。こんな人がいなくなったからと言って一人の一存で紗恵を連れてくるのは問題なのではないか。ガバナンスがガバガバ。

「うん、分かった、頑張ってみる」

紗恵は何を思ったかそう答える。紗恵さん流石ですね、これなら酷い結果が出ても言質に使われる事はないだろう。

「助かる、ありがとね！紗恵三番目だから、よろしく！」

紗恵のお友達は満足したようにそう言うのと、紗恵はバッチグーとする。

え？終わり？何一つ中身がなかったぞ。いつもやってくるくせに中身がすっからかんのダメな会社の会議みたいだ。現状確認しかやってない。

しかし、俺も確認しておかなければならないことがある。

「紗恵、アンカーの前なのか…」

できればアンカーの前ではなくもう少し真ん中に置いて欲しかった。

「そうみたいだね」

紗恵も今お友達から言われたので初めて聞いたのだろうか、そう答える。

「うちのクラスってこんなに人材不足してたっけ？日本の労働市場もびっくりなレベルだぞ」

俺はそう言っても仕方がないことを地面に向かって吐き捨てた。

「あはは…。頑張ってみる…」

紗恵の力の無い声がより勝利を遠ざけた気がする。自信が気化していくのを感じた。

「そういう夜彩は何走者目なの？」

「アンカー、四番目」

俺がそう答えると、紗恵はわざとらしく驚いた。

「うわ、すごい。かっこいいところ見せられるよ！」

「皮肉はやめろ。俺がアンカーなのがうちのクラスの貧弱っぷりを象徴してる」

俺は学年で見れば決して足が速いわけでも無いのに抜擢された。それは俺が優秀だからではなくうちのクラスのレベルが低いからに他ならない。

紗恵が何か言おうとした時、低い声が耳に入った。

「お、イチャついてるな。お二人さん？」

そこに立っているのは俺と同じく二年の男子。可も不可もなく親友ポジションでいそうな男が立っている。そしてその男は座っている俺たちを見下すように見る。

「お、お前は？！お前は…」

そうこの目の前に男子こそ…

「ああ、久しぶりだな、元バスケット部の夜彩凜…」

そいつは俺を見て察したのか、不敵に笑う。その笑い方はクラスで見てきた一般仕様のもの。どこにでも居そうな男子高校生だが…そう彼こそ…彼こそ？

「誰…だっけ…。思い出せそうで思い出せない…」

俺は思い出そうと奮闘するが結局記憶データベースから一見もデータが出てこない。この手の男子は似たり寄ったりで分からない。是非名前をすぐに確認できる位置に書いておいて欲しい。そもそも俺はこいつに会ったことがあるのかさえ怪しい。

「憲司だ！憲司」

憲司くんは俺が思い出せないのが予想外だったのか、そう慌ててフォローしてくれた。

「ああ、憲司くん。悪い、名前覚えるのが苦手だな」

相手の気分を不用意に害するのも良く無い。どんなに興味がないやつでも覚える努力をすべきだろう。

「お前の場合、絶対故意で覚えてないだろう。だから、ぼっちなんじゃないのか？」

憲司くんは名前を俺が覚えてくれなかったのがさぞ不快だったのだろう。非常に喧嘩腰である。

「お、おお：初対面なのに喧嘩腰で来たぞ：なんだこいつ」

俺は驚き半分でそいつを見ると憲司くんは呆れたように口を開く。

「初対面じゃないだろ」

非常に的確なツツコミである。そうだった：初対面じゃないんだ。いや待て、それは憲司くん側の主張であって、俺から見れば初対面同然なのでは。

「憲司くんの記憶がないんだから初対面と等価だ」

憲司くんがこちらを初対面ではないと思うのは勝手だが、こちらも憲司くんの事を会った記憶がない以上どうしようもない。

元バスケ部と言っていたからにはバスケ部の時の知り合いだろうか。何人かとは連絡はとったりはしたが、ほとんどが業務連絡しかしていないはずだ。

「こっちは覚えてるぞ」

憲司くんはそう不愉快そうに言う。拗ねてるのかな。俺が憲司くんだったらこんな状態、面倒くさすぎて無言で立ち去るレベルだ。

「大丈夫？誰かとこんがらがってたりしない？」

憲司くんを見ているにも全く思いつかない。バスケットの時に何人か知り合いがいたからおそらくその時の一人なのだろうけど、顔と名前が思い出せない。

ここまで来ると人違いが疑わしくなってきたと思わず聞いてしまった。

「お前とこんがらがるとやついないだろ」

それは非常に真つ当な指摘だと思う。いや本当に憲司くんは根っこからのツツコミ役だ。

「確かに。見つけたら連絡ください」

俺もそう軽口を叩く。しかし、俺に似ている人がいるのであれば是非お会いしてみたいのは本心だ。

と憲司くんは煮えたりしないような顔をしてみてる。

「お前がアカウント消して、俺はお前の連絡先知らないだろうが」

そうだな。前に連絡用のアカウントを消して、面倒だったから最低限の人にしか新しいアカウントを教えていなかった。連絡くださいと言いながら連絡先を教えていないのは失礼な気がする。

「悪かった。いるか？」

別に害がある奴にも見えないし、もし害があるならブロックすれば良いだけだ。

憲司くんは真顔でうなづく。

「ほしい」

シンプルにそう答えた。最初は俺のなんて要らないと思うていたが、こう言われると引くに引けず、素直に交換することになる。

「そうか、交換しよう」

俺がそう答えると憲司くんはすぐに出せる位置に入れていた携帯をパツと取り出した。それに対して俺はと言うと携帯なんて使わないだろうからと生徒席のバックに埋もれてしまっている。

「悪いな。今携帯持っていないんだ」

俺がそういうと、憲司くんはうなずいて携帯をポケットにしまった。心なしか少し

しょんぼりとしているようにも見える。

というか、彼は競技直前まで携帯を持ち込んで一体なにをするつもりだったのだろうか。謎は深まるばかりだ。

「あと、お前」

俺の思考が迷宮入りしていると、憲司くんが話しかけてきた。

憲司くんが大声を上げる直前のように息を吸い始めた。何、叫ぶの？ここで？お、おお……。勇氣あるな。でも、俺達を巻き込むのはやめていただきたい。

「俺たちが本当のリレーとやらを見せてやるよ」

憲司くんは俺を指差し、渾身のドヤ顔でそう言った。息をあれだけ吸っていた割に大した音量ではなかった。

憲司くんのドヤ顔を俺はただ、ぼうつと眺めることしかできない。そういえば、隣にいる紗恵さんの声が聞こえない気がする。そもそも憲司くんの話に興味無くて別のことをやっているのかもしれない。

「それ、最初に言うべき本題なのでは？」

俺が一番突っかかっている疑問点を聞く。

「切り出すタイミング逃したんだよ」

憲司くんはそう嘆いた。なるほどな、話したい話があっても話すタイミングが分からなくて延び延びになるパターンか。

「あー。それは分かるな、お前の気持ちは理解できる」

俺がそれに関しては激しく同意できる。

と、憲司くんはムードをぶっ壊すように再びドヤ顔した。

「とにかく、そのきみの彼女も幻滅するだろう」

うーん、なんというか。どこから突っ込むべきか分からないが、あまりかっこいいとは思えない。

「すでに幻滅してるだろうから、大丈夫。もう滅ぼせる幻が残ってない。あと彼女じゃない」

重要な誤解を探して、ピンポイントで否定する。が、憲司くんは全く話を聞かない迷惑上司のように無視をする。

「ふ…。この鍛え上げられた身体！我が二組の実力にひれ伏すのだな」

そう、言ってサイド・チェストをする。確かにバスケ部だけあって筋力はある。が、

筋肉は足りても常識が足りないようだ。

「俺の話聞いてる？それ社会で通用しないぞ。確かに二組には勝てる気がしないけどな」

是非、反省してほしいとばかりに俺がそういう。が、すでに迷惑上司モードに入った憲司くんは全く意を介さない。

二組は元々運動部の人間が多く、そう言った意味では全三組の一番の優勝候補だ。そもそも、うちのクラスの人材不足が深刻すぎるだけだ。再分配はよ。

「そうだろうな！最後にひれ伏すあなた方が楽しみだ」

憲司くんは都合の良い部分だけを切り取り、そう得意げに言った。時々、発言が都合の良い部分だけ切り取られて、炎上することがある。その場合、発言の全文を見ると意味変わったりするんだよね。良くないぞ、憲司くん。

「お前、相手が小物すぎない？」

そう、俺が呆れ気味に言った咄きは、憲司くんの勝ち誇った笑い声にかき消された。

俺は二組の方へ帰る憲司くんを見ながら“結局この時間は何だったんだ”との思いに満たされていた。

「憲司くん、行っちゃったね…」

ずっと黙っていた紗恵がそつと俺に言ってくる。なんというか、紗恵はどんな表情で憲司くんの会話を聞いていたのか興味はある。

「ああ、こじらせてるやつだったな」

俺はボソリとそう感想を言う。あれほど個性的な憲司くんのことはおそらく一週間忘れないだろう。

「だね…。でも、夜彩が名前覚えてないのも悪いよ」

そう紗恵は俺の非を批判してくる。そのことは結構昔から言われているような気がする。しかし、興味の無い人間の名前を覚えるのは大変難しい。

「そろそろクラスメイトの名前の単語帳作って覚えたほうがいいかもな」

困難な問題ならば、それ相応の勉強量を確保すれば良い。しかし、個人的にはクラスメイトの暗記などやりたくない。絶望的に頭に入らない上に、苦痛を感じるほどつまらない。

「名前だけ覚えても仕方ないよ、夜彩…」

紗恵はそう呆れたように言う。確かに、英単語も単語だけ覚えるより例文と一緒に覚

えると良いと聞いたことがある。

「そうか。なら性格と顔を結びつけて覚えたほうがいいか？」

難易度が上がるな。…いや、結びつけて覚えた方が頭に定着しやすいかもしれない。

語呂合わせとかもその一例だろう。

「そうだね」

紗恵は俺の思考を知らないのか満足そうにうなづく。もはや、紗恵は俺がクラスメイ
トの名前に興味を示してくれただけで満足なのかもしれない。それ、末期じゃねえか。
「なんか、かぜん暗記科目だな…。だから文系にリア充が多いって言われるのか」

「理系の人でも普通、同級生の名前は覚えられと思うよ、夜彩」

紗恵は速攻でその説を否定した。暗に紗恵は俺がクラスメイトに興味を示してぼっち
を脱却するように言っているらしい。大して困っている点も無いし、今のままで良いか
と言うのが俺の本音だ。

と、ノイズ混じりの大音量と共に実況が競技のスタートを宣言する。

「クラス対抗リレー。選手入場です」

歓声とBGMの中入場する。終盤の競技なだけあり、今までの競技よりも多くの生徒

から注目されていた。

そんな観客達を見ていると、幸か不幸か雪憐と目があってしまった。雪憐もこちらに気付いていたのか、お互い気まずそうに目線を逸らさない。すると、雪憐がぎこちなく手を振ってきた。どうやら頑張れと言うことらしい。期待に応えるように軽く振り返すと、未練を残さないように前を向いた。

クラス対抗リレーは一、二、三年と別れてそれぞれ学年トップのクラスを決めると言う馬鹿げた企画だ。そんなことを決めて何になるとか、そもそも運動部と違って団結し練習しているわけではないだろとか、やりたくないとか言いたいことは山程ある。やると決めたらやらないといけないのが、世の中の常。やりたいことを仕事にできる人などほんの一握りだ。

一年生のレースが始まる。一年生と言うこともあり、声援のボリュームは小さく盛り上がりにも欠ける。去年は俺達が走ったのだと思うと少し複雑な気はするが、後輩は雪憐を覗く全員知らないため、俺の心のボリュームも盛り下がる。結局、特にトラブルも何も無く第一レースを終えることができた。

問題は我々の第二レース。一、二、三組の第一走者が全員スタート地点に並ぶと、差

は歴然だった。そもそも体格から違う、流石二組だ。運動部の各エリート達を引っ張って、くることができるのだろう。

始まる直前、あれだけ賑やかな校庭は張り詰めた沈黙に満たされていた。

「位置について」

その一言で、一走者目は一斉にポーズを取る。沈黙を打ち破る爆発の瞬間は目前に迫っていた。

「よい」

人々が固唾を飲み見守る。

「どん」

それは爆発の合図。走者は一斉に走り出し、うるさい実況も再開した。

順位はスタートダッシュで圧倒的リードを確保した二組で、その後方に三組、最後に一組が三組の後ろにいる。

やる前から、二組の勝利は確実視されていたことだ。特段驚きはない。ただ、走る以上勝利を目指さなければならぬ。なんとか、引き離されないように頑張っほしい。

バトン第二走者に渡る。幸い、バトンを落とすような凡ミスもなく、スムーズに進

むことができた。だが、それは勝利ではなく引き離されなかったということだけだ。

第二走者を終えるとともに、臨時派遣された紗恵の番になる。理想は今の形を維持してなんとか引き離されないようにしてくれることだが。その可能性は限りなくゼロに近い。

紗恵は走者が近づくのを後ろから見て確認すると、助走をつけ始める。紗恵さん！少し早いです！紗恵は背後の第二走者が気になるようにチラチラと後ろを見ている。見るわけでも見ないわけでもない中途半端さでいつそのこと止まって手渡しをした方が良いレベルだ。

紗恵はボタンをうまく持てていない状態で走り出し、案の定ボタンはすりと落ちてしまった。紗恵は慌ててボタンを拾う。その顔を見たときに俺は気付いた。まずい、紗恵は明らかに焦っている。

嫌な予感しかない。それが頭を満たし始めた頃、それは確信へと変わる。

紗恵が転んだ、それも足首を捻るように。抱え込むように倒れた紗恵を見て、俺は新たな嫌な予感を感じてしまい思わず駆け寄った。

「おい、紗恵！大丈夫か？」

太陽がだいぶ傾き、運動会も終わりに近づいていた。

そんな中、俺は二人しかない保健室で寝ている紗恵の隣から窓を見ながら、椅子に座り考え事をしていた。

紗恵は病氣な訳ではないが、安静にしていたところ眠ってしまった。顔を見るととても疲れているように見えて、今はすやすやと眠っている。

だいぶ朗らかな顔をして寝ている紗恵の顔を見ると、ゆっくりと瞳を開けた。それはまだ夢の中にいるかのような表情だ。それを見てみると、すぐにここを離れてもよかったのに、結局俺は紗恵の隣に居座ってしまった。笑ったり怒ったりせず、安らかに睡眠を取る紗恵はとても新鮮だからかもしれない。

「あ、あれ…。夜彩…？」

紗恵は横にいた俺を見つけ、驚いたように見つめる。寝起きのせいか、心なしか目は潤んでいるように見えた。

「紗恵、起きたか。怪我の具合はどうだ？」

俺はそういうと、紗恵は無言で足の方を見た。まだ疲れているようにも見える。紗恵の休息の邪魔になるのなら良くない。俺は早めに去った方が良かったらう。

「え、ああ。まだ痛いよ…」

紗恵はそう答えた。幸い骨が折れたりしているような訳でもなく大事には至っていない。保健室で冷やして、様子を見ることになった。養護教諭によると痛みが引かないのであれば病院に行ったほうが良いだろうとのことだ。

「そうか。お大事な」

それは俺の心からの本心だ。怪我だけではなく疲労も含めて。

「夜彩。そのずっと居てくれたの？」

紗恵は申し訳なさそうに俺も見ってくる。ベッドに横になる紗恵の視線は自然と上目遣いになる。

「そうだな。なんか流石にその…そんな顔して寝られるとな」

それはいつのことだったか、紗恵に言われたことだ。懐かしさを感じて自然と落ち着いて声になる。

「え、私もしかして泣いてる?!」

紗恵が素で慌てていた。それを見て思わず俺も笑ってしまった。久しぶりに紗恵と話して余計な邪推などせずに俺は笑った気がする。

「泣いてない」

笑いながらそう答えた俺に紗恵は拗ねたような顔をする。

紗恵はまた横になって毛布に潜ると、毛布を顔まで被った。何をするのかと思って見ていると、ちよこつと目の下あたりまで毛布から顔を出した。

「なんか立場逆だね、春のあの時と」

そう、紗恵は俺を見て言った。春はもう大分前だ。そう思うと、何かがこみ上げてくる。頭の中の感情は決して言葉にはできない複雑なものだった。

「ああ、そうだな。逆だ」

俺はそう感慨深く言った。昔のことなど考えても仕方がないのに、考えずにはいられない。人間とはそういう生き物だろう。過去を振り返らない人は本当に少数だ。

紗恵は俺から少しだけ目を逸らして、悲しそうな顔をして言った。

「私そんなに辛そうだったかな…」

それは何か懐かしむような、もので、未知なものへ遭遇した時の不安にも見える。

紗恵は何を思っているか分からない。でも、疲れているときにそれを考えるのは得策じゃない。そして、そのことを考えすぎて自滅しては意味が無い。

「ああ、疲れているように見えた」

俺からは何も言うことはない。紗恵の悩みを解決してあげることができないし、自己の悩みは自分で解決しなければ意味がない。ただ、俺から見た紗恵の主観的情報を述べるに留めた。

「そっか…」

紗恵は力なくそう答えた。

「だから今は休んでろ」

それは紗恵の抱える問題を先送りすることだが、疲労があつてはきつと紗恵はその問題を解決するのは難しくなるだろう。俺ができる最大限の助言だ。

「うん、そうする」

紗恵は俺の助言にそう微笑んで答えた。

紗恵は寝始めようとしたとき

「リレー、大丈夫だった？」

と俺に聞いてきた。

大丈夫かと言えば大丈夫では無かったし、そもそもうちのクラスの補欠も用意してお

かないガバガバ体制に問題があったただけだ。むしろ、紗恵には申し訳ないくらいだ。

「大丈夫だ。今は心配しなくて良い」

俺はリレーに関して言いたいことをグツと飲み込むと、それだけ答えた。疲れているなら今余計な事を言って考えさせるべきではない。

そして、俺が居続けては紗恵の睡眠の邪魔だろう。そう思って、俺は立ち上がった。

「じゃあ、俺は…」

紗恵は流石にまだ寝ていないだろうから、そう一言言って立った。あまり音を立てないように出ていこうとする。

「待って！」

俺は腕を掴まれ、進むのを止めた。振り向くと、毛布から紗恵の手が俺の腕を掴んでいる。紗恵は俺を掴むためにベッドから上半身を置き上げていた。

「その、もうすこしだけ居て…くれない…かな？」

紗恵はそういうと手をゆつくりと放した。あくまで強制はしないという事だろうか。

その不安そうな顔は雪憐を連想させた。いや、紗恵の顔は紗恵のままだ。今までと何も変わらない。だから、これは表情が似ていたのだと思う。

「まあ、いるだけでいいなら俺はいる。今は彼女もいないし」

俺は紗恵の顔から目を逸らしながら俯き気味に答えた。すべての人を助けられない、だから自分が一番大切な人を優先的に助ける。俺には雪憐がいて、大切な人が既にいる。今は彼女がいないから”など理由として、全く意味が無い。

「それに、紗恵には世話になったから。こんな簡単なことで喜んでくれるなら、せめての礼で」

俺は本当に心にも無い事を言った。あれだけ紗恵を信用しないでおきながら、最後の最後で“紗恵への感謝”を理由に俺の行いを正当化しようとしているのだから。

きっと、俺がこの選択をしたのは“紗恵の悩み”に関して一つの馬鹿げた仮説を思いついてしまったから。そして、その仮説が馬鹿げていると分かっているながら、否定しきれない自分がいたから。

「ありがとね、夜彩」

紗恵が安堵するように笑った。それを見て俺の心は締め付けられ、血液でさえ通らなくなつたような気分になる。心臓の鼓動が少し早い。

「どういたしまして」

俺はそう答えるのがやっとだった。締め付けられる心が気になって、立つ気力がわかなかった。自然と紗恵の隣に座る。

「夜彩は私と友達で楽しい？」

紗恵はそう落ち着いた、ゆっくりとした声でそう俺に聞いた。とくんとただでさえ早い心臓が瞬間的に高鳴る。

「なんだよ、急に？」

俺はそう答えた。俺は少し焦ったような声色になってしまったと後悔した。

「いいから」

紗恵はそう有無を言わずに答えを俺に催促した。

紗恵との時間はどれも疲れなくて、表面的なもので、大きなトラブルが起きる事もない何気ない日々だ。それは果たして楽しいと言えるのだろうか。表面をなぞるように生産性の無い話をする俺達は。

「どうなんだろうな…。楽ではあるけど」

言える自信がなかった。だから、確実に間違いないことを言った。一年半近く、俺と友達を続けてくれた紗恵に対して、俺はとても軽薄な人間だと感じた。

「そっか」

紗恵はそう嬉しいのか悲しいのか寂しいのかよく分からない声でそう言う。それが俺の不安をかき立てた。俺の選択は正しかったのだろうか。

「紗恵友達いるだろ。俺にこだわる理由が無い」

今度は俺が質問した。昔からずっと不思議で、不可解だったこと。俺には結局分からなくて、答えを出せずにいた。

「そうだね。でも私は夜彩といて楽しいよ」

紗恵の答えは答えになっていない。それは“俺にこだわる理由”でない。楽しい人なんて他にもいるじゃないか。わざわざ面倒な俺と友達になる必要性は無いのではないか。俺は知りたい。何故紗恵が俺と友達になってくれたのか。だから、何も言わずに俺は紗恵を見つめていた。

「運命的な事はなくて、何気ない日常だけだ」

少し間が空いて、紗恵がぼつぼつと小雨が降るように語り出した。

それはこの一年半の紗恵との人間関係の答え合わせだ。

「私はこの時間がずっと続けばいいのになって」

紗恵はそう言うとは一度言葉を区切る。紗恵は息を吸った。息が少し震えているような気がした。

「…思うんだよ」

紗恵は全てを吐き捨てるように言った。小さい声だったのに、とても良く聞こえて、俺の頭の中を反射した。

紗恵は泣いていた。何故泣くかなんて、聞くのは野暮だった。俺がすでに仮説を立ててしまっていたのだから。

“きつと、そんな関係では、君も紗恵君も望む結果は得られない。君も紗恵君もとても後悔する”

いつか、藤堂先輩の言葉が虚しく俺の頭の中で響いた。

「紗恵…」

俺は何も言えずに、意味もない呟きを吐いた。頭の中で嫌な結末が現実のようにくつきりと予想できる。

「夜彩とたわいのない会話をしてる時が一番楽しい」

紗恵はそう言葉を紡ぐ。きつと、それは紗恵にとって初めてな想いで。

「でも夜彩に彼女ができたらできないでしょ？」

それは、紗恵が選んだ選択。

「そうだな。それは浮気に近いから」

大切なものを守るために人は選択するんだ。

紗恵も俺も：

「うん。だから」

紗恵はそう区切りをつけた。もう、分かっている。この先が嫌でも分かる。

「私は夜彩が…」

紗恵は言葉を振り絞る。それは心の奥底から出しているような声で、悲痛さすら感じるほどの力強さだった。

「私は…」

紗恵は俯いて続きを言わなかった。言ってしまうえば、紗恵の見た事のない世界が広がっている。良いか悪いか俺には分からない。

だが、今言うべきことじゃない。

「紗恵、とりあえず休め。きつとそれはちゃんと考えるべきことだから」

俺は酷いやつなのだとかから思った。俺は紗恵の想いを封じ込めた。恨まれても構わない。俺にはこの先の紗恵と向き合える自信が無い。

俺はそう言い終わると、何も言わずに立ち上がる。紗恵は何も言わなかった。保健室に響く俺の足音が“これで良かったのか？”と責め立てる。

「私は夜彩が好きだよ……」

その、聞き取れるかどうか微妙な独り言にも近い声。だが、俺は聞き取ってしまった。頭が真っ白になる。聞こえなければ良かった。聞こえないふりをすれば良かった。

俺は立ち止まってしまった。真剣に向き合う事もせず、騙し続ける事もせず、中途半端に、何も言わずに俺は立ち止まったのだ。

そんな自分に激しく嫌気がさして、乱雑な足音で保健室のドアを手にかけて外へ出た。紗恵が今どんな顔をしているのか分からないのに、何故か悲しんでいる表情しか浮かんで来なかった。

紗恵が今どんな気持ちなのかと考えると胸が痛む。紗恵に今俺がどんな行いをしたのかと考えると罪悪感が苛まれる。しかし、紗恵の告白を聞いてしまえば、紗恵を信じて向き合うことができる気がしない。結局最後の最後まで紗恵のことを信用することがで

きなかった。

こんな失礼な終わらせ方で良かったのだろうか。もう一度戻って伝えるべきではないだろうか。頭の中でぐるぐると思考が空回りする。ドアから出てすぐに立ち尽くし夕陽に照らされた廊下は虚無感しか残してくれなかった。夕陽は感傷を呼ぶような暖かいものではなく、ただただ目がちかちかするだけのオレンジの線。

俺は振り向き、手を保健室のドアにかけるが力なく落ちる。今戻っても、もう決まっている。俺は雪憐が好きで、紗恵のことは好きじゃない。俺の答えは決まっていて、紗恵を傷つけるのは明白だった。なにかを選択することはなにかを選択しないこと。選択は可能性を減らし後悔を増やす。

しかし、だからといって選択しなかったことと向き合おうとしないのはとても不誠実なのではないか。ちゃんと向き合うべきなのだろうか。

俺は：最後まであいつのこと信用できなくていいのか？最後まで俺を信じて、向き合って、最後の最後にちゃんと本当の気持ちを伝えてくれた人にする態度なのか？

俺が手をもう一度かけようとした時だった。ドアが俺の手を触れずに動く。まるでそれは呪われた俺を救済しにきてくれたようで。開けたのは、俺が薬物と呼び最後まで信

じることが出来なかった友達。

松葉杖について、無理に笑う紗恵が目の前にいた。

「紗恵、休んでろよ。まだ痛いんだろ」

紗恵が無言で首を横に振った。それが今までの紗恵とは違って異様で俺はひどく動揺する。

「夜彩のことだからきつとそんなことだと思った」

紗恵が俯き気味に松葉杖に重心をかけるようにして…

俺を押した。

とても弱々しいものだったが、まるで魔法が込められているのか、よろけるように俺は後ろに一歩後退…いや、結果的に保健室のドアの前から踏み出せずにいた一歩を踏み出した。

「夜彩はちゃんと選択したんだよ」

紗恵の声は押したときのように弱々しく、自分で決めた選択が信じられない俺を心から哀れむようだ。

「じゃあね、夜彩」

紗恵の声は呪いのようで衰弱し切った病人のようで吐き捨てるようにそういうとドアを閉めようとする。

「紗恵！」

俺がなんとかドアを手で止めた。考えではなく直感で動いたこの行動がせめて事態を悪化させないことを俺は信じた。

「最後まで信じてやれなくて悪かった」

俺は罪を犯したことを後悔するように、もうどうしようもないこの状態をただただ悔やんだ。

「いいんだよ。それが夜彩の選択なんだから」

紗恵は静かに独り言のように呟いた。それはもうなにかを諦めたようで見て、こちらの心が締め付けられる。

その姿を見て俺はただただちゃんと信じて向き合えば良かったと、後悔する。俺が力なくドアの手を落とした。

「私は夜彩を信じてたよ」

紗恵がドアを閉めた。

それは一年半の紗恵との関係の終焉で、雪憐以来の唯一の友達を失ったことだ。

残ったのはより増えた虚無感と徒労感である。一年半の歳月が嘘のように、関係性がそもそも存在していないのかと思うほど何も残らない。

寝た紗恵を一時間待てたくせに、結局大切な一瞬はろくに向き合えない。紗恵を信じられなかった。最後まで紗恵を信じるのが怖かった。紗恵が俺を信じてくれていたことさえ俺は信じられなかった。

紗恵を信じなかつたくせに紗恵といるのが楽で、ずっとずっと紗恵に甘えていた

十二章

十一月の初頭、青春の一ページと名高い文化祭を終えた俺は片付け係としての自身の責務を果たしていた。俺が誰かと何かをやるよりも孤独に何かをやる事の方が向いているのは間違いないだろう。社会には適材適所というものがあるのだ。そこで俺は適した役割をはたしている。

夕方になり、降りていく日が宴の終わりを告げる。彼らはまたこうしてこれを出して糧にして、未来へと進んでいくのだと人々は信じている。しかし、現実問題として、それほど効率良く子供達が成長していくのであれば、きっと人類はもっと素晴らしい社会を築けているはずだ。

過去を後悔したり、過去の過ちを認めなかったり、過去に未来を毒された人達は決して少ないはずだ。ましてや未熟な思春期を迎えた少年、少女に過去を制御できるとは思えない。制御できない過去は後悔へと変わり未来さえも侵食していく。

ほかに、あの時、俺にはどの選択が選べたのかと。

その選択は今の俺を変えられたのかと。

どうして、あの時、その選択をしなかったのかと。

考えても、それは絶対に想像の域を出ずに、過去を変えられない事を人は理解しているはずなのだ。それでも考えずにはいられない、それを愚かと呼ぶか青春の美学と呼ぶか。

俺は適当に片付けをひと段落させると、教室を抜け飲み物を買いに自動販売機へと向かった。流石片付け係だけあり、俺に話しかける事もなく、訝しむような目線で俺を送り出す。コミュニケーションが微塵も発生しない片付け係は、誰かが声をかけないため休憩時間が発生しない、よって適当に自分で取るしか無い。そもそも現場責任者を決めておくべきだったのだろうが、クラスの実行委員長様は後夜祭へ直行だ。どうせ、明日も片付けをするのだから片付け係単独でやる今日は完全にやる気がないのかもしれない。少し離れた、自動販売機でカフェオレを買う。ゴロっと鈍い音と共に無造作に缶が落ちてくる。動作はとても機械的で冷たい。俺はそれを人工的な暖かさを感じながら手に取った。例えばそこに愛が無くて暖かさはある。だが、それでも愛に勝る暖かさなど無いのかもしれない。人は“何をしたか”だけでは無く“なぜそれをしたか”も重視する

生き物だから。業務の一部として金を受け取り、缶を落下させた機械には最低でもプロセスに暖かさを感じることはできない。

俺はそんなことを考えながら、物置として使われている教室を開けた。大量に積まれた机と椅子を見ながら、入り口近くの空間に座り込むように屈んだ。孤独な俺を缶は無条件に温めてくれた。“愛”は愛する人のためにある暖かさだ。だが、これは違う。皆平等に悪人から善人まで暖かめてくれる。

そう考えていると、ふと不自然な気配を感じた。これはきっと誰かがいる気配だ。だが、話をする訳ではなく、感じるのは気配だけ。その人も孤独にここにいるのだろうか。その雰囲気はとも俺に似ていて、引き寄せられるように奥へと近づいた。近づけば近づくほど排他的で誰をも拒絶する気配を感じる。

その人は窓を見ていた。何をする訳ではなく、いや何もしないからこそ、排他的な気配を出せるのだ。

「あ、クリスタか…」

金髪の少女は声を聞くと嘲ったような視線で俺を見た。だれも来ることを求めているように見えるのに、誰かを待っているようにも見えた。そしてまるで俺が“来るべき

人間”ではなかった気がするのだ。では、果たして“本来クリスタを訪れるべき人間”は誰だったのだろうか。

「なんだ、夜彩くんか」

クリスタはそう心底興味がなさそうに吐き捨てた。言わずにも伝わる“お前は求めていないと”。

しかし、俺もクリスタに用が無いと言えは嘘になる。四年前の精算にクリスタは不可欠であるからだ。そして、クリスタの存在自体が罪悪感として雪憐を呪っているとしたら、そのせいで四年前のように笑えないのだとしたら。

「なんだってなんだ」

俺は聞いた。そんなもの聞かなくても分かっている。だが、それでも確認を取りたかった。

「なんだはなんだだよ。失望したって意味」

クリスタの反応も表情も行動も発言も俺の予想通りに行われた。予想通りなのにすぐ癪に触る。いや、もしかしたら予想通りすぎて腹が立ったのかもしれない。

「クリスタは一体何を期待していたんだ？」

それは怒りから出た言葉ではなく、きっと俺の心からの疑問だったのかもしれない。クリスタが会いたかった人に興味がある。きっとクリスタはその人とは約束などしていないのだろう。ただ、それでも夕陽を眺めながら、来るはずがないその人を待つ気持ちに偽りは無いはずだ。

「別に」

クリスタはそういうとぶいっと目を逸らした。俺に言いたくないと、言わずに伝わる。「元々期待していなかったなら“失望した”は使えないぞ」

期待していたにもかかわらず、期待する結果が返ってこなかった時に“失望”するのだ。元々期待していないのであれば、失望も何も無い。もちろん、クリスタが本当に何も期待していなかったのかどうかは本人にしか知り得ない。だが、クリスタが答える意思がないのであれば、それでいいだろう。俺が何かを言うべきではない。

「相変わらず、屁理屈は上手みたいだね」

クリスタは諦めるようにそう呟いた。もう俺がこういう返答をするのはすでに知っているから面白みも何も無いという事なのだろうか。別に俺はウケ狙いで言っている訳ではないのだが。

「そうだな」

否定する要素も無くそう俺も応じた。

クリスタは俺を見定めるように見ると、笑顔を浮かべた。悪い笑みだ。俺は直感でそう感じたのだ。無邪気なからかいでは無く、あるのは嫌悪と諦めに近いネガティブな何か。

「だから、紗恵に愛想尽かされちゃたの？」

それはおそらく意外な言葉だったのだろう。だが、俺は少ばかりクリスタのことを知っている。なんとなくこういう事を聞いてくるだろうという事も予想できてしまった。悪意を感じる尖った問いだ。

「さあ、どうなんだろうな。紗恵の気持ちは紗恵本人しか分からない」

それが俺の答えるべき台詞。そう感じていた。実際問題どう答えるのが一番良い結果を得られるのかは不明だが、これが一番俺らしく、そして嘘の無い事実だと思う。紗恵本人にしか紗恵の感情は理解できない。他人が紗恵の感情を答えても、それは推測の域を出ない。

だが、クリスタはつまらなそうに口をつぐんだ。

「酷い男。他人に興味が無いのかしら」

そう一蹴。吐き捨てられた悪意と共にクリスタは明確な拒絶を示す。

「中途半端に興味を持たれて、人は喜ぶと思うか？」

俺はそうクリスタに聞いた。

中途半端な興味など、本人から見れば、何もしないくせに情報を抜き取ろうとしている行為だ。なぜなら最終的に物事をやるのは本人だ。なのに中途半端な興味に基づく共感や理解など無責任にも程がある。苦しむ人に共感や理解をするのであればそれなりの覚悟を持つてするべきだ。

「人ってそうなんじゃない？」

クリスタはそう白々しく答えた。それは俺から見るとわざとやっているようにしか見えない。適当に答えるという事は、真剣に答えるメリットがクリスタに無いという事なのだろうか。

「じゃあ、クリスタは四年前どう思っていたんだ？」

俺がそう聞くとクリスタは言うまでもなく俺を嫌悪するような表情をする。そこには俺の上部だけの興味に対する明確な拒絶と苛立ちが窺えた。

「うわ、気持ち悪い」

こう言う内容の事を言う時のクリスタはとても輝いて見える。白々しく答えた時より今の方がよっぽどクリスタらしかった。

「だろ。喜ぶはずがない」

俺が苦笑いに近い表情でそういうと、クリスタは俺が同意を求めていると感じたのか露骨に嫌な顔をした。別に俺はクリスタの同意なんて要らないんだけどな。

「私は死んでもごめんだけど、紗恵はあなたに興味を持ってほしいと思ってたみたいだよ」

クリスタはそう少し寂しそうに言う。それが少し意外だった。クリスタが紗恵に興味を持つのも意外だが、それよりもクリスタがこんな表情をする方が意外だ。

「わざわざ、説教するのか。クリスタらしくない」

俺はそう答えた。これは紗恵と俺の問題で、クリスタは関係の無いはずだ。他者の関係性に口を出すのは違う。

そして、クリスタが“そうことをするはずが無い”と何か確信めいた考えが俺の思考を支配していた。

「あなたに説教なんてしない。時間をドブに捨てたくないもの」

クリスタはそう答えた。いつもの返答なのにクリスタらしいと安心してしまっている自分がいた。

勝手に他人にこうあつて欲しいと押し付けるのが身勝手であるのは俺もよく理解しているはずなのに。

「じゃあ、なんなんだよ」

俺はそう答えた。言葉の割に不快感が無かった。予想通りなのを腹立てるより“クリスタらしくない行動”を取る方が今は怖かった。

「哀れんでの。可哀想だなんて」

クリスタは苦虫を噛み潰したような表情で俺を見ていた。哀れんでいると言うことをこうもストレートに言える人はそう居ないだろう。大抵は顔か行動で出し、相手に声で伝えることなんてまずない。

「勝手にしろ。俺はクリスタの考えに興味はない」

クリスタの考えが何であろうと俺に関係は無い。そして、クリスタが何を考えていようが俺にどうこうできる権利も無い。

クリスタが俺を見下ろすように見る。…いや身長は俺の方が高いのだからあくまで心理的なものだが。

「で、なんでここに來たの？」

クリスタはおそらく最初に尋ねるべき問いを俺に投げかけた。しかし、面と向かって俺に聞かれても困る。別に一人で快適に缶コーヒーを飲み、物置に來たのだから。

と、俺はそこまでの思考である重要な事を思い出す。

缶コーヒー飲めてない！

慌てて、手にある缶コーヒーを見る。それは冷め始めており、全盛期のあの暖かさは消えてしまっている。

俺が思わずうへーとした顔をして視線を泳がせるとクリスタは嘲笑するようにこちらを見ていた。クリスタさん、今日一番で嬉しそうですよ。

過ぎ去った時間は悔やんでも返ってこない。ため息に近い吐息を吐くと、缶コーヒーを開けた。現役時代に飲んでもらえなかった缶コーヒーの気持ちを考えると胸が痛む。後悔と缶コーヒーへの罪悪感を丸々胃へ飲み込むように一杯飲んだ。

「來たかったからだ。クリスタの土地じゃないだろ？」

俺はフタから缶コーヒーの中身を見ながらそう答えた。中身は暗がりでもよく見え、真っ黒な得体のしれない液体が渦巻いているように見える。それがなんなのか分からないということはとても恐ろしいことだ。

「そうだね。ここは学校だよ」

クリスタは平坦な声で答える。それがクリスタにとっても普通の声なのだろうが、普通の人から見るととても不機嫌そうに聞こえる。

「そこまで、分かっているなら言う事は無いな。公共の場所では静かにしてくれ」

俺はそう答えた。本来の目的は一人で缶コーヒーを飲むことだ。クリスタとはたまたま鉢合わせただけで、クリスタへの用事もこの調子だと果たせそうに無い。この教室に二人…しかもクリスタと一緒にいるのは不本意だが、せめて静かに缶コーヒーを飲みたい。

「なーんだ。せっかく孤独な夜彩の話し相手になってあげようと思ったのに」

それは誰の声だっただろうか。いや、この教室にはクリスタと俺しかいないはずだ。

そして、俺はこれほど高い猫撫で声を出せるはずがない。とそこまで思考を巡らせると思わず口をつけていた缶コーヒーでむせた。

咳き込むたび鼻にコーヒーが入ってくるような気分になる。肺が息をするために無理やり吐き出すので、苦しい。コーヒーをぶちまけないように必死で制御すると、少しすると治まり、呼吸のありがたみを実感する。

そこにはクリスタしか居なかった。そしてクリスタはいつもよりも柔和な顔をしている。声と表情でわかる。俺は自然とクリスタにかつての友達の紗恵を重ねてしまう。だが、それらはとても似ているのに何故かクリスタが真似したものだとか分かるような欺瞞的な暖かさに満ちていた。本物とは違う。

「言ってる事が支離滅裂だ。そんな心にも無い事を俺に言っただけになる」

俺はそう“そんな心にも無い事”を答えた。何が“言ってる事が支離滅裂だ”なのか。クリスタが紗恵の真似をやったのは明らかなのだから、その真似した台詞の内容がクリスタらしくないのは当たり前のはずだ。自分でもクリスタの意図は分かっているが、それでも俺は紗恵の話をしたくなかった。

「何もならないよ。あなたと同じ」

言っている内容と心の中身が違うのは当たり前で、それ自体に意味を求めても意味は“何もならない”と。そして、それは“あなたと同じ”だろう。

「何が言いたいんだ？意図が分からない」

ひどい人間だと思う。クリスタの意図が紗恵の話の話が自明であるのにあまりに見苦しい言い逃れだ。ある意味先程の“言っている内容と心の中身が違う”ことを自身の手で証明してしまったのだから。

「分からないの？」

クリスタは最後のチャレンジだと、最後通告のように聞いた。ゲームの初期化する時に出てくる最後の選択肢“本当によろしいのですか？”に近いものと思う。

「もういい、面倒だ。くだらないなぞなぞに興味は無い」

今更変えるわけにもいかなかった。

俺とほぼ絶縁状態の紗恵をずっと放置している俺を見て、クリスタは何を思うか。クリスタは紗恵を友達だと思っていて、俺の事を信用していない。絶縁状態になった原因が俺にあると推測するのは当然だ。原因を知っているか否かは不明だが。

そして、原因が俺にあるのは事実であるのだから。

「本当に最低だね。なんで、こんな男を紗恵は好きになったのか」

クリスタはそう紗恵に同情するようにいう。クリスタはこれがもう紗恵の話題である

事さえ隠さなかった。

クリスタの言う通りだ。何故俺を好きになってしまったのだろうか。“愛するのに理由なんてない”と言えばそれまでであろうが、それでも理由くらい知る努力を俺はすべきだったのかもしれない。

「紗恵を振ったんでしょ？」

クリスタは俺に念押しするように聞いた。過去は因果応報のように俺に突きつけられる。

その過去には紗恵の恨みが入っているように錯覚して見えた。本当はあの時紗恵がどう思っていたかなんてわかるはずも無いのに。知ろうとしなかったから、俺の勝手な想像でしか補えない部分だ。

「クリスタに答える義務は無い。最低でも俺からは何も言わない」

もしかしたら、紗恵からこの話をクリスタは聞いたのかもしれない。でも、例えそうだととしても、俺が勝手に話すべき事じゃない。

それにあの時紗恵の事をろくに知らないのだから、俺では客観的な事実を語ることができない。

「それが答えだね。こんなの嘘なら否定するから」

クリスタの声は無情で冷たかった。俺がどれだけ上手い言い訳したとしてもクリスタは聞く耳を持たないだろう。

言い訳をするつもりもないし、隠したいとも思わない。しかし、俺と他人との話を無許可で第三者に話すのを俺は正しい選択だとは思えない。

「紗恵、すぐく落ち込んでるんだけど」

俺は何も言わなかった。いや、言えなかった。俺からクリスタに言える事なんて何一つ無い。

クリスタは黙っている俺を何も言わずに見ていた。嘲笑うわけでもなく、悲しむわけでもなく。その真剣な視線が俺に回答を求めている事は言うまでもない。

黙る事は許さないと。何故紗恵を傷つけたのかと。全てをクリスタの前でさらけ出して、弁解しろとそう言っているのだ。

「…驚いたな。クリスタに人を想う気持ちがあったのか」

それは俺のある意味での回答であった。

例え何があってもクリスタには話さないと言う回答だ。

俺は正しいと思える選択しかできない。多分今の選択も俺なりの正義に基づいているはずだから。

世界が止まるように沈黙する。外からはおおらかな環境音と中からは静かな人の生活音。表情も信条も崩さなかった二人を襲ったのは無音である。

「そうだね。夜彩くんは人だとは思ってないけど」

クリスタは笑っていなかった。感情の波もなく、クリスタの奥底にあるのはきつと、静かなるドス黒い何か。

「あなたはもう二度と紗恵に近づかないで」

その真剣な表情はクリスタらしくなかったのに、まるで本来のクリスタがこっちであるような気がした。いつもの、軽蔑しきったような表情でもなければ嘲笑った表情でもなかった。

「ああ、それでいい」

否定する事もなくそう頷いた。

そして、しばしの沈黙。きつと紗恵ならば、沈黙を嫌い話題を供給したのだろう。だが、目の前にいるのは紗恵ではない。たわいのない話などするはずがなかった。

「なあ、クリスタは四年前の事で俺を恨んでいるのか？」

それはきつとずっと聞きたかったことで、俺の長年分からなかった命題の一つだ。いくら仮説を立てても、真実が分からずにいつのまにか答えを出す事を諦めてしまった。

クリスタは表情を一つも変えずに、俺を見つめた。何も言わずに美しい金髪の少女とそれに不釣り合いの突き刺すような視線。

そこに雪憐の暖かさはなかった。

そこに紗恵の優しさはなかった。

それは藤堂先輩のように待ってくれない。

「私は夜彩くんが思うような過去に囚われた可哀想な女じゃないから。私は私の意思でここにいる」

そう言った。このシンプルであまりに真っ直ぐな答えは、きつとクリスタの選択なのだ。だれのためではないクリスタ自身のための。

「そうか」

俺はそう呟くしかなかった。反論の余地がないほどに真っ直ぐで、否、きつと共感してしまったのだ。その真っ直ぐさはある意味俺が求めているモノでもあったから。

「私はあなたのことがとても嫌いだけど、恨んではいない。だから私はあなたに向き合う事なんてない」

補足のように付け足した。それにも俺は文句がなかった。

きつとクリスタは心の中で勝ち誇っているに違いない。“最善の選択”が出来たと。

嫌でもクリスタの価値観が夜彩凜に似ている事を分かってしまったから、クリスタの立場を自分に置き換えるとクリスタの思考に予想がついてしまう。

「意外だった？」

クリスタはそう言って、いつものように邪悪な美しさで笑う。

だが、俺はそれをいつもと同じように見ることができなかった。もし、こいつがクリスタの価値観が夜彩凜の価値観に近いものであるならば……。俺はそれを認めることができないだろう。

何故なら、クリスタが“客観的に見た夜彩凜”になってしまったのだから。俺はクリスタが嫌いだ。あの、嘲笑うような表情も人を小馬鹿にした態度も他人への不信感も。

「ああ」

俺はやつとの思いでそう答えた。息を無理に出すようにしないと声も出ない。

「私の選択を“あなたへの恨み”が決めるなんて、死んでもごめんだよ」

最悪だった。本当に共感できてしまうのだから。まるで俺が望んだ回答をしているようにも思えた。それともわざとそう答えてクリスタは俺を弄んでいるのだろうか。

「正しい判断だな。自分の選択は自分自身によって決めるべきだ」

もう何もいうべき事はない。できるのはクリスタの言葉に賛同するだけだった。

俺がそういうとクリスタは俺を不愉快そうに見た。クリスタ自身も俺と価値観が似ていることに気付いていて、それが俺と同じようにクリスタにとっても不愉快なのかもしれない。

「あなたがそう思うなら、四年前の選択は夜彩くん自身によって選んだ選択だったの？」

それは当然の問いだった。“自分の選択は自分自身によって決めるべき”だと思っているのなら、あの重要な選択は自身の手によって選ばれたのが道理なはずだ。

「そうだ。俺が選んだ選択だ。あの時最善だと信じて選んだんだ、あの選択は」

雪憐を傷つけないために、クリスタという他人を犠牲にする。大切なものを守るために大切ではないものを犠牲にする。四年前、その選択が余りに利己的であったとしても

大切なものを守るのは当然だと疑わなかったのだ。

「…今でも信じてるの？ 最善だったって」

クリスタは重ねて聞いた。クリスタもきつと計りかねているのだろう。俺とクリスタは別の脳を持った別人だ。直接他人の思考を理解することなどできない。だからこそ、人間は会話をして考えを伝え、他人の思考を理解しようとするのだ。

「もう最善とは思えない。ただ、俺はどれを選んでも後悔していたと思う」

嘘も偽りも無い。最低でも今はそういう認識だ。あの頃は、幼かった。もう少し考えれば、クリスタと雪憐を傷つけずにすんだ方法もあったかもしれない。

「そう。私も少し意外。最善だと信じて疑わないものばかりだと思ってた」

クリスタはそうぼそつと言った。

「まさか。考えれば後悔するから、目を逸らしているだけだ。本来考えるべきはずなのに」

ずっとそうだった。いつもいつも最善だと思って選んで後悔して、選択を変えられない事を悔やんで、そして後悔した事さえ後悔するんだ。

“何故過去の自分を信じないのか？” って。

「そんな、生き方をして楽しい？」

それはいつか誰かに聞かれた問いだったかもしれない。

「楽しくは無い。でも、これはそういう問題じゃない」

そうだ、別楽しいかどうかなんて関係ないんだ。

「楽しくても辛くても後悔しても人は選択を迫られる」

選択するのに“最善の選択”以外を選ぶ事なんて許されない。考えて悩んで、どれが最善の選択と考えて…。それでも未来の自分にやっぱこれが正しかったと信じてもらえるために…!!

「だから、最善の選択を信じて選ぶんだろ」

クリスタは俺を見ていた。馬鹿にするわけでもなく、嘲笑うわけでもなく、俺と向き合っていた。

「それは誰のための選択？」

静かな声だった。

それは誰にとつての最善なのか。誰が望んだ選択なのか。

……分からない、答えが出てこない。最善の選択であるかどうかはずっと考えてきた

のに、それが誰のためかなんて考えてことがなかった。今まで見えていたはずの“最善の選択”が気体のようにフワフワとしているように感じる。

「雪憐のためだ」

確信も持てずにそう言った。酷い話だ、四年間ずっとそれを考え続けてきたのに肝心な時に何にも、何一つ役立たない。

「四年前と同じだね」

無慈悲な声だ。思わず耳を塞いでしまいたくなる。

「……いや、違う。きっと四年前の俺は“雪憐がいじめられるのを見るのが怖い自分”のためだったんだ」

自分でも空回りしているのが手に取るように理解できた。クリスタどころか自分自身にさえ響かない。ただただ言葉は空っぽだった。

「今と全く同じだ」

クリスタは見苦しいと言わんばかりにそう断じた。

「そうじゃない、今回は！」

クリスタの言葉にどれほどの説得力があるか俺が一番分かってる。

分かっていても、抗いたい。認められるわけがない。俺の最善の選択は大切な人のためになっていないと分かったら、俺は一体何のために悩んで苦しんで選んだのか分からなくなる。

「今回は？今回のあなたの最善の選択は本当に花ちゃんのための選択なの？」

遮ったクリスタの声は俺の荒げた声よりもとても小さかったのに、この物置に響いた。それだけ俺の言葉は空っぽで意味がなさなかったのか。

黙って俺を真っ直ぐ見つめるクリスタ。

「あなたは花ちゃんの気持ちを考えたことがあるの？分かってあげようとした事があるの？」

一つ一つの言葉がスローモーションのように心へ染み込み、俺の体の中で反響する。

「それは……」

何も言えなかった。自分の気持ちと向き合ったことがあっても、他人の気持ちと向き合った事なんてなかったからだ。いつだって考えた相手は“俺から見た花ちゃん”だった。

「いい加減気づきなよ。これじゃあ何も変わらない、四年前と同じ」

花ちゃんの気持ちを身勝手に予想して、勝手に行動した四年前。

それは利己的な行動としか言いようがない。俺にとっては最善だったかもしれない。だが、花ちゃんにとって最善だったのか。

「あなたの最善の選択は文字通りあなたにとっての最善の選択だけ」

突きつけられたそれは、俺が抱えてきた矛盾なんだ。相手の気持ちを考えられない人間に誰かを愛す事なんてできるはずがない。

「人の気持ちを理解しようとしなくて、誰かのための最善の選択なんてできるわけがない」

それが全ての答えだった。雪憐の気持ちは雪憐しか知り得ないと分かっているながら、それを俺の中で勝手に解釈した。それで得られるのは利己的な選択だけなのに、それを“雪憐のため”だと偽造した。

「…俺は… 雪憐のために…」

なら、俺はどうするべきなのか。

「雪憐のために何をしてあげられるんだ…」

それは多分クリスタに聞いたわけではない。だが、目の前にはクリスタしかいない。

クリスタに聞いていないと自分に言い聞かせながらも、内心はどこかに答えに近づける何かを求めている。

答えはいらない。でも、これじゃ俺は何も変わらない。仮に悪魔の言葉だったとしても、俺は雪憐の気持ちを考えるために聞く。夜彩凜のただけを探すのでは答えは絶対に得られない。

「何もできないよ」

クリスタはそう言った。答えどころかヒントですらなかった。

いや、ある意味クリスタは正しい事をしたのかもしれない。まだ俺の頭の中に呪いのようにこびり付いていた“自分の中で最善の選択さえすれば、それは雪憐にとっても最善の選択だ”という藁にもすがるような思いを完全に否定することになった。

「四年前の花ちゃんにしがみついているあなたには」

俺がずっと“四年前の花ちゃん”の事を考え続けてきた。逆に考えない事は思考の放棄だと思っていたし、それは悪だと信じていた。そして、四年前の事の精算と贖罪は俺と雪憐のためであるとも信じ切っていた。

「今の花ちゃんの事が本当に好きなら、何をすべきなのか考えたら？」

俺は今の雪憐のことを考えられていたのだろうか。

四年前に囚われているのは俺だけではないのか。

もう四年前の花ちゃんの前へ歩き出してしまっていて、あの草原にいるのは俺だけではないのか。

「きっと、それはとてもシンプルで分かりやすいものだよ。どうして理解できなかったのか私には理解できないくらい」

ああ、きっとそうだ。単純な事なんだと思う。だけど、俺には凄く難しくて、困難な課題だ。誰かを理解しようとする事が果たして俺にもできるのだろうか。

俺が何も言わずにクリスタの方を見ていると、クリスタも不審がるようにこちらを見つめてきた。刺々しいその瞳は俺の中まで入り込み突き刺さるような気分になった。

「夜彩くんが私の意見を聞くのはすごく意外だった」

言葉こそ変わらないが、いつもよりも柔らかく感じた。いや、正確には軽減されたと言った方がいいか。

だが、俺もクリスタと同じように疑問が湧いていた。

「俺はクリスタが俺に教えてくれたのが意外だったが」

これはある意味俺の根幹に関わる部分だったし、クリスタにもリスクがあったはずだ。そもそもクリスタにメリットがあるとは思えない。

「勘違いしないでね。私は花ちゃんの恋が実るための手伝いをしただけだから」

ツンデレ的な台詞だが、そこに可愛げは一切なかった。あるのは不機嫌そうな拒絶だけだ。

「勘違いする事なんてない。クリスタが俺のことを嫌っていることを疑ったことなんて一度も無い」

俺もそう答えた。クリスタとそのような展開などあり得ないだろう。想像すらできない。

「ならいいかな」

クリスタはそういうとブイツとそっぽを向いてしまった。私の仕事は果たしたとそう言っているように見えた。だが、俺もクリスタに伝えたい事がある。

「なあ、クリスタ」

そういうと金髪の少女は不機嫌そうに俺を見た。だが、その瞳はとても真剣で、そして黙って俺の言う言葉を待っている。浮世離れたその容姿と達観した考えの彼女に

複雑な思いを抱きながら、俺は伝えるべき事を言った。

「ありがとう、気づかせてくれて。そして、やっぱり俺もクリスタが嫌いだ」

十三章

全ての始まりには終わりが存在する。恋も人生もそして星でさえも例外では無い。故に永遠は存在しない。にもかかわらず、人は永遠を求め続けてきた。永遠の愛、永遠の命、永遠の繁榮。叶わぬと分かっているのに、それでも夢見てしまう。論理で理解できても、感情では理解できてない。だから行動と認識に乖離が生まれてしまうのだ。

ならば、この彼女への愛も有限なのだろうか。きっとそうなのであろう。だが、例えば永遠で無くても、今彼女を愛している気持ちに嘘偽りは無い。それに関しては永遠に変わる事はないだろう。例えば将来違う道を歩むことになったとしても。

雪は静かに舞い降りていた。周りには人がおらず、あるのは純白の巨大な大地だ。かつて永遠に続くのではないかと思っていたこの草原も、いつしか有限であることに気付いてしまった。どれだけ大きくても永遠ではない事実に気付いてしまったのだ。それは大人になると言う事なのだろうか。それとも汚れてしまったのだろうか。

十二月二十五日。クリスマス当日であり冬休み初日の午後三時五十分。約束の時間は

近づいていた。

そもそも約束の時間に来ない可能性もありうるし、そもそも突然クリスマスの四時に会おうと言い出すなんて相当気持ちが悪い。自分でも自覚はしていた。だが、あの時なんて言って良いか分からなかったし、きっとあの時声をかけなかったら二度と彼女は俺の前に現れないじゃないかと思った。俺はとても不器用だとそう痛感した。

約束の時間の五分程前になり、俺も心の準備をするために大きな白い息を吐いた時だった。

その少女は雪に彩られ、可憐だった。雪は静かに彼女を出迎える。花のように暖かく雪のように儂い彼女は雪憐花乃の名に恥じない美しさだった。一層の事永遠に彼女を見ていたかった。止めてしまいたかった。例えばそれが間違った行為であったとしても、それくらい俺はこの瞬間をととても愛おしく思えた。

永遠など存在しない。自身の言葉を裏付けるようにその瞬間は終わった。

雪憐はいるのにただただ黙って見ている俺を心配するように見つめていた。声を掛けるべきか迷っているようだった。

見惚れしている時ではない。

俺が雪憐を呼んで、そして雪憐がわざわざ来てくれたのだから、自分から何も言わないのは失礼だ。

「雪憐。来てくれてありがとう」

これが正解かなんて分からない。でも、雪憐が来てくれた事が俺は嬉しかった。お礼を言ったのは久しぶりの気がする。数ヶ月ぶりかもしれない。お礼を言う事なんて慣れてないし、得意でも無い。だが、それでも俺はこの目の前の少女のために沢山の“ありがとう”を使いたい。

「いえ。先輩こそ待ちましたか？」

雪憐が心配そうに聞いてきた。

嬉しかった。自分の心配をしてくれたことが。

優しかった。俺の気持ち悪さに触れなかったことが。

愛していた。雪憐の全てを。

目の前の雪を纏った少女が可愛すぎて、美しすぎて、好きすぎて。あれ以来クリスマスまで会えなかったのに、雪の様に毎日毎日俺の心に愛は降り積もりどうしようもなく、ただただ俺に彼女に惹かれている事実が突きつけられた。

“愛”と言う一文字はその短さから想像できない程に、苦しく言葉で表し切れない混沌とした感情を生み出す。言うのは簡単だ、あんな短い言葉。ただ、言葉には意味がある。その意味を理解している人間がそう簡単に言えるものではない。言ってしまうもう戻れない。実際に戻れるかどうかなんてどうでも良い。だが、自分の中でそう確信が生まれてしまうんだ。

「いいや。大丈夫。そんなに待ってないよ」

俺らしくなかった。

口調も、真実を曲げたことも、この気持ちと心臓も高鳴りも。まだ何も起きて無いのに心臓は止まってくれない。脳にとんでもない量の血液が送られているような気持ちになり、自分の心臓の音がうるさい。

「そうですか、よかったです」

雪憐はそう言って無邪気に笑った。

いつも凜としていたショートカットの少女の歳に相応しく無い表情に、俺は鈍器で頭を殴られたような衝撃を与えられた。

可愛さもさる事ながら“俺の前だけで雪憐が普段見せない表情を見せてくれた”と言

う歪んだ独占欲が俺を何物にも変えられない優越感と幸福感に浸らせた。付き合ってすらいらないのに気持ち悪い。

だが、その自己嫌悪すら踏み潰してしまうほど愛はインフレを続けた。

「雪憐、あのさ…」

それより先の言葉を紡ぐとができなかった。

どう切り出すべきなのか。どれが正解なのか。バブルを起こした俺の感情は思考をぶち壊し、頭が回らない。一瞬が永遠に感じる。

何が正解か。どれが正解か。どうすれば本題に入れるか。本題は決まっているのだから話し始めれば良いと分かっているのに、話を始めることができない。これは恋のせいなのだろうか。

「先輩…」

雪憐が俺を心配するように呟いた。だが、これは雪憐に甘えてはいけない。そんなものの論外だ。俺が始めて呼び出しておきながら、雪憐に本題へ誘導してもらおうのは人としても男としても許されない。

「雪憐、俺が間違ってた」

俺は最初に呟いたのはそう言うことだった。話がまとめられてない、俺が冷静な時に添削したらきつと0点だ。

無論、雪憐は「え？」とした表情で俺を見ていた。

「間違っていたってどう言うことですか？」

雪憐は困ったように聞いた。

俺はゆっくりと小さな深呼吸をすると、天井なきバブルを続ける俺の感情を押し留める。俺はこれからバンドラの箱を開ける。それは四年前だけでは無く、今の俺と雪憐の関係に関するものだ。

「まず、四年前。俺はあの時雪憐の気持ちを考えるべきだった」

雪憐は四年前と聞いた時少しだけ顔を強張らせて緊張したような表情した。

俺は雪憐をできるだけ怖がらせないように、柔らかい表情をするように頑張った。だから、今は自分の表情を見たくない。きつとひどい顔をしている。

「それはどうしてですか？」

雪憐は静かに聞いた。対峙する二人に夕陽は照らさなかった。何故なら雲が覆っているからだ。

「あの時、雪憐は悲しんでたと思う。せめて俺は雪憐に相談するべきだったし、勝手にやるのは違かった。だから：」

俺はそこで区切りをつけた。それは幼き頃に相手を思いやる基本的な行為で、俺が感謝するのと同じように苦手な行為だ。でも、乗り越えなければならぬ。これをしなければきつと、雪憐も俺も納得できない。

「ごめん：なさい」

信じられない程幼い言葉だ。ごめんと言った後、俺は困った。何故なら“ごめん”と言う言葉は謝罪の中で非常に軽いように感じてしまったからだ。

かといって、言い直すこともできず、“なさい”をつけてしまった。我ながら情けない。全ての思考を無にするように俺は深く頭を下げた。

雪憐は何も言わず、俺を緊張した様子で見ているようだった。周りにはいつもと変わらずに雪が降っている。何故か雪憐が悲しそうな表情をしているとそう思ってしまった。「いいんです。それは私の中でも決着の付いていることですから」

顔を少し上げると雪憐は大人びて見えた。年下なのに下から見上げるまるで頼りになる年上のように感じた。

「私も先輩も今を生きているんです。過去に縛られても仕方がないじゃないですか」

そう言うと、俺の頬を優しく愛撫するように撫でた。それはゆりかごのような温もりと安心感を俺に与える。予想外な事で俺は何もできずにただただ固まって雪憐を眺めていた。

「先輩は今の私を見て欲しいな」

撫でる手を止めて、そう俺に微笑みかけた。心臓が今にも爆発しそうな勢いで動いている。頭が真っ白になってしまいそうで、めまいさえした。思考がぐちゃぐちゃになって何もかもが原形を留めていない。

「雪憐、あのさ…」

そう言いかけて雪憐が俺が今言おうとしていたもう一つの過ちのことを言っていることに気が付いた。そのことを言いたかったし、俺の本当の気持ちも言ってしまうことがあった。言うのはとても怖いのに急かすように身体の芯から燃えるように熱くなっていた。だが、今それを言うべき時じゃない。

雪憐にとって四年前のことは決着がついている？それはどう言うことなのか。分からない。聞くべきだろうか？

今までバクバク心臓がインフレしていたのが嘘のように収束した。そしてまた昔のように思考を続けている自分がいることに気がついた。それはしてはいけないことだ。こんなことじゃあ、雪憐の本当の気持ちはわからない。

「決着の付いていることってどういう意味？」

俺は聞いた。そうだ、最初から聞けばよかったんだ。目の前に本人がいるんだ。相手に聞かないで自分で勝手に推測しても相手の気持ちを理解することなんてできないのだから。

相手を信用するために相手の気持ちに近づくために、聞きたい事を聞く。きっとそれは俺の一つの成長なのだろう。

「多分みんな、先輩は悪くないなんて言いません」

撫でた時とは違い、俺達には一定の距離が空いていた。それは近いのに何故か透明な仕切りがあるようなそんな距離感を感じた。とても落ち着いていて凜としたしつかりとした立ち振る舞いだった。

「でも、私はあの時先輩が私を想ってしてくれたのを知っていますし、それに……」

雪憐はそこで言葉を区切ると、悲しそうな儂い表情をした。その痛ましいほどに悲し

げな表情はどこかで見たような気がした。

きっと、俺は雪憐が俺の事を自分のことのように痛ましく思ってくれたり、悲しんでくれたりしてくれるのが嬉しかったんだ。雪憐が俺の事を考えてくれたなんて勝手な推測でしかない事は分かっている。恋は盲点とはよく言ったものだ。

「私は先輩が辛そうにしているのをこれ以上見たくありません」

雪憐がそうきっぱりと言った事にはこの世のあらゆる善に満たされていた気がした。

先程の俺の推測が真実であって欲しいと心から願った。

俺が雪憐を想う気持ちと同じように雪憐も俺を想っていて欲しい。

「だから、先輩は悪くないですよ。例えばみんな悪いと思っても、私はそうは思っていないません」

雪憐がそう言ってくれた事はこの苦痛と後悔の世界で生きる俺に希望を与えた。他の誰でもない愛する雪憐にだ。他の物が全て無価値に見える程だった。

「私はもう逃げません。ちゃんと先輩と向き合います」

雪憐が真っ直ぐと俺を見据えた。大きく成長した俺の幼馴染は何もかも変わってしまったのに、何もかも変わっていないかった。

四年前の暖かみは確かにそこにあった。形を変えても本質は何も変わらない。

俺がずっと求めていた、雪憐は俺が考えていたものよりずっと魅力的だった。

「そうか。ありがとう、俺はそう言ってもらえて嬉しいよ」

俺は必死に答えた。心を込めて、想いを込めて、そして後悔しないように言葉一つ一つに希望を込めて。

何気ない吐息ひとつでさえ、今まで人生のものとは全く違うもののように感じる。

「後、四年前のこと、ちゃんと雪憐から聞けてよかった」

それは平穏を装ってもきつと声色に出してしまった。四年間の間に育まれた膨大な想いが溢れそうになっていたからだ。

いくら手を伸ばしても、いくら望んでも手に入らなかった人が俺の目の前にいる。

「だけど、クリスマスちゃんが許してくれるか分からないですね」

クリスタの名前が出てきて思わずどきりとする。心臓に針が突き刺されたような気分になる。

「クリスタは……」

クリスタの事を思ったのか少し不安そうな雪憐を目の前に俺はそう言い始めた。

どうするべきか。思考を進めると、まるで呪いのように“嘘を吐く”という選択肢が生えてきた。これは夜彩凜に寄生している害虫だ。

好きな子の前で嘘を吐くなどあつてはならない。それはきつと昔の夜彩凜でさえ納得するはずだ。

なのに、“人生で初めての大切な人に出会えた”体験をして夜彩凜は混沌としていた。だからだろうか、害虫が騒ぎ出す。

だが、俺は害虫を押さえ込んだ。“こんなものの最善の選択ではない。雪憐がクリスタと向き合うのを阻止すべきだ”と騒ぎ立てる彼らに俺は別れを告げたのだ。

全ては愛すべき雪憐のために。

「クリスタは雪憐と向き合いたいって言ってた」

雪憐はそう言うと言心したように微笑んだ。まるでその笑みは雪憐が俺を安心させるためなのではないかと、そう思ってしまった。

「だから、ちゃんと話すといいと思う」

俺がそういうと急に自分の体軽くなった気がした。俺についていた何かが消えた。まだ俺に残っている呪いも“雪憐と一緒になら”乗り越えていけるような気がする。

「分かりました」

雪憐がこくりと頷いた。いつもは凜としているのに時々素が出てしまうところがすごく可愛かった。

安心したからだろうか。特に素が完全に出し切れてなくて統一仕切れなかった感が可愛い。

「後、先輩」

雪憐がそう俺にそう尋ねる。

「ああ」

荒ぶる感情を押し殺して平穏を装って答えた。こんな可愛い後輩の問いなど、無下にできるわけではない。

「四年前は私もごめんなさい。私も先輩の気持ちをもう少し考えるべきでした」

雪憐がそう言って深々と俺に頭を下げた。俺は驚くしかなく、ただ黙って見ていた。

俺のことを考えてくれたのは嬉しかったが、それ以上に頭を下げている雪憐が似合っていないとの思いが上回った。雪憐は真っ直ぐ笑った方が絶対に似合う。

「いや、いいんだ。俺も決着はついてる」

嘘は言っていない。

それに雪憐はここにいる。過去に呪われる必要はない事は雪憐にもクリスタにも俺自身にも教わった。これから雪憐と思いい出を作ればいいのだから。

「そうですか」

雪憐は申し訳なさそうな、でも満足した表情をしていた。それを見て俺は良かったと思った。雪憐には悲しそうな顔や苦痛な顔は似合わない。

「もう一つ、俺は間違ってた」

俺がそう言くと、雪憐は少し緊張したおもむきでこちらを見てきた。

先程からバクバクうるさい心臓に急かされないように、自分に落ち着けと言いつつ聞かせていた。

これから言うのは俺の…今の想いだから。もう、言い訳も、失敗も、後悔も許されない。

息を吸う。それだけで心臓の鼓動がうるさい。まるで何かが爆発する瞬間のように感じて、一瞬なのに永遠の出来事な気がした。

「俺は今の雪憐が好きだ」

言った。

それは自分の言えるありったけの真剣さで。

それは自分の言えるありったけの想いで。

それは四年前の自分から受け継いだ：花ちゃんとの初恋と今の雪憐との恋。

四年間のこの旅の終焉だ。

「俺と付き合って欲しい」

覚悟はすでに決めた。例えこれが最悪な結末を迎えたとしても、この恋は終わる。

雪憐との関係性も変わる事なんて百も承知だ。

それでも：俺は：この想いを裏切れない：！

「先輩は私が好き：なんですか：？」

雪憐は困ったように頬を染めて聞いた。

それだけでは雪憐の気持ちは分からない。でも、即座に拒否されなかったのは俺を少しでもだけ安心させた。

一時はどうなるかと思った鼓動も相変わらざるうるさいが、少し安定した気がした。

「ああ」俺はそう真っ直ぐに雪憐を見ると、雪憐は恥ずかしがるように着ていたコート

のフードで頭を隠した。

夕陽が減っていくにつれて雪は我々の熱さを冷やすように降り積もり続けていた。

「四年前の花ちゃんじゃなくて？」

雪憐はそう俯きみに答えた。だから表情は分からない。

でも、その声色には確かに不安と熱が含まれていた。熱も今までの“優しい暖かさ”ではなく、色っぽく情熱的な熱さだ。

「俺は今の雪憐が好きなんだ」

俺はそう真っ直ぐに答える。雪憐の気持ちに答えるように俺は体の奥底から熱い何かが湧き上がってきた。その熱は全身に満たされて、雪が降っているはずなのに、俺はもう傘なんてどうでも良くなって手放してしまった。

「それが先輩の答えですか？」

雪憐のその声は、今までのどの声よりも色っぽく女性的で、愛おしく可愛い。雪憐が女の子であり当然女性であることを今まで一番よく理解してしまった。

俺は雪憐に一步近づいた。彼女に触れたかった。彼女を安心させたかった。

「そうだ」

俺はそう言うのと、雪憐にもう一步近づいた。今まではんの少しの距離しかないのにギリギリ届かなかったあの距離とは違う。今すぐにも雪憐にも触れてしまう。

「後悔しないですか？」

雪憐がそう最後に聞いた。一番真剣で不安そうな声だ。

おそらくこれは俺の初恋の最後の選択だから。

そして、もう覚悟はできている。

「絶対にしない」

俺はそう断言した。今の雪憐に恋すると決めた時に同時に俺の中で誓った事だ。

例え一億年経ったとしても、俺が今この瞬間、世界の誰よりも雪憐を愛し、世界のあらゆるものよりも大切だと思った気持ちに一切の嘘偽りはないのだから。

「私は…」

雪憐が不安そうに今にも消え入る声で呟いた。少しでも雪憐の力になれるなら。少しでも雪憐に安心して俺を選んでもらいたいから。俺は…

「雪憐」

俺はフードを出来る限り優しく外した。雪憐は抵抗せずに俯いたままだった。

ふわりとフードを外すと、ショートヘアの美しい髪も一緒に生き生きと靡いて、耳に髪がかかった。それがそれだけで、いや何気ない瞬間だったからこそ俺は好きだった。

女の子の髪の毛はとても柔らかくて、ふわふわとしたシャンプーのいい匂いがした。

雪憐は恥ずかしがるようにゆつくりと顔をあげた。10cmほどしかお互いの距離がなく俺の心臓がまたうるさくなる。だが、それでも俺はこの美しい肌の少女を間近でみて見たかった。

それは俺が生まれて初めて見る顔だった。

耳まで火照った雪憐は周りの雪さえ溶かしてしまいそうで、俺と視線をずらして何かを求めるような目ととろけるように恥ずかしがる表情。雪憐が顔を隠していた理由が分かった気がした。だが、そんなに可憐ならばひとつも恥ずかしがる必要はないのに。

「大丈夫。すごく可愛いよ」

雪憐に安心してもらいたかった。だから、俺の率直な感想を述べた。雪憐は何も言わないで恥ずかしそうに視線を逸らしていた。

「俺は雪憐の今の気持ちを知りたい」

俺はゆつくりと力強く雪憐に聞いた。俺は雪憐に教えて欲しかった。答えを求めるの

は身勝手な気はした。だけれど、それでも聞きたい。雪憐の正直な本心を。

雪憐はそっと恥ずかしがったまま俺を見る。

とくん。

目線が合うと思いがショートし体が加熱する。雪が雪憐の髪につもり、文字通り雪化粧をしていた。

「先輩はとてもばかで不器用で他人の気持ちを考えられないけれど…」

雪憐はそう拗ねるように言い、その後目線はまた逸らしてしまった。

「悩んで苦しんで考えてくれるなら」

雪憐はそう紡ぐと、ワンテンポ置くように軽く息を吐いて真っ直ぐと俺を見た。顔が紅潮している、しかしそれでもちゃんと雪憐は芯を持って自分の聞くべきことを聞くこうとしていた。

「先輩は私のための彼氏になってくれますか？」

雪憐はそう甘える様な優しい声で俺に聞く。

「ああ、約束する。雪憐に誇ってもらえるような彼氏に俺は必ずなる」

雪憐は俺に沢山の幸せを与えてくれた。そして、もし雪憐が彼女になってくれるなら、

俺はもつともつと沢山の幸せを貰ってしまうだろう。

だから、俺もそれと同じくらい雪憐に幸せをあげられる様になりたい。

「俺は間違えている事は沢山あるけど、それをちゃんと教えて欲しい。そうすれば必ず俺は雪憐の気持ちに答えられるように全力で頑張る」

それが俺に出来る精一杯の答えだった。雪憐のためならどんな努力でも出来ると思う。

「私も頑張らなきゃですね」

そう答えると、雪憐は微笑んでくれた。今までの雪憐のものとは思えないほど無邪気で自然な笑み。それはまるで心の奥底から出た表情な様な気がした。

俺も安心して、つられて笑ってしまう。

「雪憐こそ、俺でいいのか？」

俺がそう聞くと、雪憐は頷いて、俺に体を任せる様に倒れ込んできた。

雪憐の顔が俺の胸あたりに押し当たっていて、冬の厚い衣服なのに布越しに彼女と接していると思うとむず痒く心臓がバクバクと言う。

「先輩じゃなきゃダメなんです。私はあなたが好きだから」

雪憐がそう満足そうに呟いてくれた。

達成感、充実感、安心感そして高揚感。これが“幸せ”と言うものなのだと理解した。

「ありがとう。俺もだ、雪憐」

もはや、言葉なんて要らなかった。

雪憐が俺の胸から離れると俺を見上げてくる。

健康的な唇と透き通る様な肌、そして雪が絡まった女性的な髪。

俺と彼女はお互いを求めるかの様に静かな、けれど熱い情熱的なキスをした。

そして、雪は俺達の愛を歓迎するかの様に静かに降り続けているのだった。

初恋と後悔

- 2020年 執筆
- 著者 ペンギン内閣
- 編集 ペンギン内閣

© PenguinCabinet, 2020